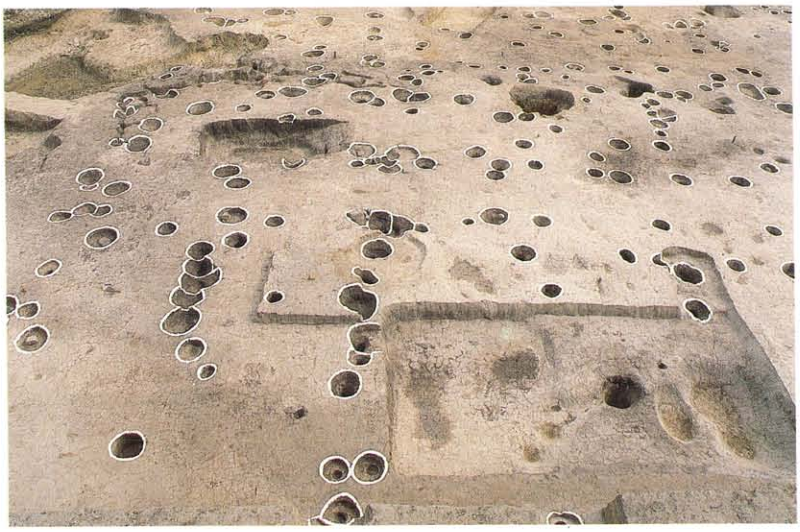
昭和63年度　遺跡現地説明会資料

神戸市教育委員会

1.　住吉東古墳埴輪列復原状況

2.　住吉東古墳出土埴輪

3.　垂水日向遺跡遠景（南西より）



4.　垂水日向遺跡Ａ地区掘立柱建物

5.　郡家遺跡水田遺構

6.　上小名田遺跡全景

7.　宅原遺跡 SB01 全景

8.　宅原遺跡 SB3001　遺物出土状況

9.　舞子・石ケ谷遺跡遠景

10.　舞子・石ケ谷遺跡火災住居址

11. 大開遺跡環濠

12. 大開遺跡 SB01

目　　次

住吉宮町遺跡 …… 1

垂水・日向遺跡 …… 13

住吉宮町遺跡 …… 25

上小名田遺跡 …… 37

郡　家　遺　跡 …… 49

宅原遺跡豊浦地区 …… 61

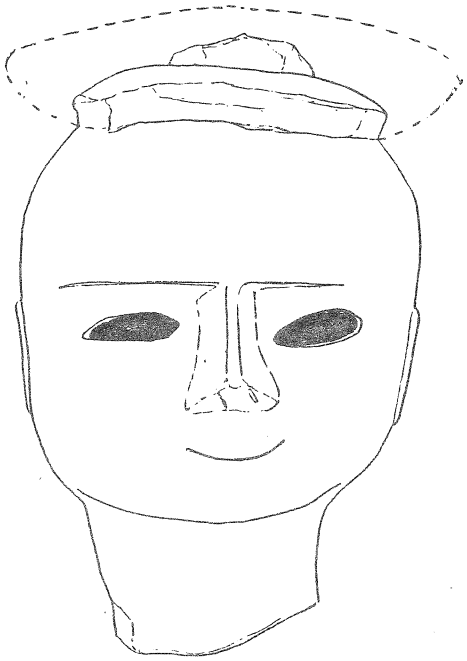
舞子・東石ケ谷遺跡 …… 81

大　開　遺　跡 …… 101

表紙は，昭和63年８月７日開催の
住吉宮町遺跡現地説明会風景

住吉宮町遺跡

現地説明会資料



昭和63年５月29日

神戸市教育委員会

調査については，神戸市文化財専門委員の小林行雄，檀上重光，宮本長二郎の三先生に御指導を得ました。また，灘神戸生活協同組合の御協力 を得ています。

（表紙　　住吉東古墳出土　人物埴輪　正面スケッチ）

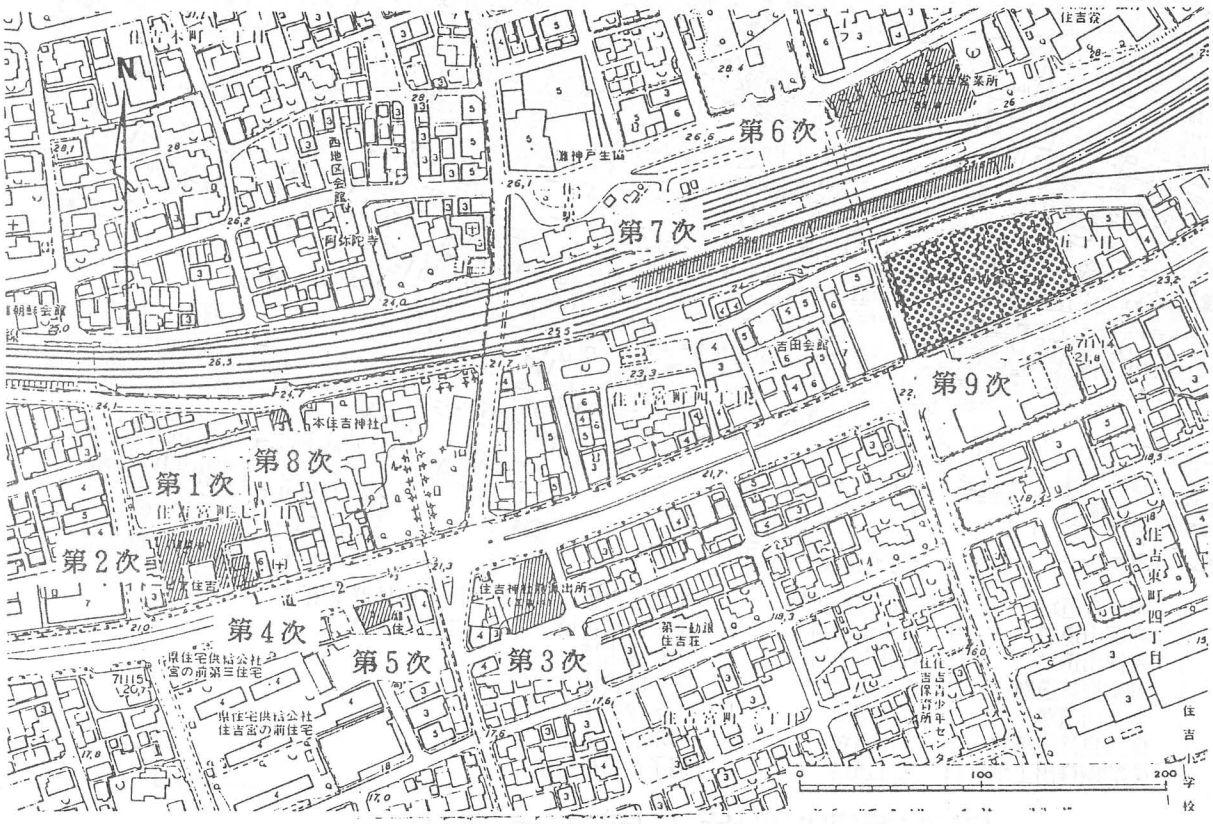
（裏表紙　住吉東古墳出土　人物埴輪　側面スケッチ）

1.位置と環境

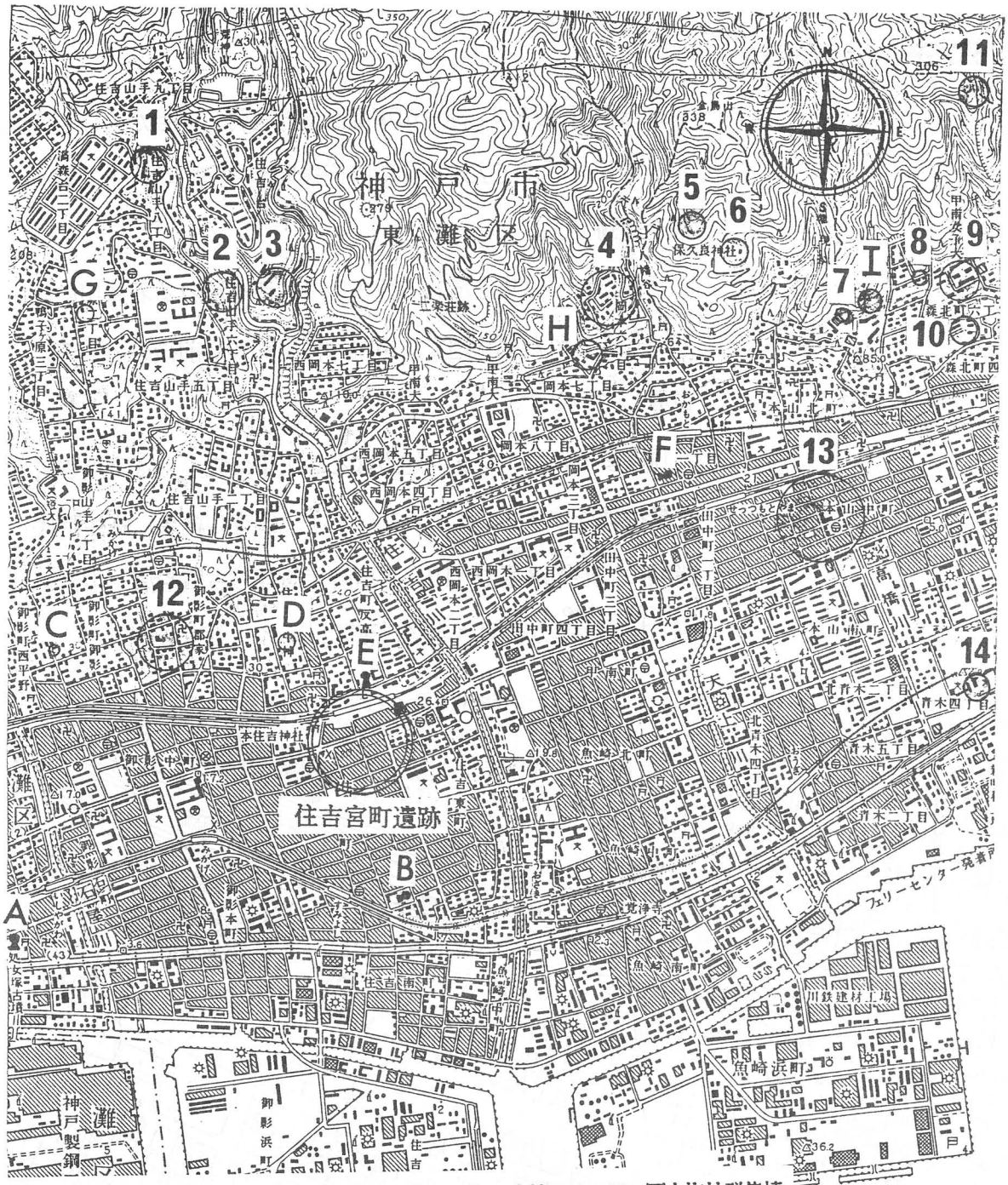
住吉宮町遺跡は，神戸市東灘区住吉宮町７丁目から住吉東町５丁目付近まで広がる弥生時代後期から室町時代まで続く複合遺跡です。

このあたりは東を流れる住吉川や，西を流れる石屋川によって形成された扇状地で，遺跡は標高約20㍍前後のところに位置しています。

現在までにマンション建設などの工事に先立って実施された発掘調査は８回におよんでいます。調査の結果，弥生時代後期の方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）や水田，古墳時代後期の古墳や溝，中世の掘立柱建物（ほったてはしらたてもの）等が発見されています。



住吉宮町遺跡位置図



1 渦ヶ森遺跡
2 赤塚山遺跡
3 荒神山遺跡
4 岡本梅林遺跡
5 金鳥山遺跡
6 保久良神社遺跡
7 生駒銅鐸出土地
8 森銅鐸出土地
9 坂下山遺跡
10 森北町遺跡
11 森奥遺跡
12 郡家遺跡
13 本山遺跡
14 深江遺跡

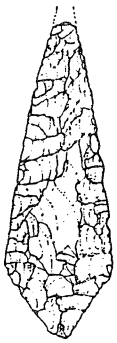
A 処女塚古墳
B 東求女塚古墳
C 伊賀塚古墳
D 庚申塚古墳
E 坊ケ塚古墳
F へボソ塚古墳
G 鴨子ケ原群集墳
H 岡本梅林群集墳
I 生駒群集墳

住吉宮町遺跡と周辺の遺跡

2

周辺の遺跡　当遺跡に最も近い遺跡としては西北約500 ㍍にある郡家遺跡が知られています。

郡家遺跡は，御影町から御影中町一帯に広がっていると考えられる弥生時代後期から鎌倉時代にかけての複合遺跡です。城の前地区では弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居が発見されています。また，大蔵地区では奈良時代の掘立柱建物が発見されており，菟原郡衙（うばらぐんが）の有力な推定地となっています。

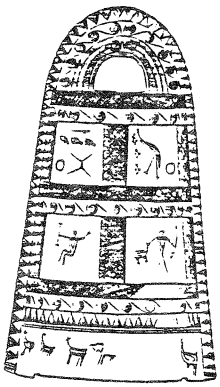


滝ノ奥遺跡出土
有舌尖頭器

当遺跡の南方，海岸線に近い所には「葦屋（あしや）の菟名負処女（うなひおとめ）」をめぐる悲恋伝説で有名な処女（おとめ）塚古墳（前方後方墳）・東求（もと）女（め）塚古墳（前方後円墳）・西求女（もとめ）塚古墳（前方後円墳）の３基の古墳があります。これらの３古墳は古墳時代前期に築造されたものと考えられています。

また，扇状地の高い所に築かれた前期古墳としては，岡本にあったヘボソ塚古墳が知られています。

これに続く中期の古墳は，東灘区内では現在まで発見されていません。



桜ケ丘４号銅鐸

このほか，住吉川の上流の丘陵上には弥生時代中期から後期の高地性集落である，荒神山遺跡（住吉台）・赤塚山遺跡（住吉山手）や渦ヶ森銅鐸出土地（渦ヶ森台１丁目）などがあります。また，鴨子ヶ原周辺や岡本６～７丁目付近には古墳時代後期の群集墳が存在していたことが，古い文献から知られています。

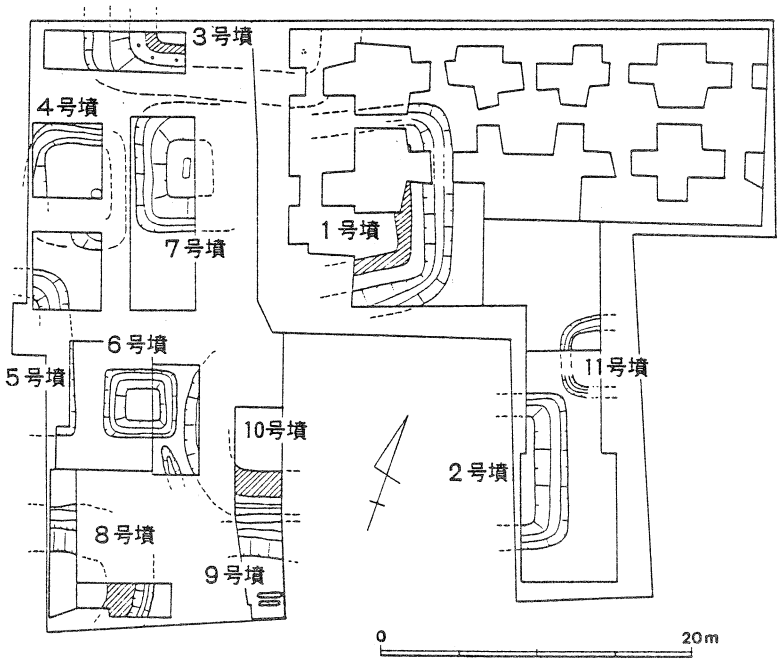
石屋川の上流部には銅鐸14口と銅戈７口が出土した桜ヶ丘

遺跡や弥生時代中期・後期末の高地性集落である桜ヶ丘遺跡B地点，先土器時代終末期の有茎尖頭器（ゆうけいせんとうき）や平安時代の経塚（きょうづか）・火葬墓等が発見された滝ノ奥遺跡（灘区高羽）などがあります。

2.住吉宮町遺跡での現在までの調査

昭和60年，住吉宮町７丁目のマンション建設工事で偶然に遺跡が発見されて以来，現在までに今回の調査を含め９回の調査が行われました。７丁目付近での３回の調査では１辺10ｍ内外の小型の方墳が11基が群集し，小型の箱式石棺などが見つかりました。

また，ＪＲ住吉駅の建て替えに伴う発掘調査では，中世の掘立柱建物や古墳時代後期の方墳，弥生時代後期の方形周溝墓や土器棺，水田跡などが発見されました。

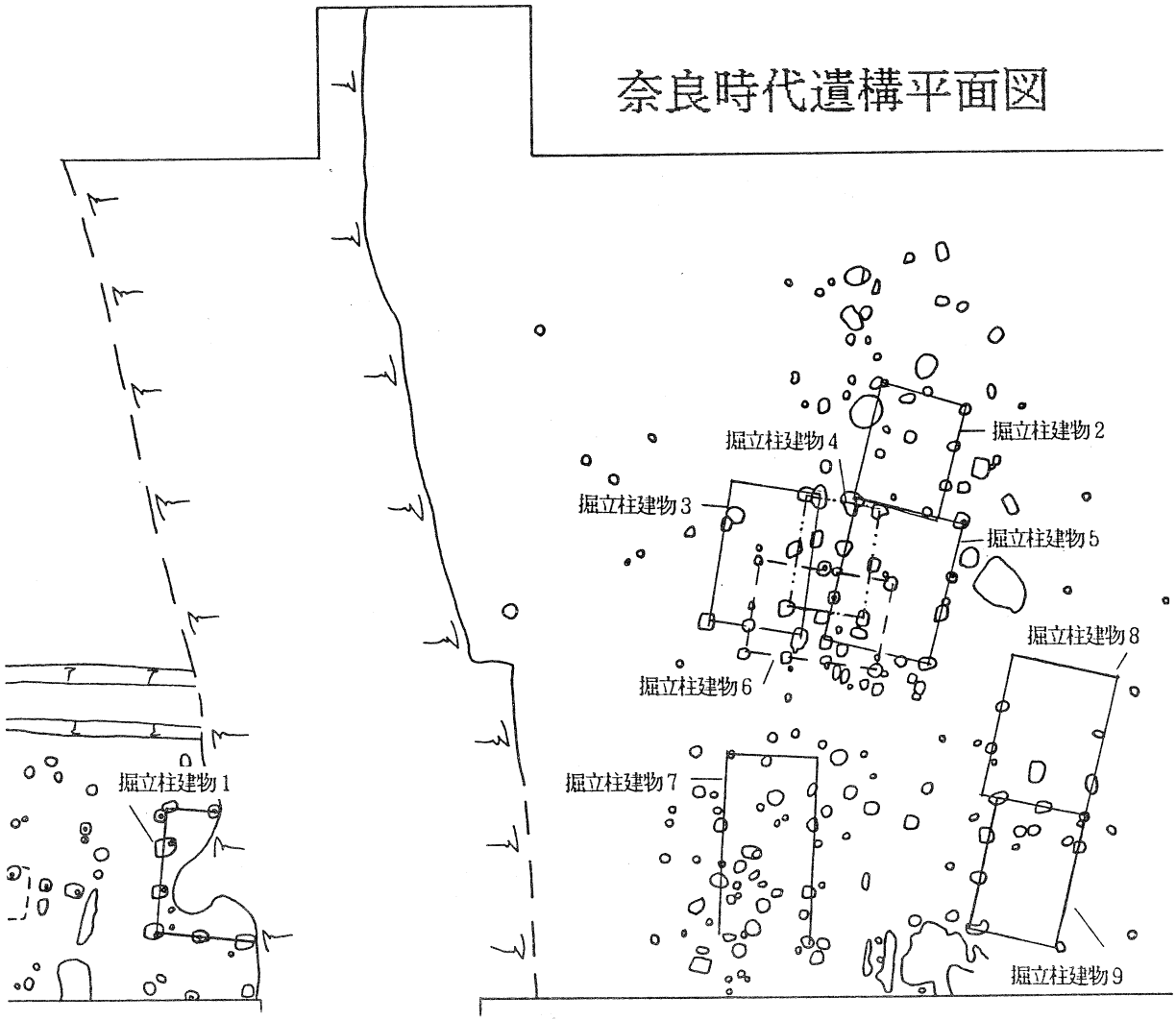


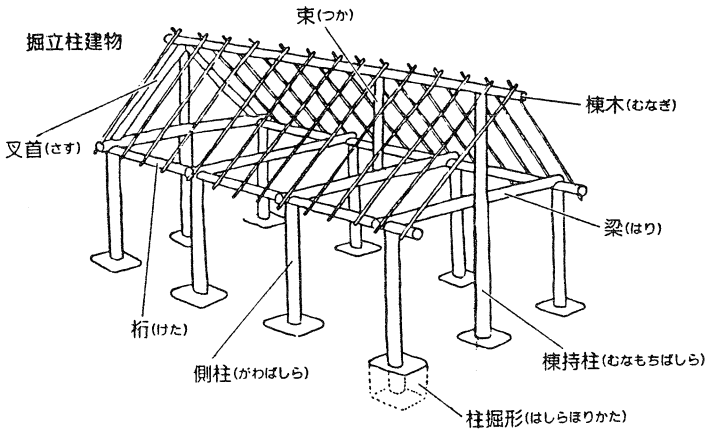
住吉宮町遺跡第１次・第２次調査検出古墳群

3.調査の概要

今回の調査は，灘神戸生協加工工場跡地に駐車場ビルが建設されるため，それに先立って工事予定地の範囲約 3,000㎡を対象として，昭和63年４月１日から発掘調査を行っています。

奈良時代　奈良時代の遺構としては柱穴約 100基を発見しています。これから復元される建物は現在まで９棟あります。





（集英社　日本古代史５豊饒の大地）

奈良時代掘立柱建物一覧表

	東　　西	南　　北	備考
掘立柱建物１	２間　(4.0m)	３間　(4.5m)	東に延びる可能性あり
掘立柱建物２	２間　(3.6m)	３間　(5.0m)	
掘立柱建物３	２間　(4.0m)	３間　(5.6m)	
掘立柱建物４	２間　(3.0m)	２間　(4.8m)	
掘立柱建物５	２間　(4.6m)	３間　(5.6m)	
掘立柱建物６	３間　(5.6m)	２間　(3.8m)	
掘立柱建物７	２間　(3.6m)	３間　(7.5m)	
掘立柱建物８	２間　(4.5m)	３間　(5.6m)	
掘立柱建物９	２間　(3.8m)	３間　(5.6m)	

古墳時代　古墳時代の調査は奈良時代の遺構が発見されなかった調査区の北西部で行っています。ここでは古墳時代後期（6世紀初頭）の帆立貝式古墳が発見されています。

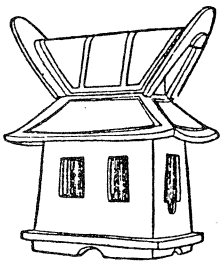
この帆立貝式古墳は「住吉東古墳」と命名しました。

住吉東古墳　この古墳は全長24m・後円部径18m・造り出し部の長さ6mの帆立貝式古墳です。古墳の周囲を巡るように円筒埴輪や朝顔形埴輪が樹立されています。

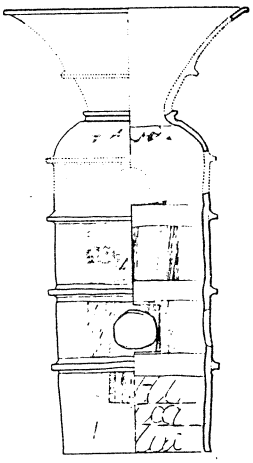
また，人物埴輪や家形埴輪・馬形埴輪などがくびれ部付近に配置されています。

現在，調査中ですので正確な埴輪の数や種類などは不明な点もありますが，120 本以上の埴輪がこの古墳に使われたものと思われます。

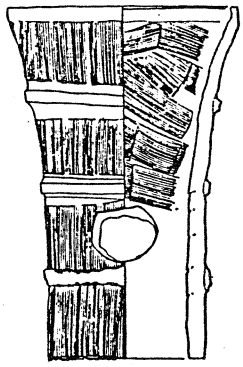
巫女



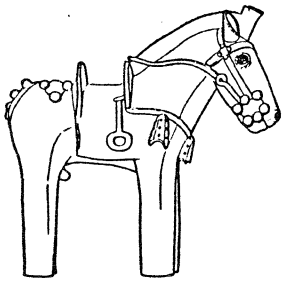
家形埴輪



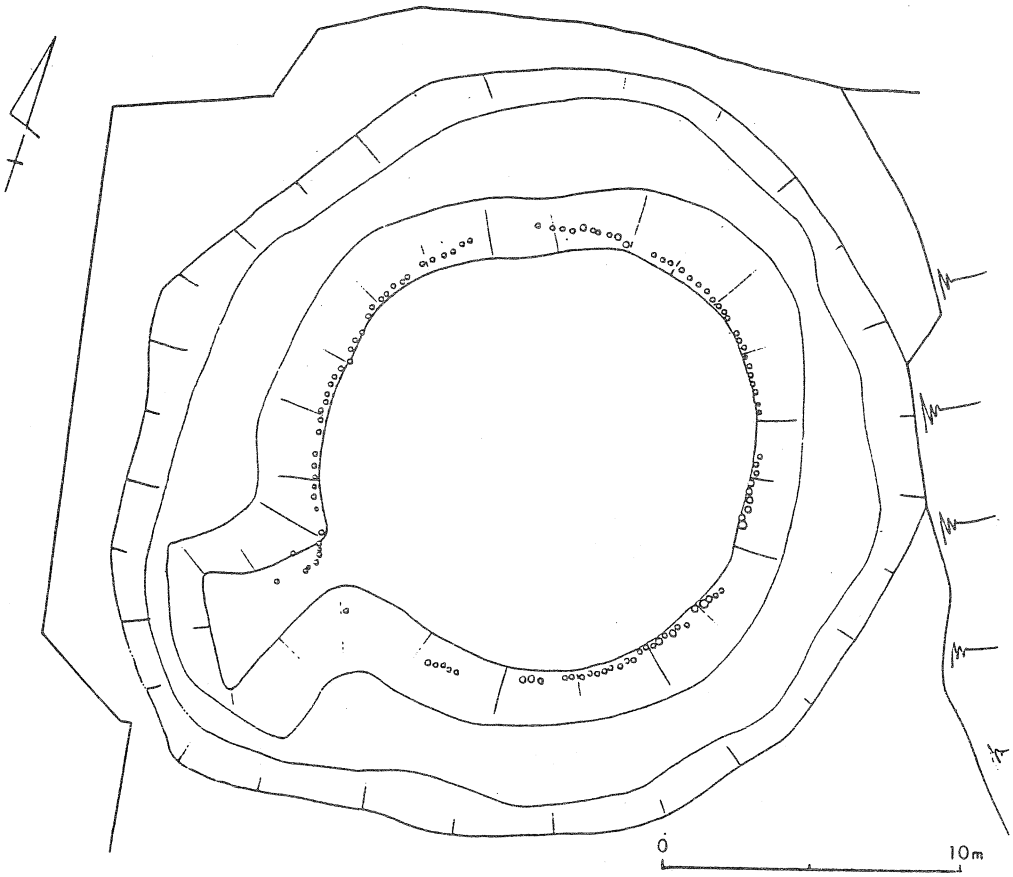
朝顔形埴輪



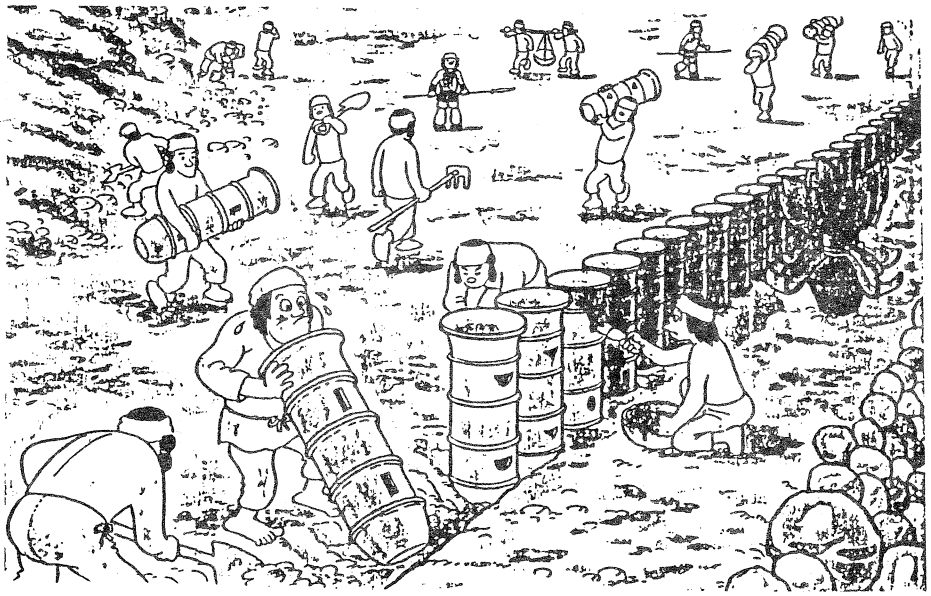
円筒埴輪



馬形埴輪



住吉東古墳実測図



（小学館版　学習まんが少年少女日本の歴史2）

8

4.まとめ

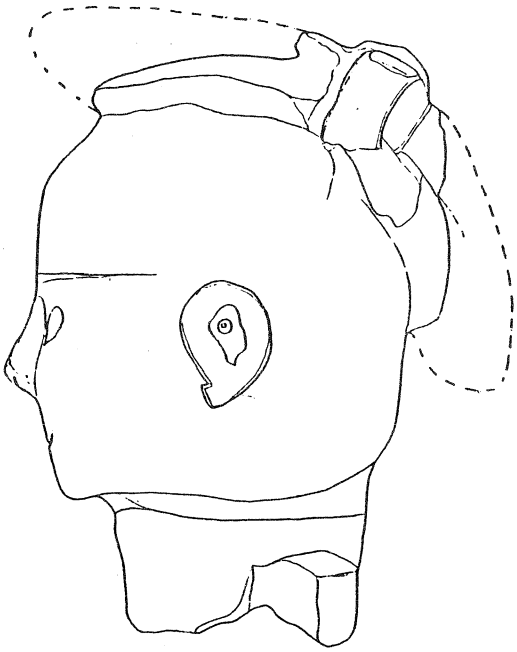
今回の調査でわかったことは

① 今まで住吉宮町遺跡では，奈良時代の遺物は発見されていましたが，遺構が発見されず，どのようの性格の遺跡か不明でした。今回，大型の方形の掘方をもつ掘立柱建物が発見されたことによって，この付近に当時の集落が存在したことがわかりました。

② 今まで発見されていた古墳は小型の方墳でしたが，今回発見された住吉東古墳は帆立貝式古墳という特殊な墳形をもち，規模も24mと大きいことから北西約200 mにあったといわれる坊ヶ塚古墳（前方後円墳　全長約40m）とともに住吉宮町古墳群の中では有力な古墳と考えられます。

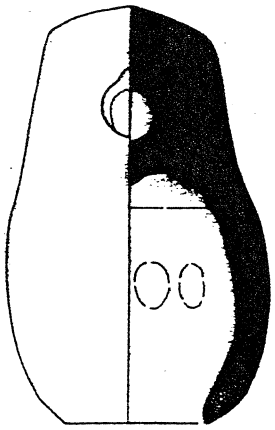
③ これまでの住吉宮町遺跡の発見の中で，特に驚くのは，一般的な古墳が丘陵の上や沖積地でも比較的高い所に造られているため，発見も容易なのですが，この遺跡の場合，古墳築造後まもなく洪水のため古墳が地中に埋まっていたため，近年まで発見されませんでした。自然の災害の脅威を知るとともに，地中から甦った遺跡の生命力の強さにも驚きを感じます。

今後，調査を引続き実施しますので他の古墳や遺構も発見されることが期待されます。

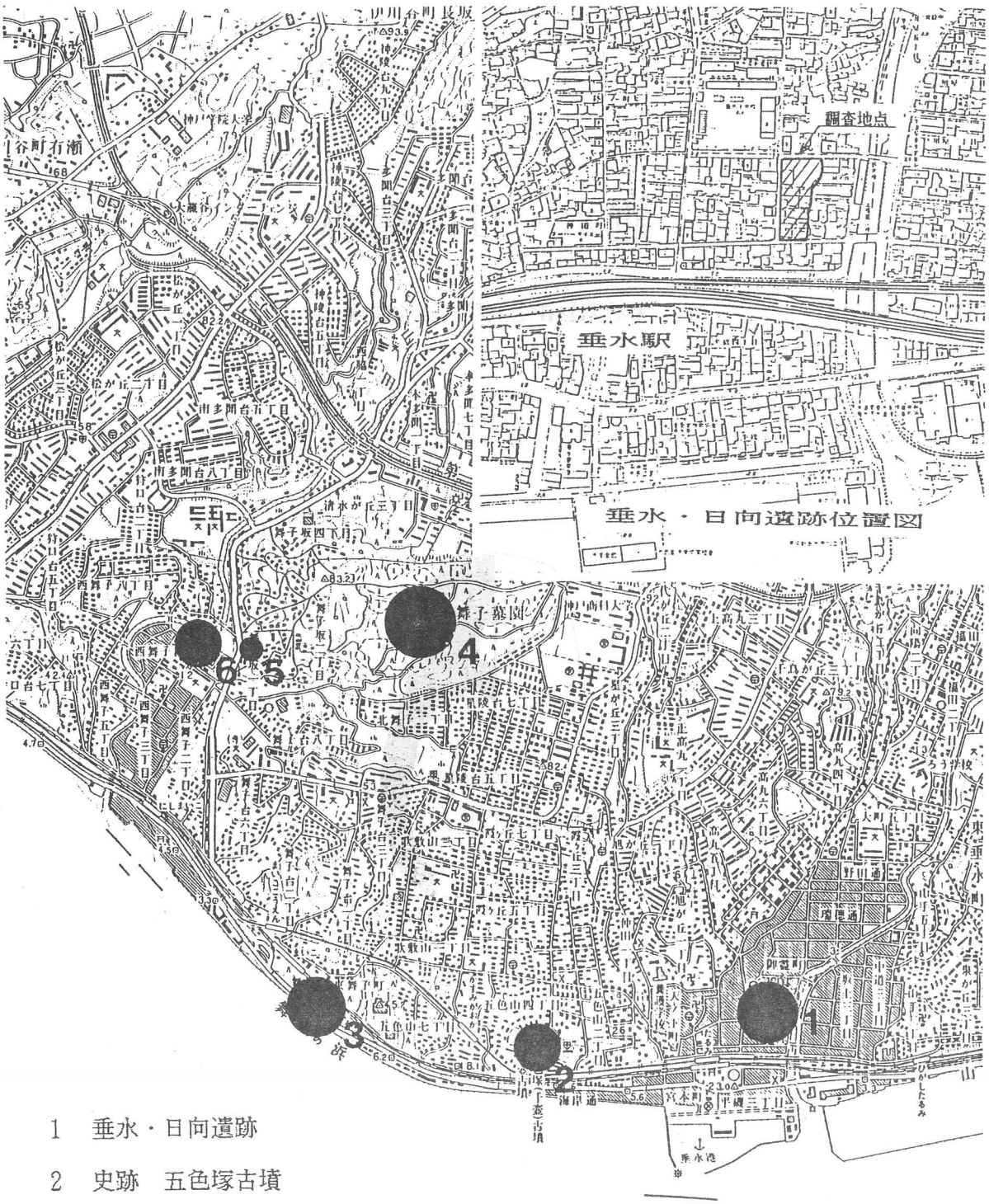


垂水・日向遺跡

現地説明会資料



昭和６３年６月２６日
(財) 神戸市スポーツ教育公社
神戸市教育委員会



1　垂水・日向遺跡

2　史跡　五色塚古墳

3　舞子浜遺跡

4　舞子坂遺跡　舞子古墳群

5　投ケ上銅鐸出土地

6　大歳山遺跡

周辺の遺跡　S＝1:25,000

1．位置と環境

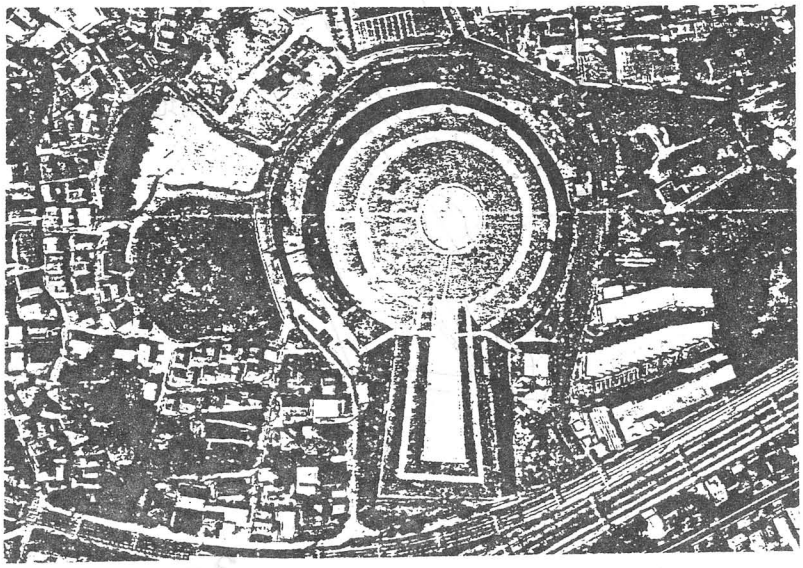
神戸市垂水区名谷町付近に源を発する福田川は、ほぼ南西に流れて明石海峡に注ぎ込みます。垂水・日向遺跡はこの川の河口付近の段丘上にあります。またこの遺跡の東は山と海が迫ったせまい海岸線であり、大きな集落が造られる平地がありません。この遺跡のある福田川河口付近に達してやや広い平野部が存在します。また、調査地点から南西へ約300 ㍍には古代に式内社として朝廷の保護を受けた海神社があります。

周辺の遺跡

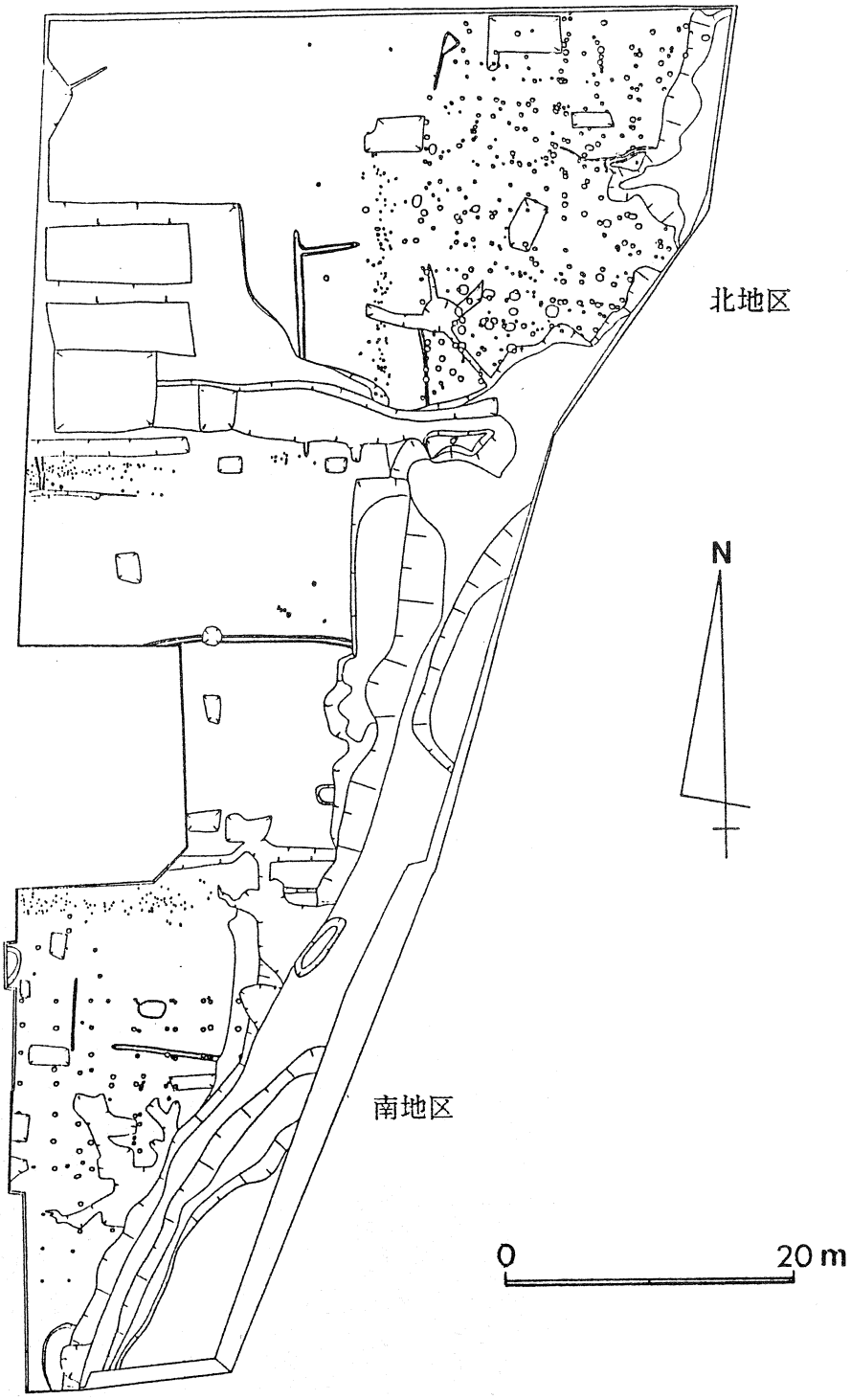
摂・播国境に流れる堺川付近には先土器時代～縄文時代にかけての遺跡である境川遺跡があります。また垂水・日向遺跡西方を流れる山田川東岸には、縄文時代～古墳時代にかけての複合遺跡の大歳山遺跡、投ケ上銅鐸出土地があります。当遺跡の西方約１㎞には県下最大の古墳として名高い史跡五色塚古墳や円筒埴輪棺が出土した舞子浜遺跡が存在し、その北の舞子丘陵には弥生時代後期の舞子坂遺跡や、古墳時代後期の群集墳として知られた舞子古墳群があります。

2．調査に至る経過

垂水・日向遺跡の存在する福田川下流付近は、遺跡の存在が明らかではありませんでした。ところが垂水駅周辺の市街地再開発が行われることとなり、遺跡の存在を確かめるための試掘調査を行ったところ、平安時代の土器片や柱の跡が発見されました。



-2-　史跡五色塚古墳



遺構配置図

-3-

3．調査の概要

今回の調査は、再開発ビル建設が計画されている敷地内の約 3,000㎡について、昭和63年３月から発掘調査を行っています。

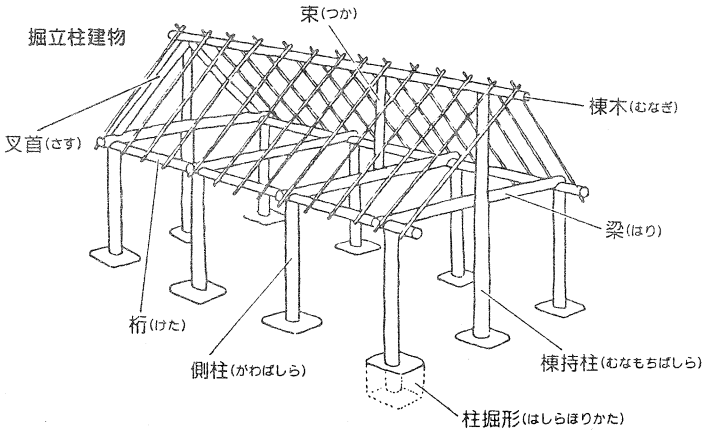
現在までに確認されたものは、平安時代～鎌倉時代の遺構（柱穴200 基以上、土坑４基、溝８条）、室町時代の川の跡古墳時代の遺物包含層などです。

平安時代～鎌倉時代
（約800 ～900 年前）

200 基以上の柱穴から復元された掘立柱建物址は現在までに15棟確認されています。これらの建物は、一定の範囲内で重なり合って造られており、何回かの建て替えが行われているようです。また、それらの建物群の境には細い杭を打ち込んだ跡がたくさん見つかっています。これは屋敷地を囲む柵や垣根の痕跡ではないかと考えられます。このような建物群が今回の調査範囲内で２か所確認されましたが、その間は遺構はあまり存在せず、かなり広い空間があったものと推定されます。

このような、平安時代～鎌倉時代の生活空間の在り方が確認されたことは重要なことです。

また、付近からは、漁具である蛸壺や網に取りつける土錘などの海に関係する遺物がいくつか出土しています。これらの遺物や遺跡の立地条件から考えて、ここに生活していたのは、海に関わりを持った人々であると考えられます。



集英社　日本古代史５　豊饒の大地より転載

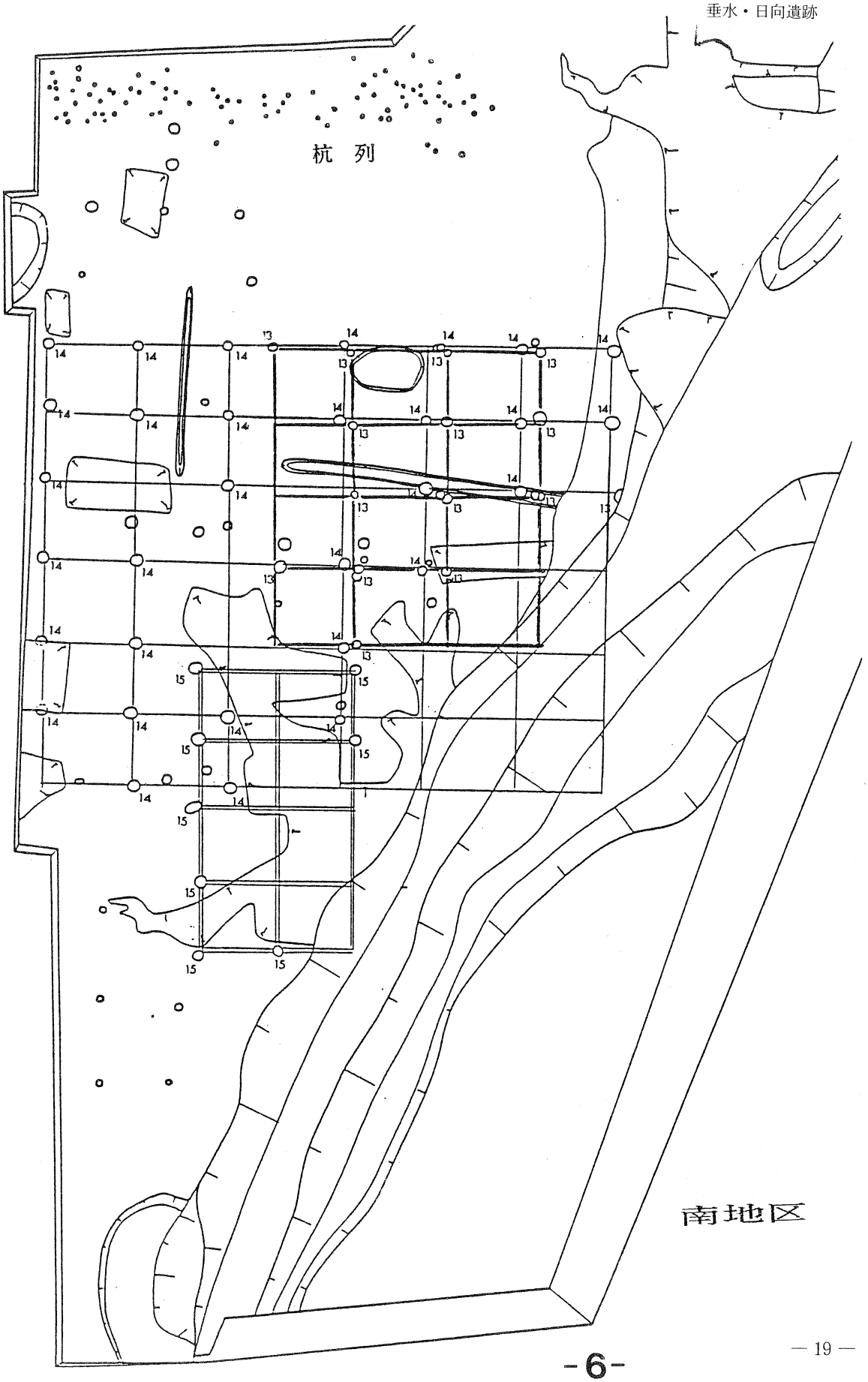
一口メモ

同じ数字を違う色で結んでみましょう

一戸一戸の家がよくわかりますよ＊＊

掘立柱建物の番号は７ページの一覧表

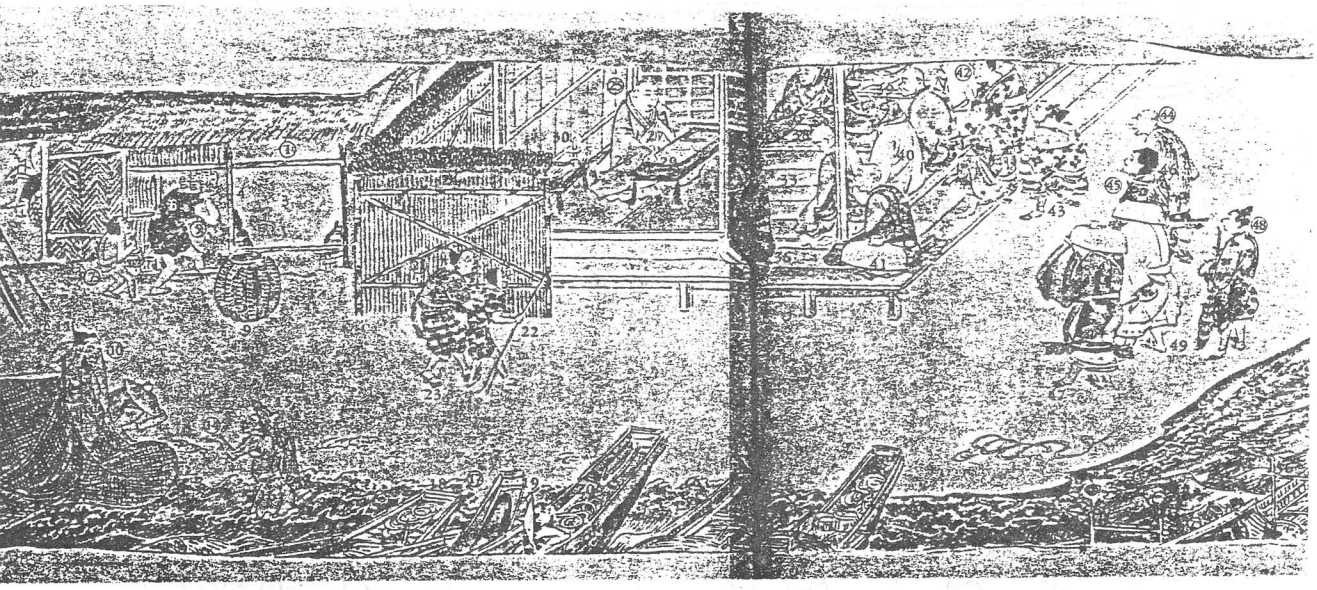
の番号と一致しています。＊＊＊＊＊



-6-

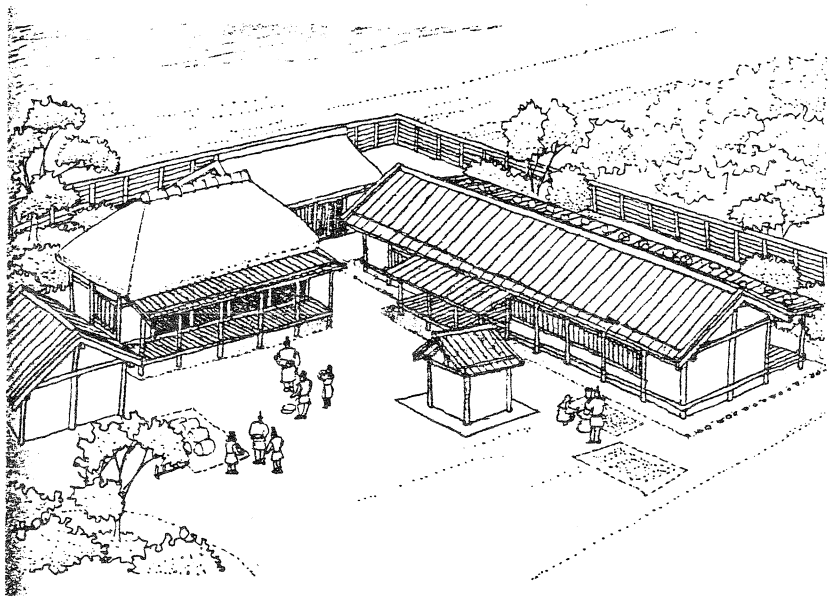
掘立柱建物一覧表

	東　西	南　北	備　考
掘立柱建物　1	6間（12.3㍍）	2間（4㍍）	北に延びる可能性あり
掘立柱建物　2	3間（7㍍）	4間（9㍍）	
掘立柱建物　3	2間（4㍍）	2間（3.8㍍）	東に延びる可能性あり
掘立柱建物　4	2間（4.2㍍）	2間（4㍍）	東に延びる可能性あり
掘立柱建物　5	3間（6.7㍍）	8間（15.3㍍）	
掘立柱建物　6	2間（2.2㍍）	2間（3㍍）	
掘立柱建物　7	3間（6.5㍍）	2間（4.3㍍）	
掘立柱建物　8	2間（4.5㍍）	2間（3.5㍍）	東，南北に延びる可能性あり
掘立柱建物　9	2間（3.8㍍）	2間（3㍍）	東，南に延びる可能性あり
掘立柱建物１０	3間（5.4㍍）	4間（7.4㍍）	東に庇を持つ可能性あり
掘立柱建物１１	2間（4.2㍍）	2間（4.2㍍）	南，東に延びる可能性あり
掘立柱建物１２	2間（3.3㍍）	3間（3.8㍍）	
掘立柱建物１３	3間（7㍍）	4間（7.5㍍）	東に延びる可能性あり
掘立柱建物１４	6間（14.5㍍）	6間（11.3㍍）	東西に延びる可能性あり
掘立柱建物１５	2間（4㍍）	4間（7.5㍍）	東に延びる可能性あり



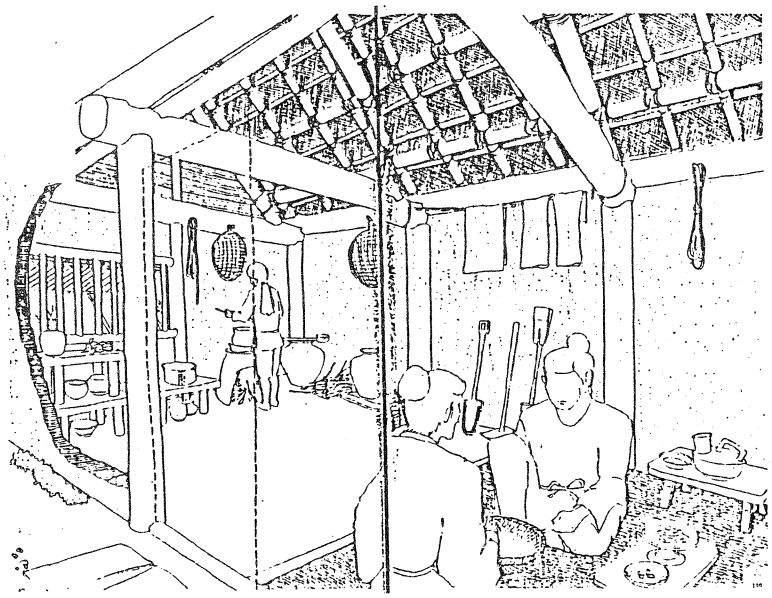
法然上人絵伝に描かれた鎌倉時代の漁村の風景

平凡社　日本常民生活絵引　第５巻より転載



富山県

じょうべのま遺跡の建物復原



掘立柱建物の中の様子

岩波書店

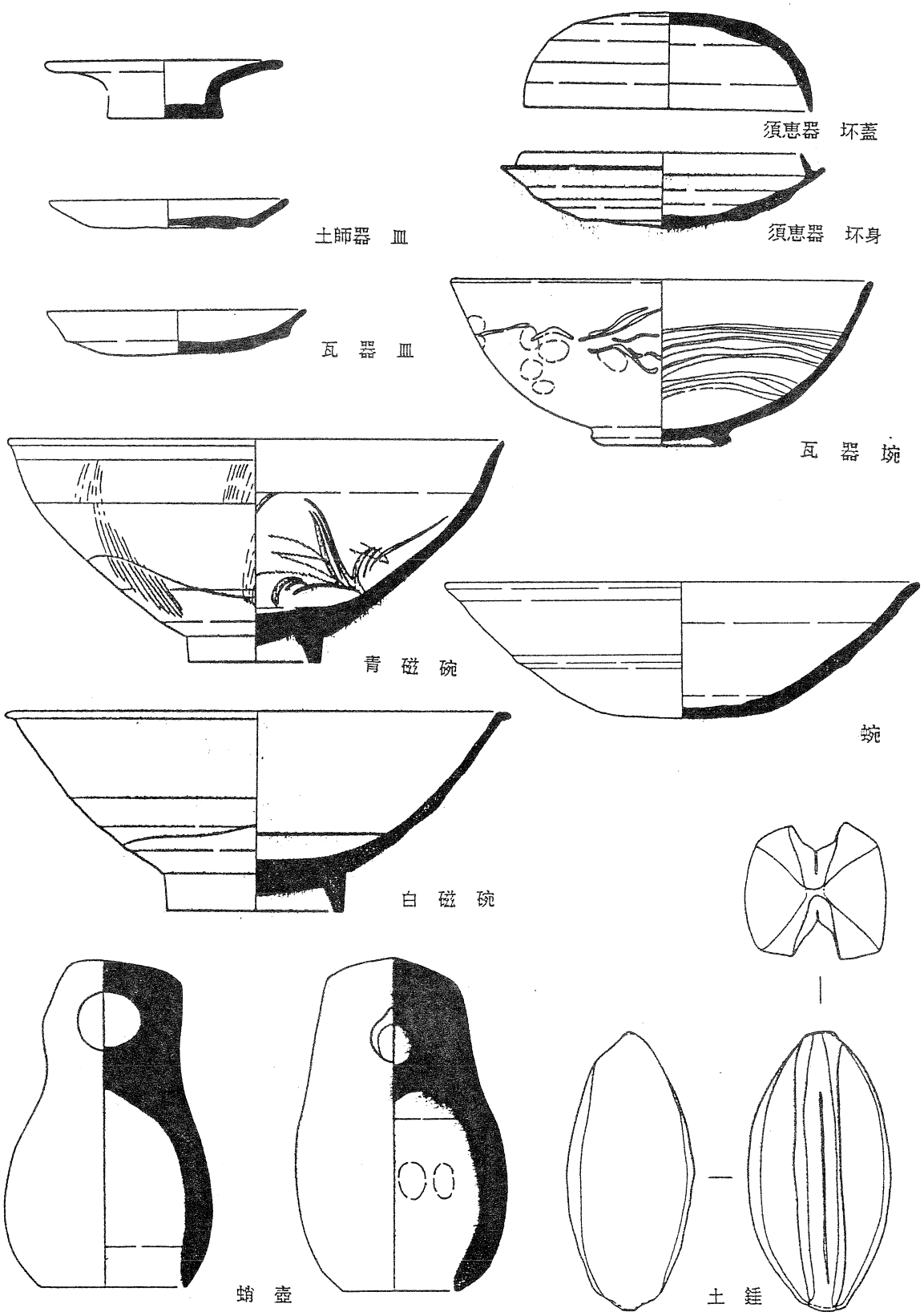
古代の村　鬼頭清明著より転載

室　町　時　代
（約500 年前）

平安時代～鎌倉時代に掘立柱建物が存在した地面は室町時代ごろに洪水によって削られています。これは当時の福田川の氾濫によるものと推定されます。

古　墳　時　代
（約1,400 年前）

平安時代～鎌倉時代の建物は古墳時代の土器を含んだ土を掘りこんで造っています。まだ未調査なのでくわしいことはわかりませんが、古墳時代後期の土器がその土の中から発見されています。



出土遺物　S＝1：2

4．まとめ

調査は継続中であり、結論を述べることはできませんが、現在までに判明したことは以下の通りです。

（1）平安～鎌倉時代の集落址、室町時代の川の跡を発見したことは、遺跡の存在が明らかでなかった福田川下流付近の開発の歴史を知る上で重要な資料となりました。また、当時の人々が柵や垣根などで区画された屋敷地内で生活を営んでいたことがわかりました。また出土遺物により、海に関わりをもった人々が生活をしていたと推定されます。

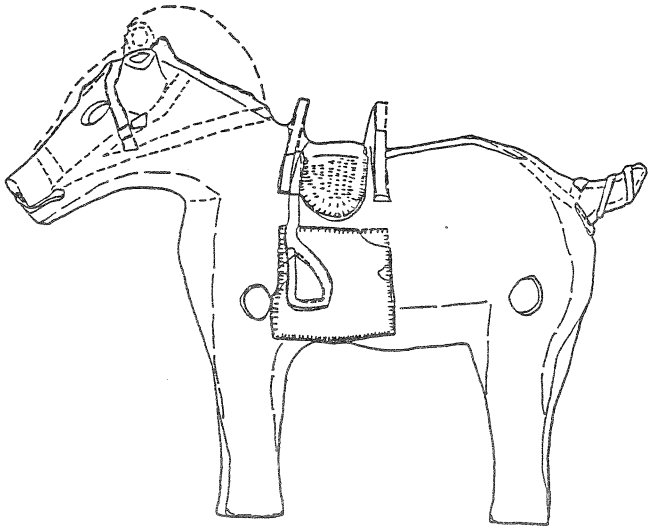
（2）この遺跡は古墳時代～室町時代にわたる複合遺跡であることが確認されました。古墳時代の遺構についてはまだ調査していないためくわしいことはわかりません。

今後、引き続き調査を行いますので、古墳時代の遺構についても新たな発見が期待されます。

調査については、神戸市文化財専門委員の小林行雄、檀上重光、宮本長二郎の三先生に御指導を得ました。また、神戸市都市計画局の協力を得ています。

住吉宮町遺跡

現地説明会資料



昭和63年８月７日

神戸市教育委員会

調査については，神戸市文化財専門委員の小林行雄，檀上重光，宮本長二郎の三先生に御指導を得ました。また，灘神戸生活協同組合の御協力を得ています。

（表紙　住吉東古墳出土　馬形埴輪　側面図）

1 渦ヶ森遺跡
2 赤塚山遺跡
3 荒神山遺跡
4 岡本梅林遺跡
5 金鳥山遺跡
6 保久良神社遺跡
7 生駒銅鐸出土地
8 森銅鐸出土地
9 坂下山遺跡
10 森北町遺跡
11 森奥遺跡
12 郡家遺跡
13 本山遺跡
14 深江遺跡

A 処女塚古墳
B 東求女塚古墳
C 伊賀塚古墳
D 庚申塚古墳
E 坊ケ塚古墳
F ヘボソ塚古墳
G 鴨子ケ原群集墳
H 岡本梅林群集墳
I 生駒群集墳

0 1km

住吉宮町遺跡と周辺の遺跡

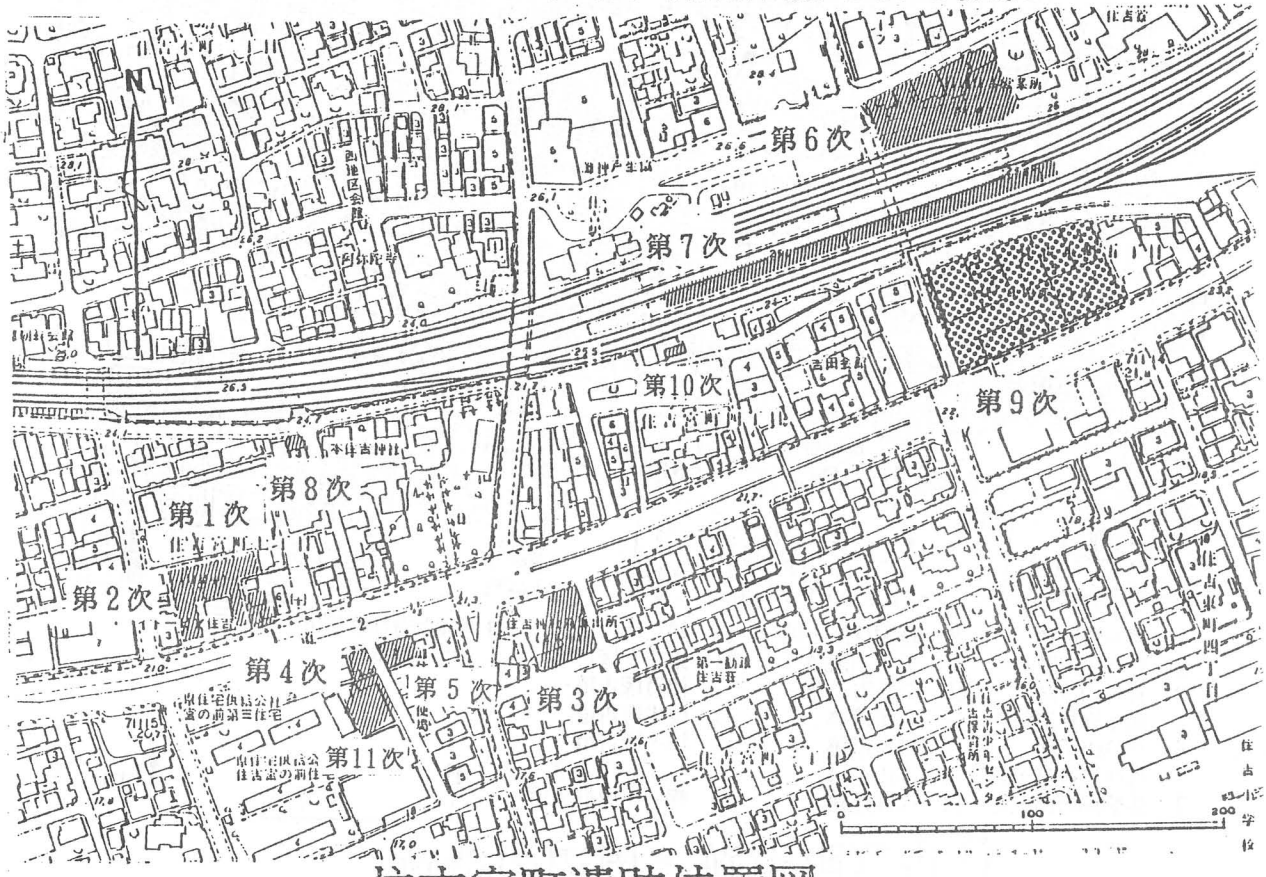
1.はじめに

灘神戸生活協同組合の食品工場跡地に駐車場ビルの建築が計画されため，試掘調査を実施したところ，地表下約3㍍のところで古墳時代の遺物包含層が発見されました。

このため，建築工事によって破損のおそれのある部分（約3,000㎡）を対象として，本格的な発掘調査を昭和63年4月1日より実施しています。

発掘調査では奈良時代の掘立柱建物（ほったてばしら）や帆立貝式古墳（ほたてがい）（住吉東古墳）などが発見されました。そのため，昭和63年5月29日に第1回の現地説明会を行いました。

その後の調査では，新たに2基の古墳と4棟の竪穴住居が多くの遺物とともに発見されましたので，その成果を見て頂くために，今回の説明会を催すことにしました。



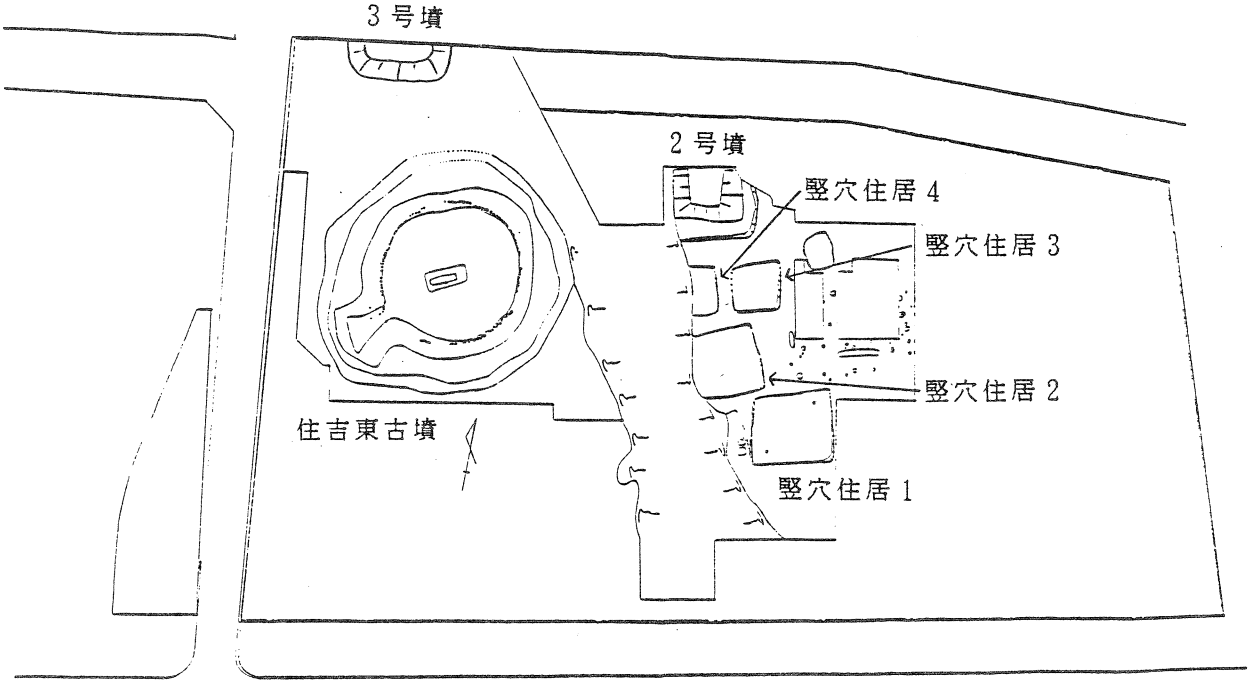
住吉宮町遺跡位置図

2.現在までの住吉宮町遺跡の調査

住吉宮町遺跡は，昭和60年にマンション建設工事中に発見されました。現在までにマンション建設や駅ビル建て替え工事などに先立って実施された発掘調査は，今回の調査を含め11回におよんでいます。

これらの調査の成果から，当遺跡は東灘区住吉宮町７丁目から住吉東町５丁目付近まで広がる弥生時代中期から室町時代まで続く複合遺跡であることがわかっています。

これまで住吉宮町７丁目付近では４回の調査を実施してきました。弥生時代の遺構としては，中期と末期の竪穴住居が発見されています。また，古墳時代後期の遺構としては，１辺10㍍内外の小型の方墳が11基群集し，小型の箱式石棺などが見つかりました。



住吉宮町遺跡遺構配置図

0　10　20M

また，ＪＲ住吉駅の建て替えに伴う発掘調査では，中世の掘立柱建物や古墳時代後期の方墳，弥生時代後期の方形周溝墓や土器棺，水田跡などが発見されました。

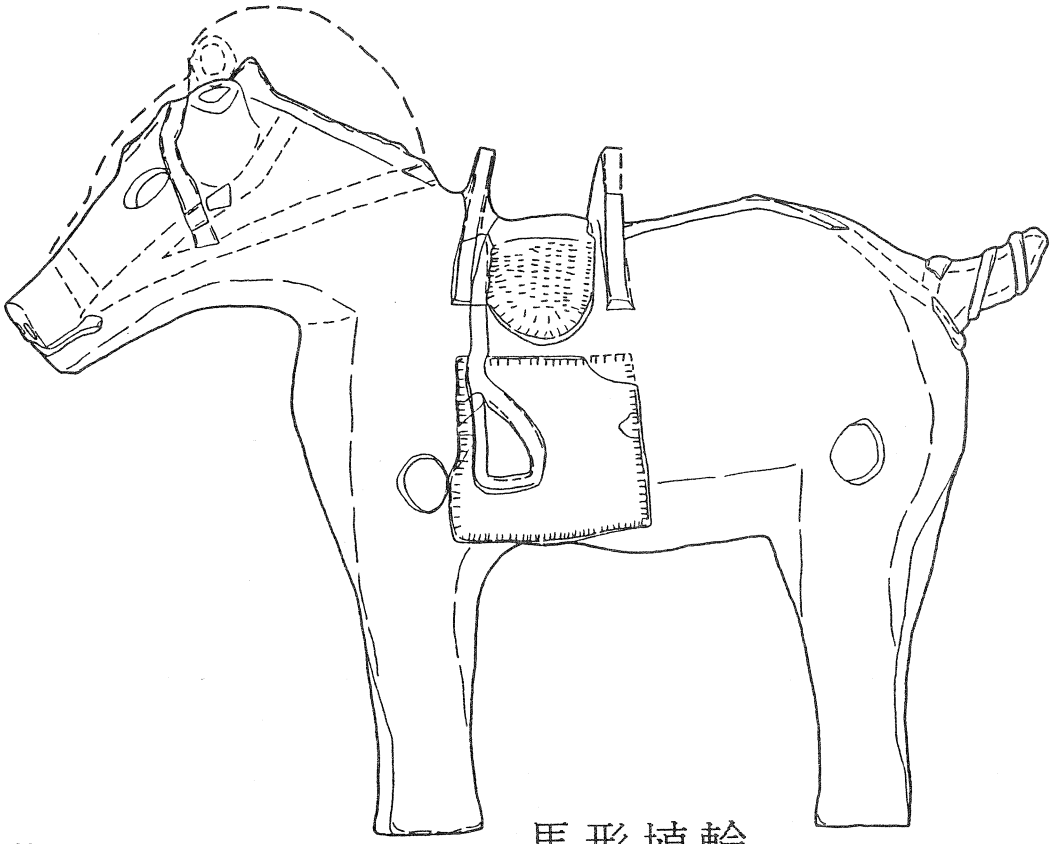
3.調査の概要

前回の現地説明会では奈良時代の掘立柱建物や住吉東古墳の埴輪の出土状態などを見学していただきました。その後，発掘調査を進めた結果，奈良時代の集落の下から，新たに古墳や竪穴住居などが多量の土器とともに発見されました。

住吉東古墳

この古墳は全長24㍍，高さ1.5㍍の帆立貝式の古墳です。円丘部は18㍍，造り出し部８㍍で古墳の周囲を巡るように円筒埴輪が配置されています。

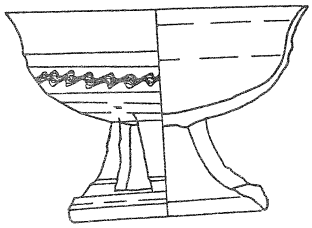
埴輪の配列は，周囲を生垣状に円筒埴輪や朝顔形埴輪が巡り，その内側に馬形埴輪や人物埴輪（巫女）が南側のくびれ部に配置されていました。



馬形埴輪

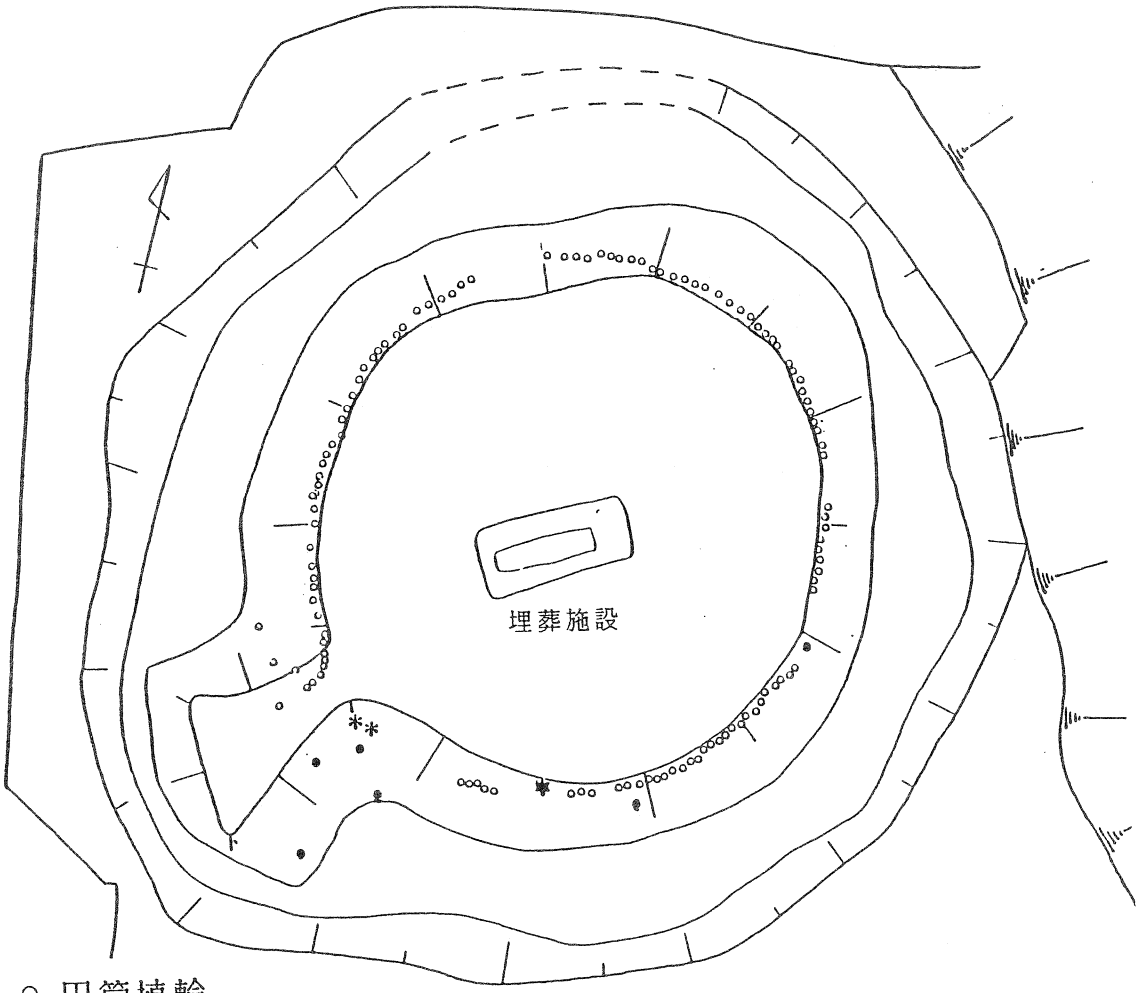
S＝1／6

古墳の上に並べられた埴輪の数は円筒埴輪約160 本，朝顔形埴輪約10本，人物埴輪（巫女）２本，馬形埴輪１本です。馬形埴輪は長さ74㌢，高さ62㌢です。



高坏（たかつき）　S＝1／4

また，円丘部の中央には人を埋葬した施設が発見されています。この施設は長さ4.4 ㍍×幅約２㍍の墓壙（ぼこう）に長さ3.2 ㍍×幅70㌢の木棺が安置されています。木棺内からは副葬された鉄製の直刀（ちょくとう）が出土しています。



○ 円筒埴輪

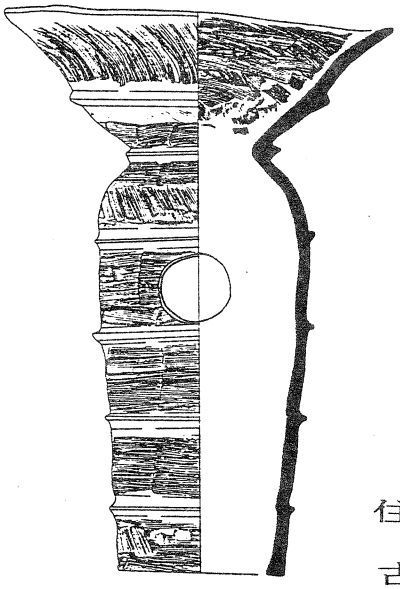
● 朝顔形埴輪

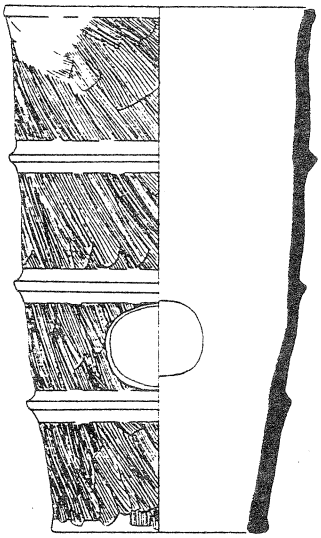
✱ 馬形埴輪

＊ 人物埴輪

0　5　10 M

住吉東古墳埴輪配置図



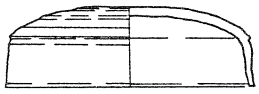


住吉東
古墳出土

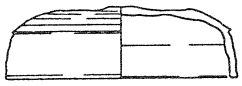
朝顔形埴輪　　円筒埴輪　S＝1／4

2号墳　調査区の中央部北側で発見された方墳です。西側を近世の洪水によって削られ，北側が調査区外にあるために大きさは不明です。墳丘に埴輪は配置されていませんが，人頭大から拳大の花崗岩の川原石を墳丘斜面に葺いています。周溝内からは葬送の祭祀に使われたと思われる須恵器や土師器などの多量の土器が出土しました。

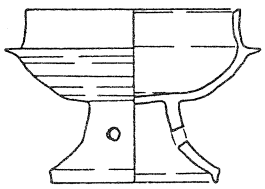
（2号墳出土遺物）



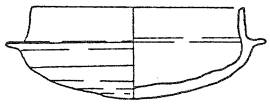
ふた
蓋



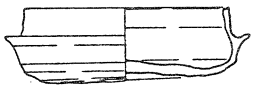
ふた
蓋



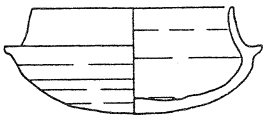
ゆうがいたかつき
有蓋高坏



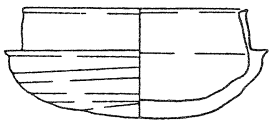
つき
坏



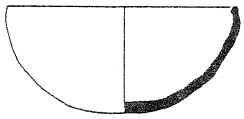
つき
坏



つき
坏



つき
坏



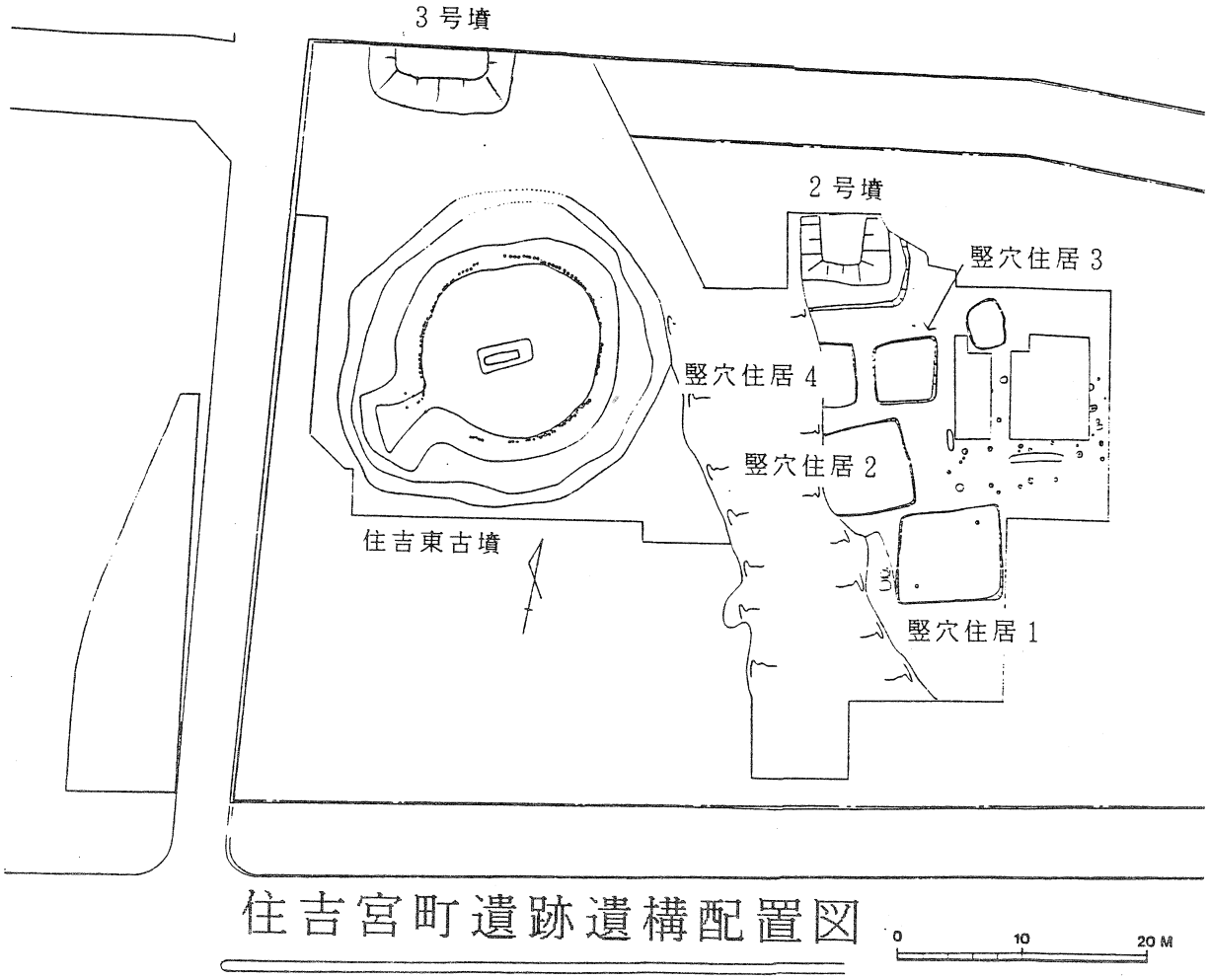
はじき
土師器椀

S＝1／4

3号墳　調査区の西方部北側で発見された東西約10㍍の方墳です。北側が調査区外にあるため南北の大きさは不明です。墳丘上には人頭大の花崗岩を巡らす列石があるほかは，埴輪や葺石はありません。

竪穴住居群は2号墳の南側に密集して発見されました。

竪穴住居1　この竪穴住居は調査区の南側で発見された，一辺8.5㍍，深さ50㌢の方形の住居です。ここからは，須恵器(すえき)や土師器(はじき)などの土器のほか，鉄鏃(てつぞく)や滑石製(かっせき)の双孔円板(そうこうえんばん)と紡錘車(ぼうすいしゃ)が各1点出土しました。

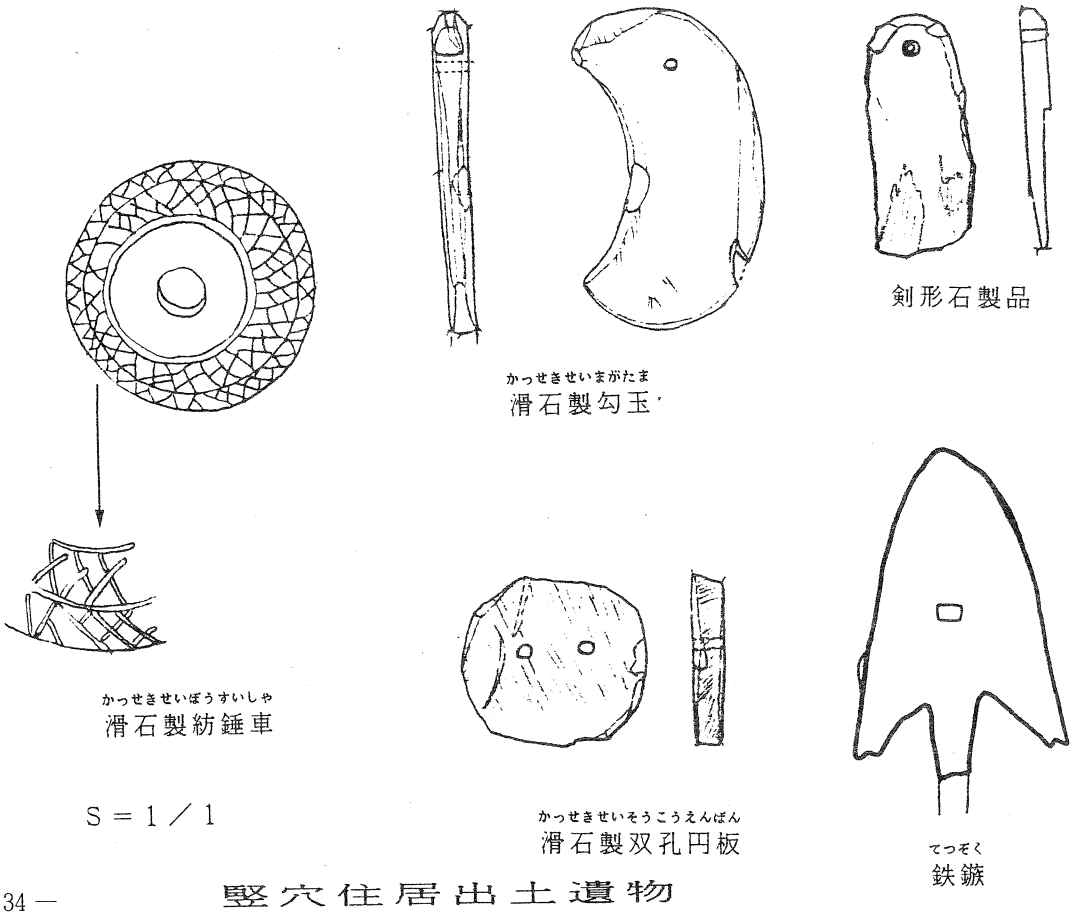


住吉宮町遺跡遺構配置図

竪穴住居２　竪穴住居１のすぐ北側で発見された東西7.3㍍，南北7.4㍍，深さ20㌢の方形の住居です。東側は２号墳同様，近世の洪水によって失われています。この住居からは須恵器や土師器などのほか，滑石製の紡錘車が出土しました。

竪穴住居３　竪穴住居２と２号墳の間で発見された東西5.6㍍，南北5.2㍍，深さ35㌢の方形の住居です。

竪穴住居４　竪穴住居３の西側に発見された南北5.2㍍，深さ15㌢の方形の住居です。東西の大きさについては，東側を近世の洪水によって失われていて不明です。この住居からは製塩（せいえん）土器が出土しました。



竪穴住居出土遺物

主要遺構一覧表

	規　　模	時　　期	主要な出土遺物
住吉東古墳	全長24㍍・高さ1.5㍍ 帆立貝式古墳	5世紀末頃	人物埴輪・馬形埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪
	埋葬施設 墓壙　長さ4.4㍍　幅2㍍ 木棺　長さ3.2㍍　幅70㌢		鉄製直刀・滑石製双孔円板
2　号　墳	一辺12～14㍍の方墳 高さ80㌢	5世紀後半	須恵器　高坏・坏・甕 土師器　甑・坏・甕
3　号　墳	一辺10㍍の方墳 高さ80㌢	5世紀後半	
竪穴住居1	東西8.5×南北8.5㍍ 深さ80㌢	5世紀後半	須恵器高坏・坏　土師器　甕 滑石製双孔円板・紡錘車
竪穴住居2	東西7.3×南北7.4㍍ 深さ80㌢	5世紀後半	須恵器高坏・坏　土師器　甕 滑石製紡錘車
竪穴住居3	東西5.6×南北5.2㍍ 深さ80㌢	5世紀後半	須恵器高坏・坏　土師器　甕
竪穴住居4	東西5.2㍍ 深さ80㌢	5世紀後半	須恵器高坏・坏　土師器　甕 製塩土器

6.まとめ

今回の調査でわかったことは

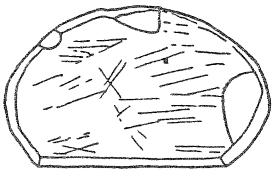
① 住吉東古墳には，円筒埴輪160本をはじめ，朝顔形埴輪人物埴輪・馬形埴輪などが配置されたことが判りました。

また，埴輪の出土状態から，配列状態も円筒埴輪と朝顔形埴輪が列をなして墳丘を取り囲み，内側に形象埴輪（くびれ部）を配置したことが明らかになりました。

② 古墳に接して竪穴住居群が密集して存在しており，こういう例はあまり認められません。一般的には古墳と集落との間には何らかの区画するものがあり，墓域と生活空間は分けられています。この住居群は古墳の祭祀と関係する遺構かもしれません。

上小名田遺跡

現地説明会資料



昭和６３年８月１４日

神戸市スポーツ教育公社

神戸市教育委員会

今回の調査については、神戸市文化財専門委員の檀上　重光、宮本　長二郎の両先生に御指導いただきました。

また、神戸市道路公社の協力を得ました。

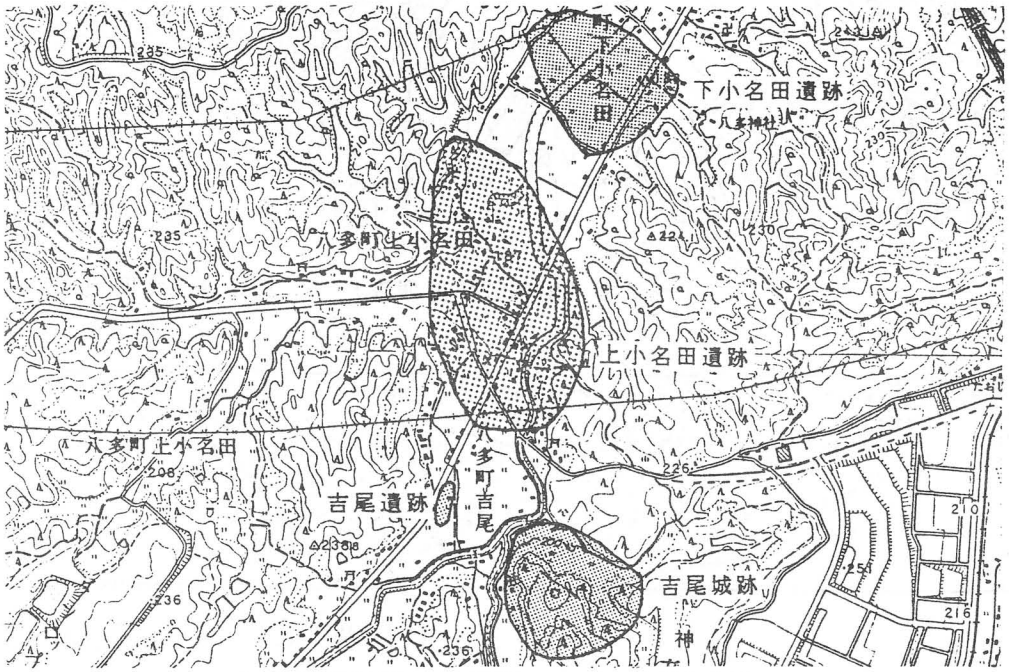
1．はじめに

上小名田（かみおなだ）遺跡は、六甲北有料道路の築造工事に伴い昨年度より発掘調査を行っています。

周辺の遺跡　これまでに八多（はた）川流域で知られている遺跡は、中世山城の吉尾城址、平安時代末の掘立柱建物・井戸などが見つかった吉尾遺跡、古墳時代・平安時代から中世にかけての遺物が出土した下小名田遺跡などがありますが、近年に発見されたものも多く、遺跡の分布範囲や内容については未だ詳しくありません。

調査の経過　昨年度は調査予定範囲内の５地区で計 3,400m²について発掘調査を行い、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物10棟をはじめ、溝・土坑・自然河道などが見つかりました。

今回、説明会を行います調査地Ⅵ区は、昨年度調査で８棟の掘立柱建物が検出されたⅤ区の北側に隣接しており、約 2,100 m²を調査しています。



上小名田遺跡　位置図　　S＝1/25,000

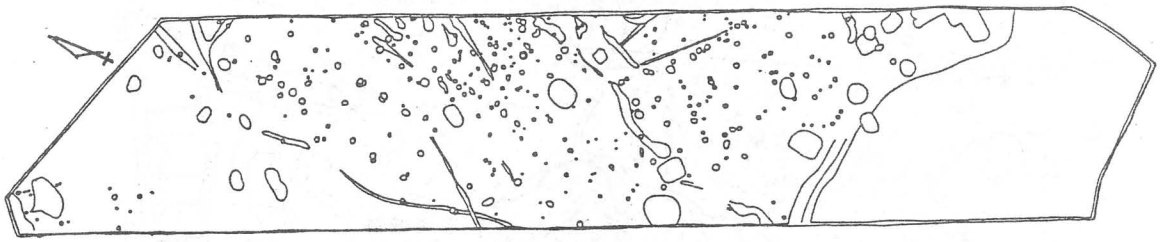
2. 調査の概要

今回の調査で見つかった遺構は、掘立柱建物12棟・土坑40基・溝13条・自然河道１条などです。このうち、掘立柱建物２棟は昨年度Ｖ区で検出したものの続きで、今回の調査によってその規模が明らかになりました。また、これら建物に伴う柱穴などの数は、520 基余り見つかっています。

これらの遺構は、出土遺物から平安時代の中頃から末頃にかけての時期で、10世紀から12世紀のものです。

調査地位置図　　S＝1/5,000

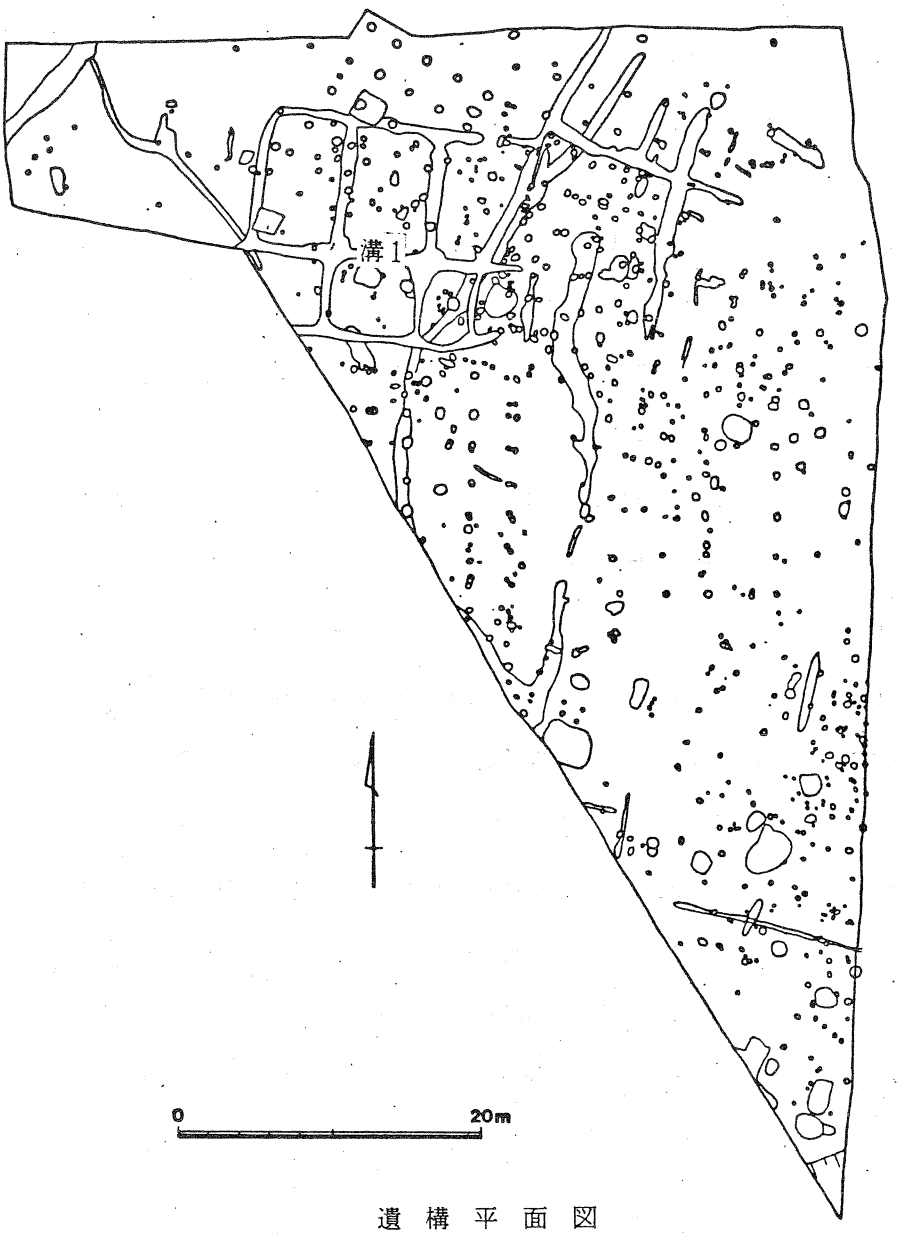
Ⅰ～Ⅴ区（昭和62年度調査）　　Ⅵ区（今年度調査）



Ⅴ区　遺構平面図　　S＝1／600

掘立柱建物　掘立柱建物は、12棟が確認されました。柱穴と考えられる穴が 520基以上検出されており、現在までに確認された12棟以上の建物があったと考えられます。

これらの建物は、方向、重なり合いの関係や出土遺物から同時期には３棟前後が建てられていたと考えられます。



遺構平面図

建物　1　　4間（10m）×4間（9m）の総柱の建物で、柱穴には柱材の残っているものがあります。

建物　2　　3間(7.9m）×3間(7.1m）の建物です。

建物　3　　5間(13.0 m）×8間(19.5 m）の規模の大きな総柱の建物です。

建物　4　　3間(7.0m）×3間(11.9 m）で、12世紀の建物と考えられます。

建物　5　　4間(9.4m）×4間（10m）で、建物4とほぼ同方向に重なり合う建物です。

建物　6　　昨年度調査で検出された建物の続きで、2間×7間で東に廂（ひさし）のつく、南北方向の建物です。規模は、7.2 m×16.2mです。

建物　7　　この建物は建て替えが行われており、僅かに方向が異なった2棟が重なり合うように検出されました。規模は、いずれも2間×7間の4面に廂をもつ、9.5 m×21.6mの当時としては大規模な建物です。

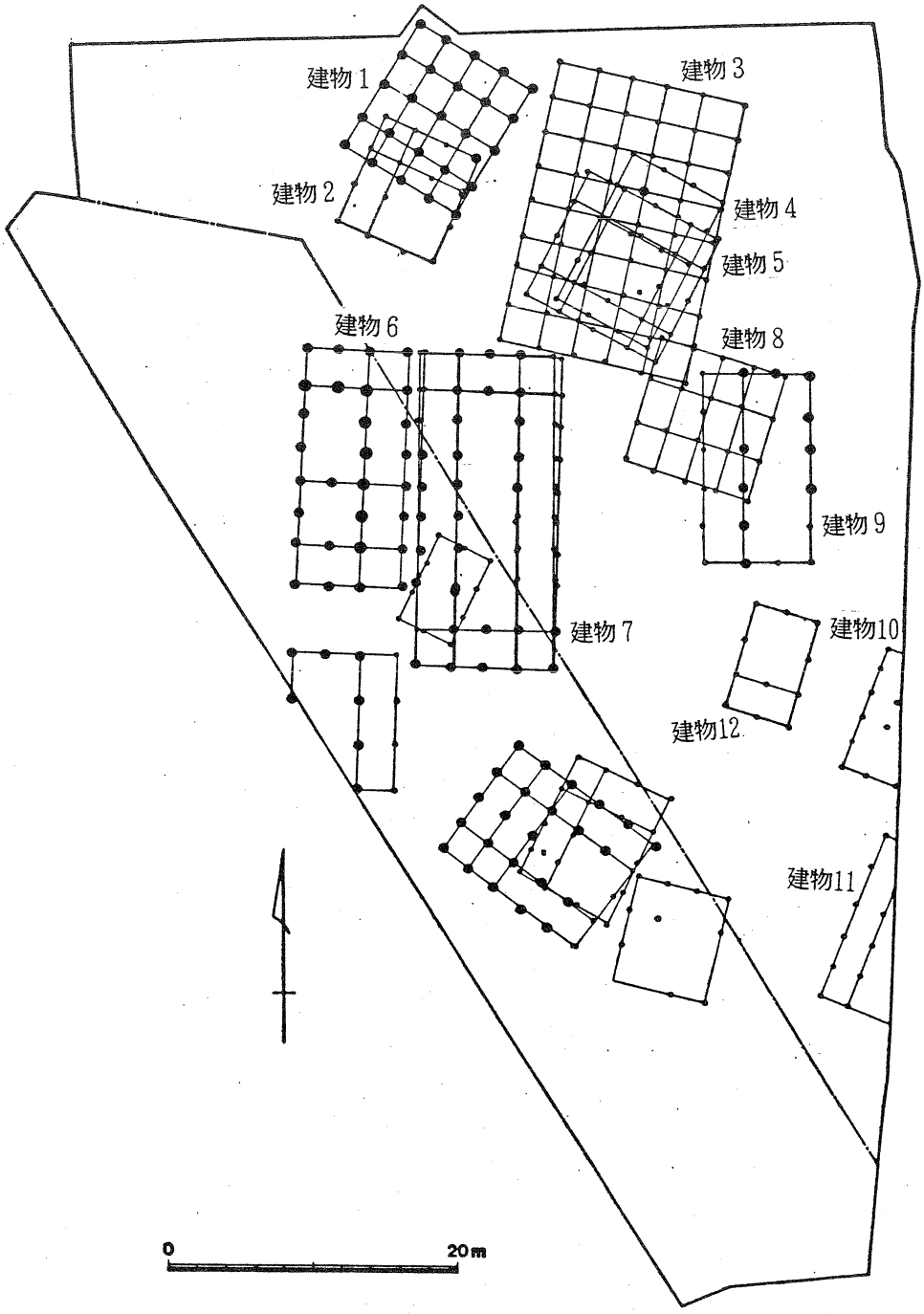
建物　8　　3間(8.7m）×4間（9.1 m）の総柱の建物です。

建物　9　　東に廂のつく2間×4間の南北方向に長い建物です。

建物　10・11　　建物10・11は調査区外に延びており規模は不明ですが、南北方向が5間の建物です。

建物　12　　2間(4.6m）×3間（7.5 m）で比較的規模の小さい建物で、柱穴も他と比べ径が15cm前後と小さいものです。

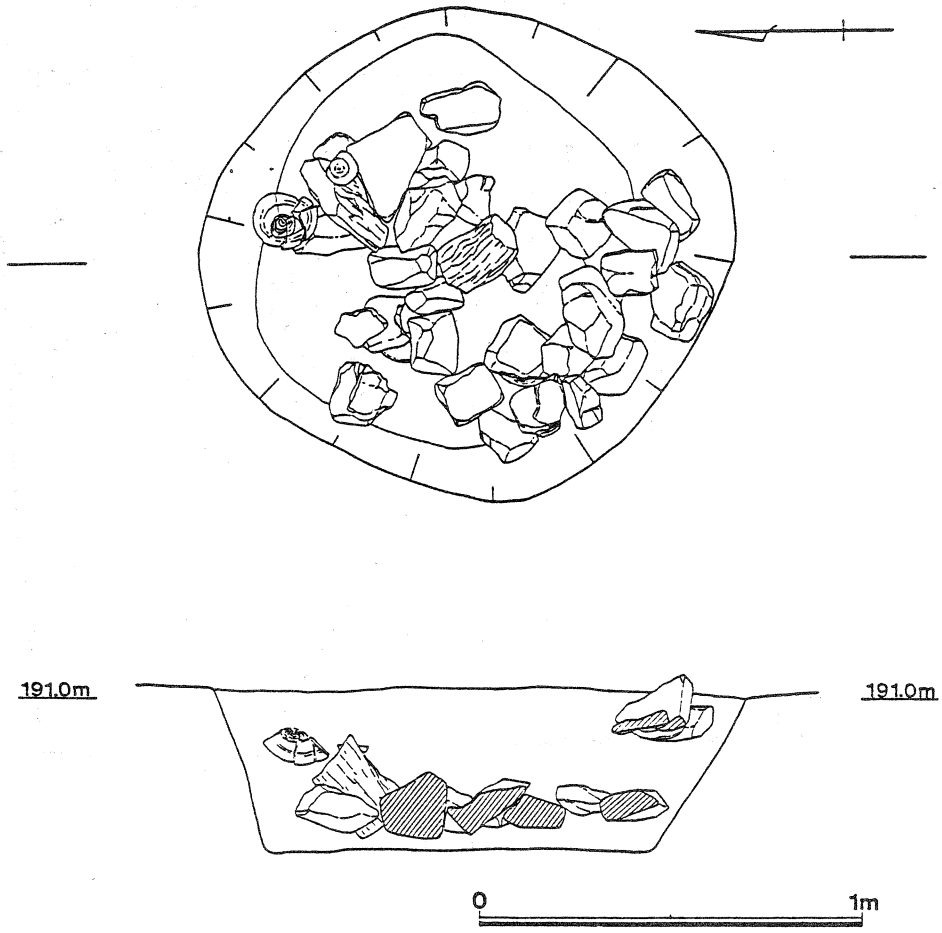
これらの掘立柱建物のうち、建物6・7・9は平安時代中葉（10世紀）頃の建物で、方位がほぼ南北方向に建てられ、いずれも廂がつきます。他の建物は、平安時代後葉（11・12世紀）で、総柱の建物が多く見られます。



掘立柱建物配置図

5

土　坑　土坑は40基検出されましたが、これらには土器を棄てたと考えられる穴や、火を焚いた穴などがありました。また、直径が1.5 m前後、深さ0.5 m程の円形の穴に、拳大から人頭大の石を投げ込んだような状態で出土した土坑が、調査地の南東部で5基見つかりました。石のなかには火を受けた痕のあるものがあり、一部の土坑では焼土も見られました。この石を入れた土坑は、いずれも12世紀頃のものと考えられます。



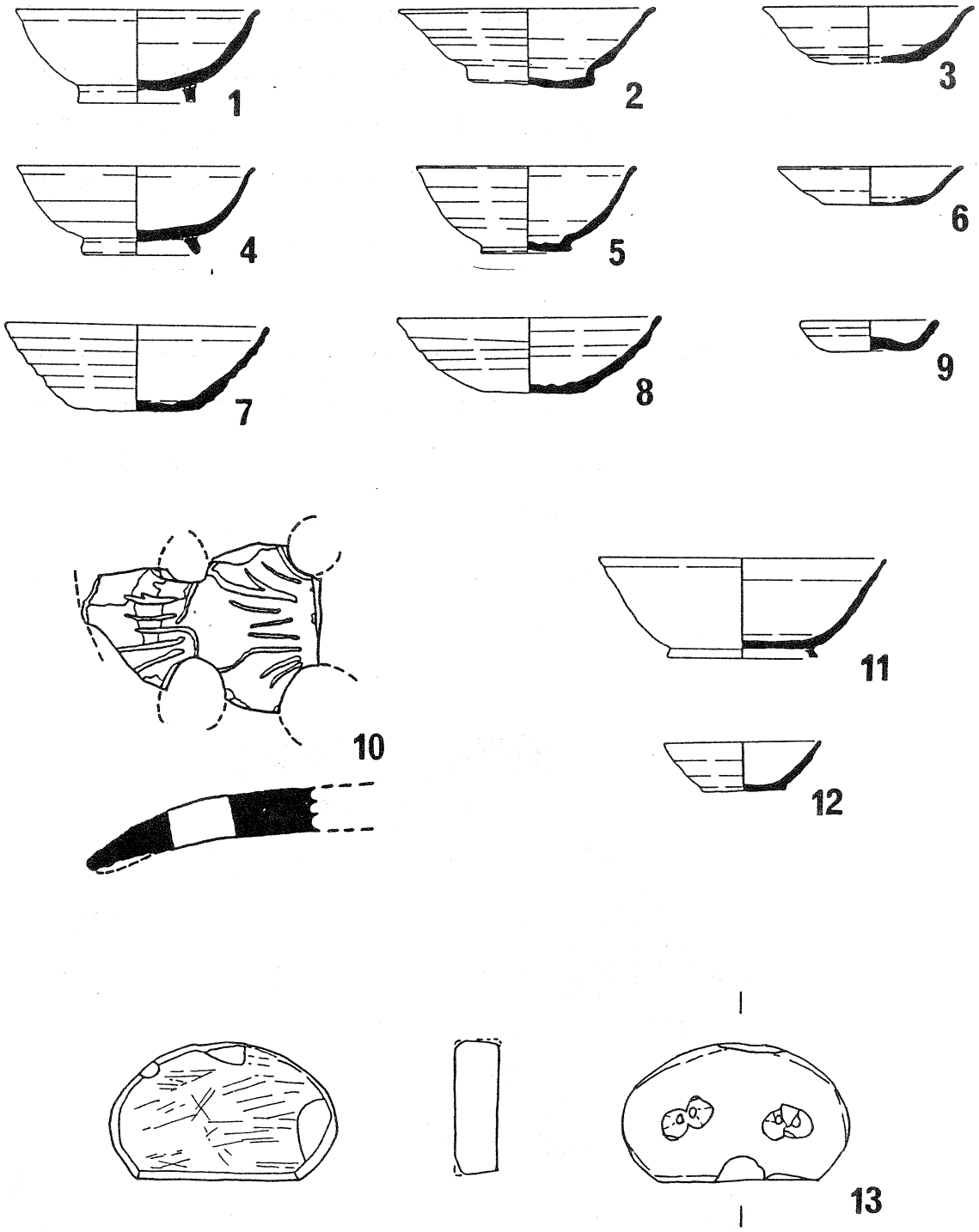
石と土器の入った土坑　（平面図・断面図）

溝　1　　溝1は幅50～80cm、深さ20cm前後で、田の字状に巡らされています。溝のなかから出土した土器から、10世紀のものであることがわかります。この溝は、建物6・7の北側で方向がほぼ同じであることから、これらの建物との関係が考えられますが用途については明らかでありません。

出土遺物　　今回の調査で出土した遺物は、須恵器・土師器・黒色土器の日常雑器のほか緑釉陶器（りょくゆう）・灰釉陶器（かいゆう）の施釉陶器、青磁・白磁など多種の土器類があります。緑釉陶器では、花紋を陰刻した香炉の蓋の破片が出土しています。

そのほかには、石帯とよばれる石で作った腰帯の飾りなども出土しました。

石帯の付いた腰帯を身に着けた貴族（信貴山縁起より）



1～3　溝1出土　　4～9　土坑出土　　10～13　遺物包含層出土
1～3・5～9　須恵器　　4　灰釉陶器　　10　緑釉陶器香炉蓋
11・12　緑釉陶器　　13　石帯

上小名田遺跡出土遺物　　10・13　S＝1／1　　他は　S＝1／4

8

3. まとめ

昨年度、当遺跡の調査により北神地域ではじめて平安時代中葉（10世紀）の建物群が見つかりました。

今回の調査は、その隣接地区で、前回検出された建物の全体規模が明らかにでき、さらに10棟の新たな掘立柱建物が確認されました。

まだ調査途中ですが、これまでの調査結果から明らかになったことは、

Ⅰ．平安時代中葉（10世紀）から後葉（12世紀）にわたる建物群が継続して営まれています。さらに、9世紀の遺物も出土しており、この頃に溯る建物がある可能性があります。

Ⅱ．平安時代時代中葉の建物は方位、配置に規則性がみられ、県下では初めて確認された四面廂の規模の大きな建物があります。また、後葉の建物にも市内では最大規模の建物があります。

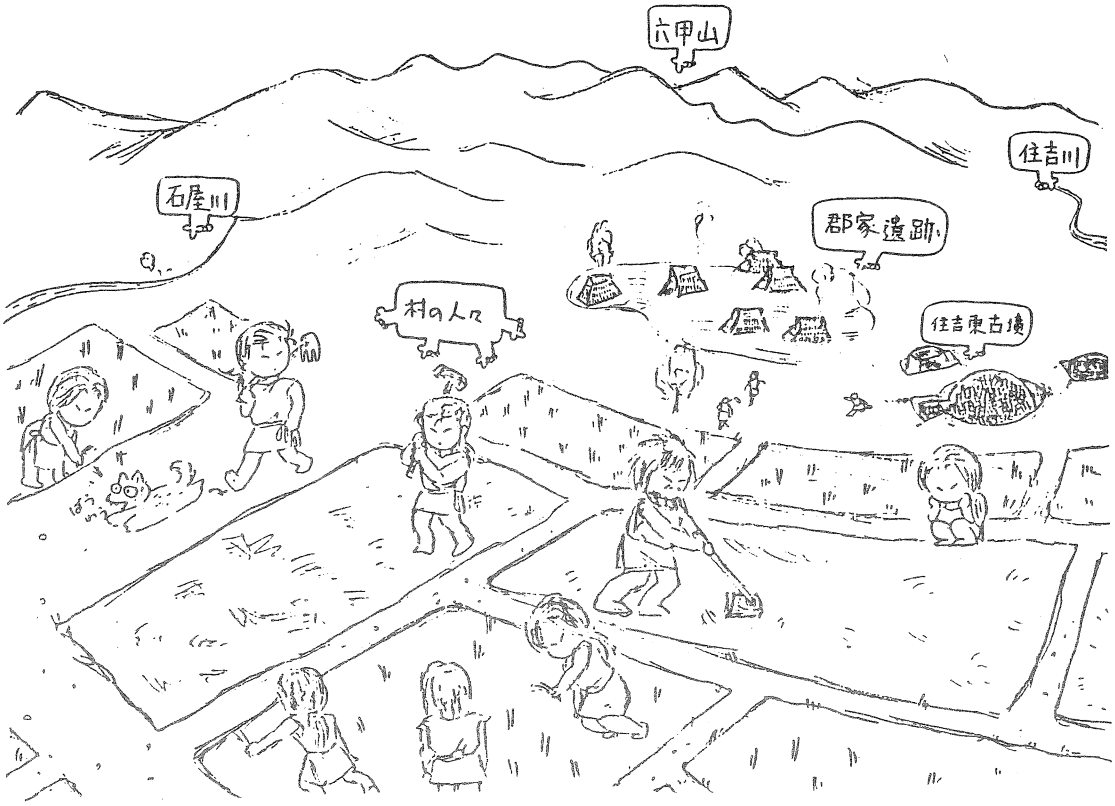
Ⅲ．遺物のなかには、緑釉陶器など日常の雑器以外の土器も出土しており、県内でも初めて出土した陰刻花紋を施す緑釉陶器の香炉蓋の破片があります。

Ⅳ．以上のように、大規模な建物が出土したことや施釉陶器、石帯などの出土遺物からみて、これら建物群は、この地域の有力者の館跡であることが明らかになりました。

郡家遺跡

（御影中町地区第３次）

現地説明会資料



昭和６３年９月４日

神戸市教育委員会

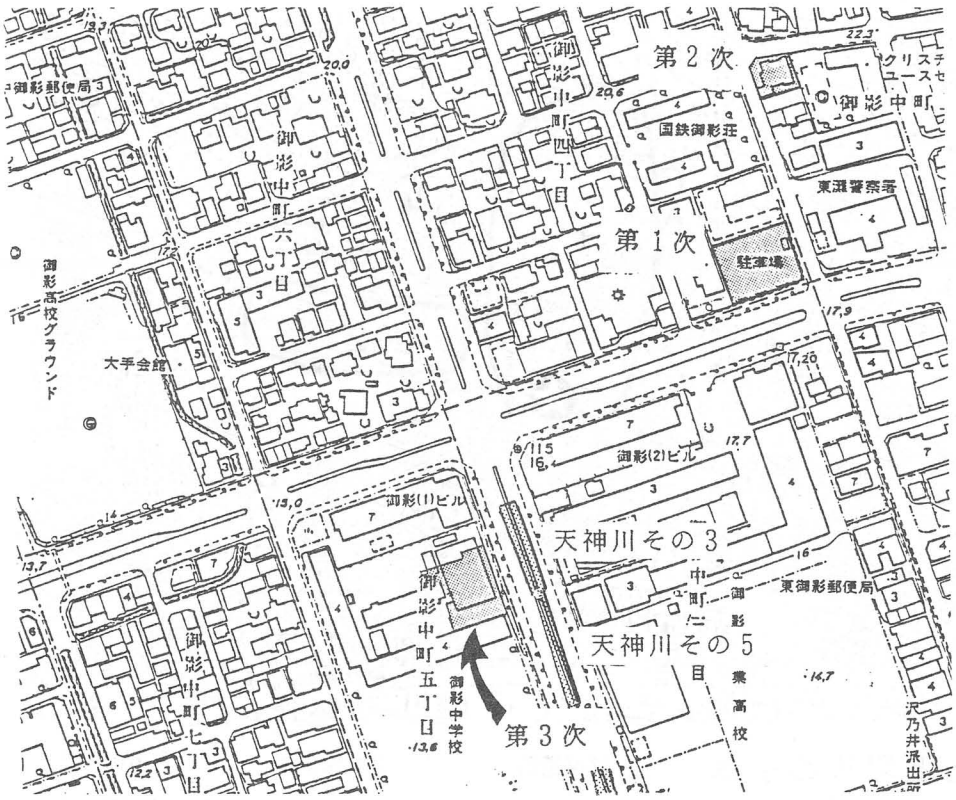
神戸市スポーツ教育公社

1　はじめに

神戸市東灘区御影町郡家を中心とする郡家遺跡は、過去４０数回の調査で、弥生時代後期から安土桃山時代に及ぶ多くの遺構・遺物が発見され、大きな成果を上げています。

今回の調査地は、郡家遺跡の南辺にあたり、御影中学校体育館改築工事に伴い試掘調査を実施したところ、水田のあぜが確認されました。

このため、改築工事の行われる約１０００㎡を対象に発掘調査を進めています。その結果、古墳時代中期（５世紀後半・約１５００年前）の水田跡が検出されましたので、その成果を見て頂くために、今回の説明会を催すことにしました。



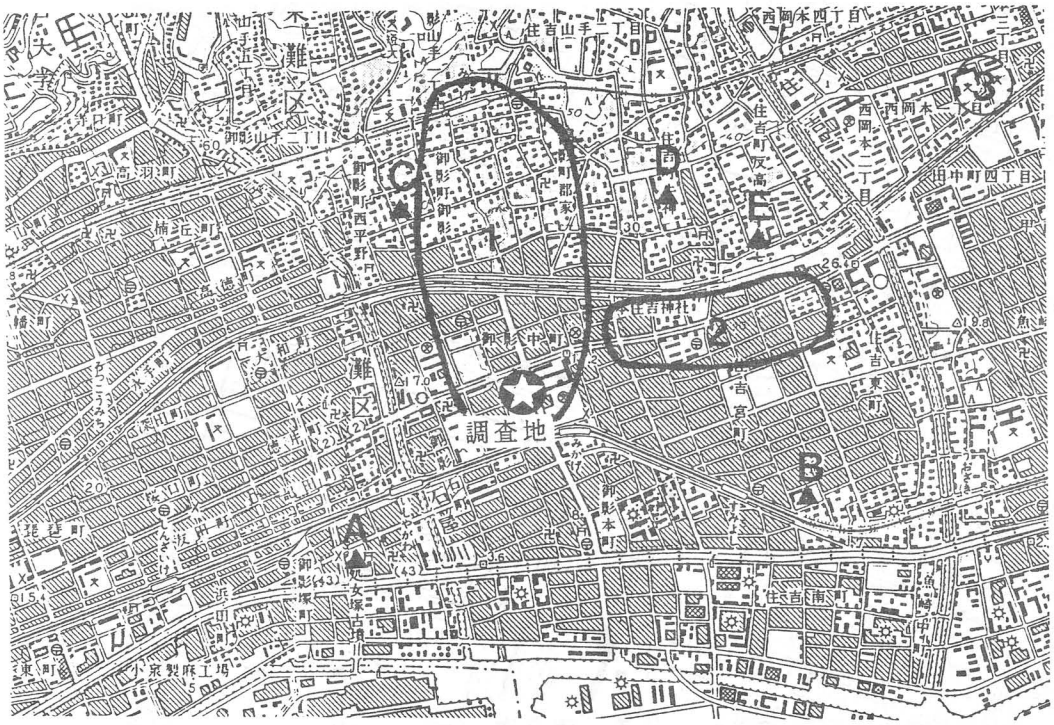
御影中町地区調査位置図

2　周辺の遺跡

郡家遺跡は、地名（郡家＝「郡衙（ぐんが）」）からも古代（奈良時代・１２００年前）の役所の存在が推定され、大蔵地区では、大型の柱穴をもつ掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が確認されています。

しかし、他の地区では、おもに古墳時代中期から後期の竪穴住居址（たてあなじゅうきょし）が数多く発見され、比較的まとまった居住域を構成していたようです。ほかに弥生時代の円形周溝墓なども見つかっています。

古墳時代の住居のなかには、Ｌ字型の煙出しを持つ「かまど」のある住居址などが見つかっています。また勾玉（まがたま）・臼玉（うすだま）・有孔円板（ゆうこうえんばん）・紡錘車（ぼうすいしゃ）など多くの滑石（かっせき）製品が出土しています。



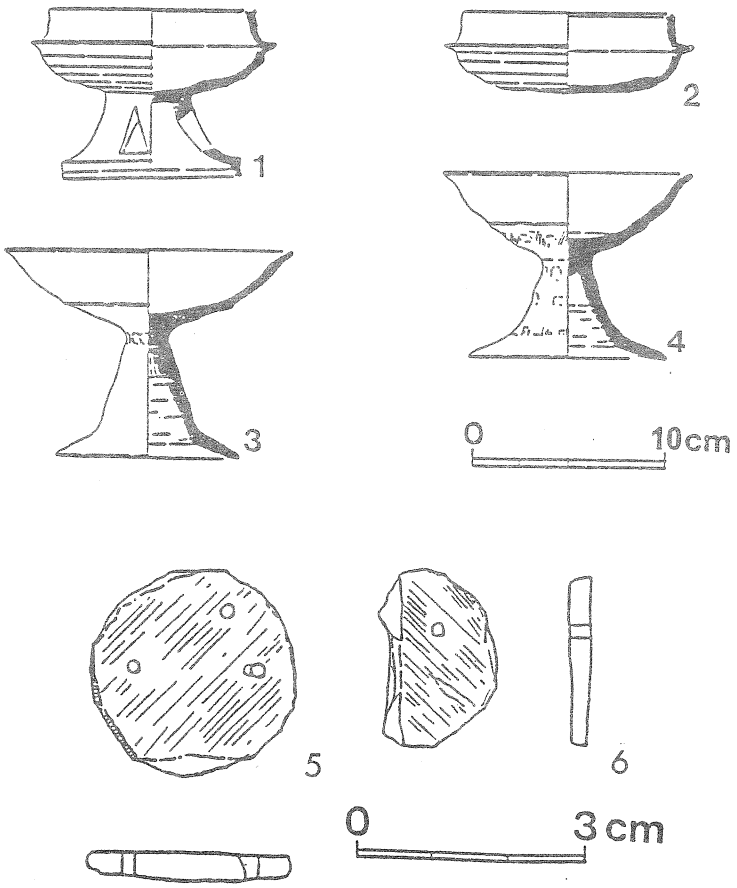
調査地と周辺の遺跡

1	郡家遺跡	A	処女塚古墳	D	庚申塚古墳
2	住吉宮町遺跡	B	東求女塚古墳	E	坊ケ塚古墳
3	岡本遺跡	C	伊賀塚古墳		

今回の調査地に近い御影町中町地区第１・２次調査地区は、北東２５０ｍにあり、古墳時代中期の掘立柱建物や竪穴住居址などが見つかっています。

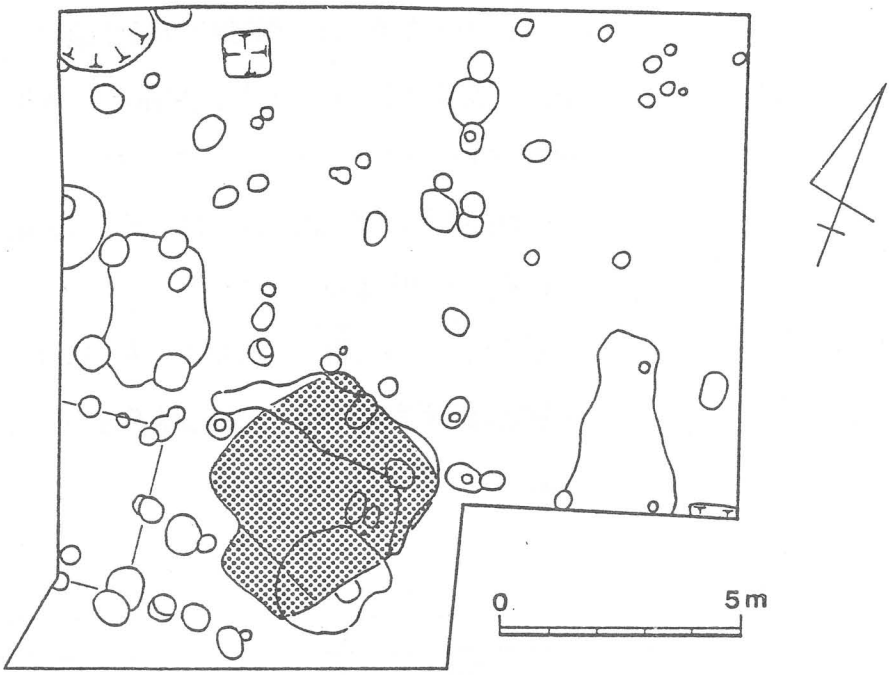
また調査地の東方約１kmには、多くの古墳で構成されている住吉宮町遺跡があります。

最近見つかった帆立貝式の住吉東古墳は、馬形埴輪・人物埴輪・朝顔形埴輪・円筒埴輪を巡らす古墳で、記憶に新しいことと思います。



御影中町地区第２次調査出土遺物

１・２須恵器　３・４土師器　５・６滑石製有孔円板



御影中町地区第２次調査竪穴住居址平面図

３　調査の概要

ａ）水田

今回見つかった遺構は、水田跡25枚以上で、黒い土の水田面の上を黄色の砂が厚く覆(おお)っていました。このことは、水田が洪水によって一瞬のうちに埋まったことを示しています。水田が営まれた時期は洪水砂に含まれている土器から古墳時代中期ごろと考えられます。

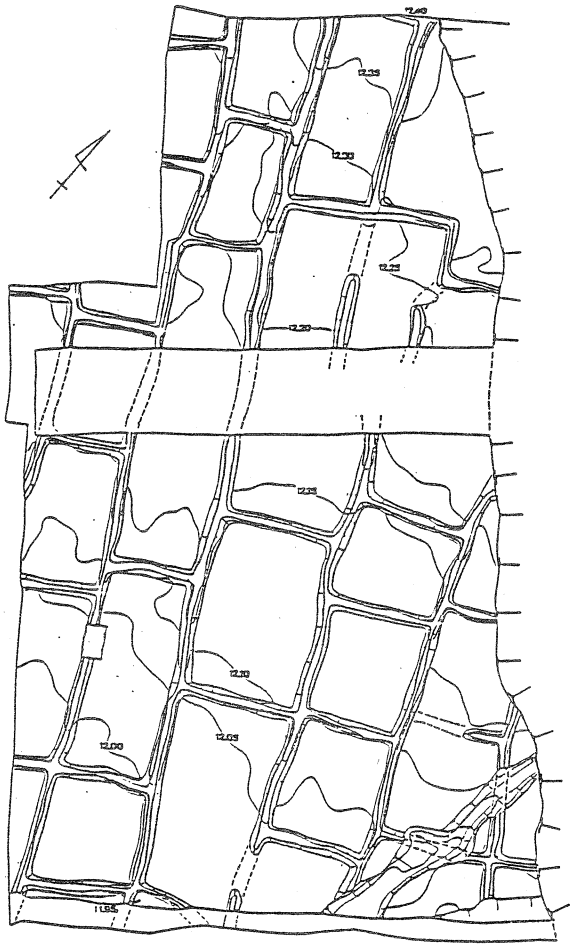
また調査区の北東隅から南西隅に向かって流路と用水路が、各一本ずつ見つかっています。

25枚以上ある水田のうち、区画が分かっている水田で面積が最も大きいものは16㎡(4.0m ×4.0m)、最も小さいものは 7.5㎡(2.5m ×3.0m) と、比較的小さな区画の水田がまとまっています。形は長方形のものが多く、あぜが直交して整然と「田」の字状になるものは見られません。

あぜは，規模によって大・小の２種類に分けることができます。

大きいあぜは，北東から南西に向かう方向に３本あります。幅は50cm～60cm、高さ15cmあり、とてもしっかりしたものです。

小さいあぜは、北東から南西方向とそれに直交する方向に築かれ、一枚の水田を構成しています。幅は約20cm高さ約 5cmくらいのものです。

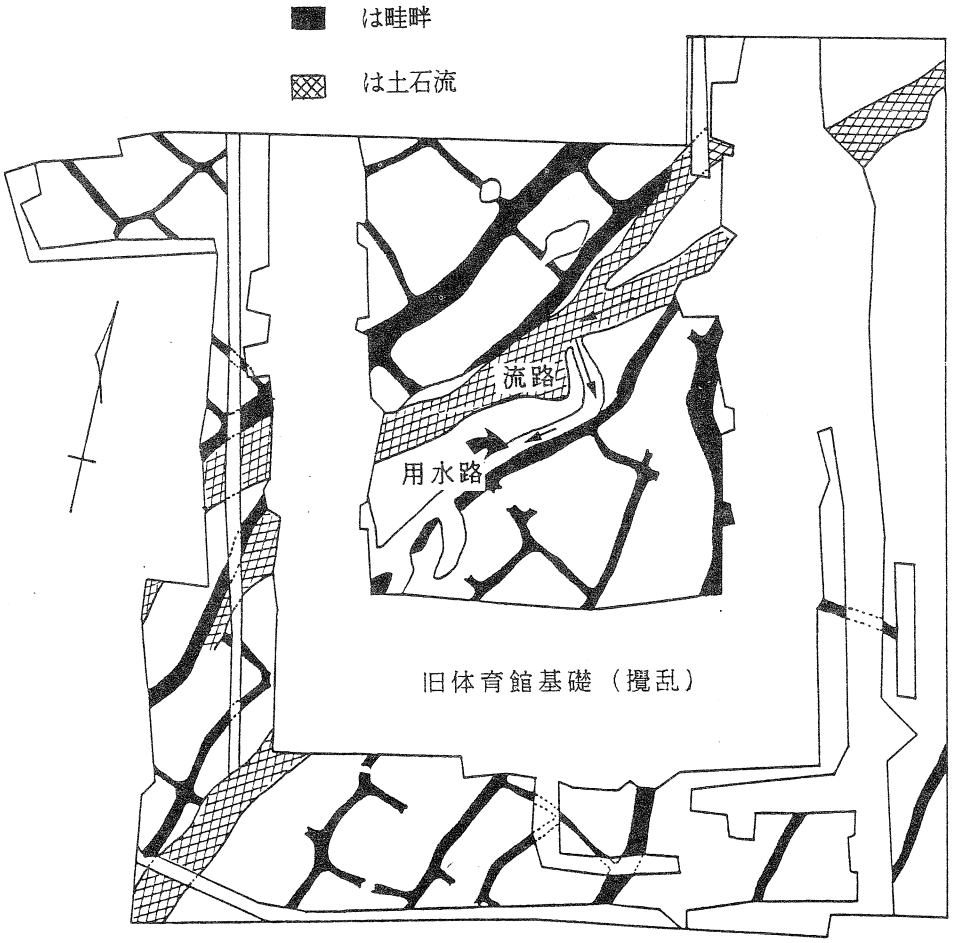


戎町遺跡水田平面図　（神戸市須磨区戎町）

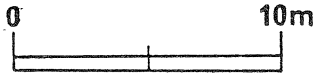
（弥生時代前期　約２２００年前）　0　4m

これらのあぜの構築は，当時の地形に大きく影響を受けているようです。調査区は北から南に傾斜し、北東隅と北西隅が高く、ちょうど緩やかな傾斜を持った谷のような地形だったようです。

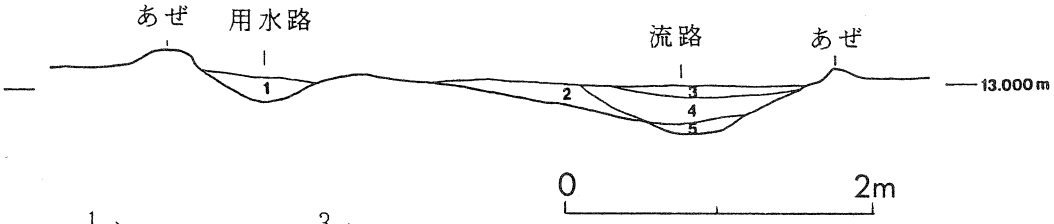
北東から南西に向かって検出された２本の大きなあぜは、等高線を描くように築かれ、従って水田面も６cm～10cmの差を持って低くなっています。



御影中町地区第３次調査遺構平面図



b）流路　　調査区の北東から南西にかけて堆積していた土砂を取り除くと、幅約2～3m・深さ約0.3～0.7mの流路が検出されました。そして調査区中央部でこの流路にL字形にとりつく幅0.5m・深さ約0.3mの溝が見つかりました。水田へ水を引き込むための用水路と考えられます。



1, 2 洪水砂　　3, 4, 5 土石流

流路及び用水路土層断面図

c）出土遺物　　水田からは遺物が出土することは少なく、今回も見つかっていません。しかし、水田を覆った洪水砂の中からは古墳時代の土師器や須恵器が出土し、また、上方の遺跡から流されたと考えられる弥生土器などが出土しました。

4. まとめ

今回の調査でわかったことは次のようなことです。

a）水田の造成技術

※　発見された水田は，他の遺跡で見られるような40～50㎡の大きさを持ったものを含まず、すべて20㎡以下の小区画の水田です。

※　水田面の比高差の大きい所には大きなあぜを築いています。

※　流路と用水路と考えられる溝が見つかりました。

以上のことから、この水田の構築にあたっては，旧地形に制約された面が大きく、大きなあぜを築き、水田を小さく区画することで、水を効率よく配分し、滞水することができたようです。

古墳時代中期の傾斜地での水田造成技術を知る上で貴重な一例といえます。

b）周辺の遺跡との関係

郡家を中心とする地域での過去の調査によって、古墳時代中期（５世紀後半頃）の居住域が郡家遺跡で、墓域が住吉宮町遺跡で確認されています。

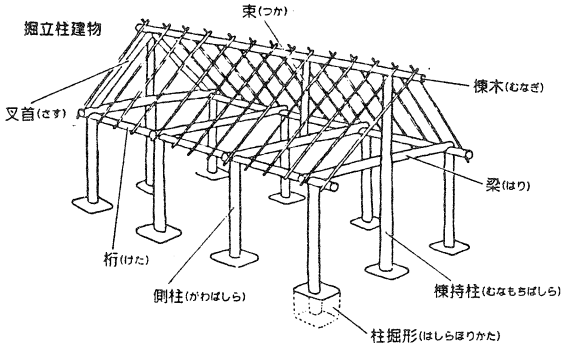
高台の地区に人々が住み、南東のやや離れたところで墓が形成され、そして郡家遺跡の南辺に生産の場があったということが推定されます。

付録 その１

用語解説

1　掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）

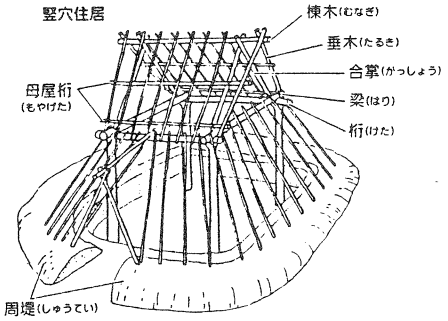
地面に穴を掘って柱を建て屋根をつくった建物



出典　豊饒の大地　集英社

2　竪穴住居址（たてあなじゅうきょし）

地面を方形または円形に掘りくぼめて柱を建て、屋根の軒先を地上まで葺きおろした家



3　滑石製品（かっせき）　滑石＝白色および緑灰色の軟らかい石

勾玉（まがたま）　Ｃ字状の一端に孔をあけた玉

臼玉（うすだま）　円柱に孔をあけた玉

紡錘車（ぼうすいしゃ）　糸をつむぐ時に使う道具

有孔円板（ゆうこうえんばん）　径３～４cmの平らな円板に孔をあけたもの

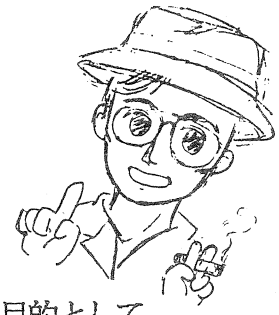
鏡に似せたものか

4　土師器（はじき）　弥生時代から続く素焼きの焼き物

焼く温度は800度ぐらいで、色は赤褐色である

5　須恵器（すえき）　古墳時代中頃（１５００年前）に朝鮮半島から伝わった技術で焼かれた素焼きの焼き物

焼く温度は1100度ぐらいで、色は青灰色である



付録 その２

遺跡 Ｑ＆Ａ

１　Ｑ　どうして遺跡があることがわかるのでしょうか？

Ａ　神戸市教育委員会では、文化財の保護を目的として、分布調査・工事の立会い・文献資料・市民の皆さんからのお知らせなどをもとに、文化財分布地図を作成しています。分布調査などの結果に基づいて、遺跡の存在する可能性のあるところに試し掘りをおこないます。

そこに遺物（土器など）が含まれている層（遺物包含層）や人々の生活の跡（柱穴・溝などを総称して遺構とよびます）が発見されると、発掘調査をおこないます。

２　Ｑ　なぜ、発掘調査をするのですか？

Ａ　発掘調査で得られた成果は、歴史を明らかにする資料となります。工事などによって地下に埋もれている貴重な資料が明らかにされないまま、破壊されることがないようにするために発掘調査をおこないます。

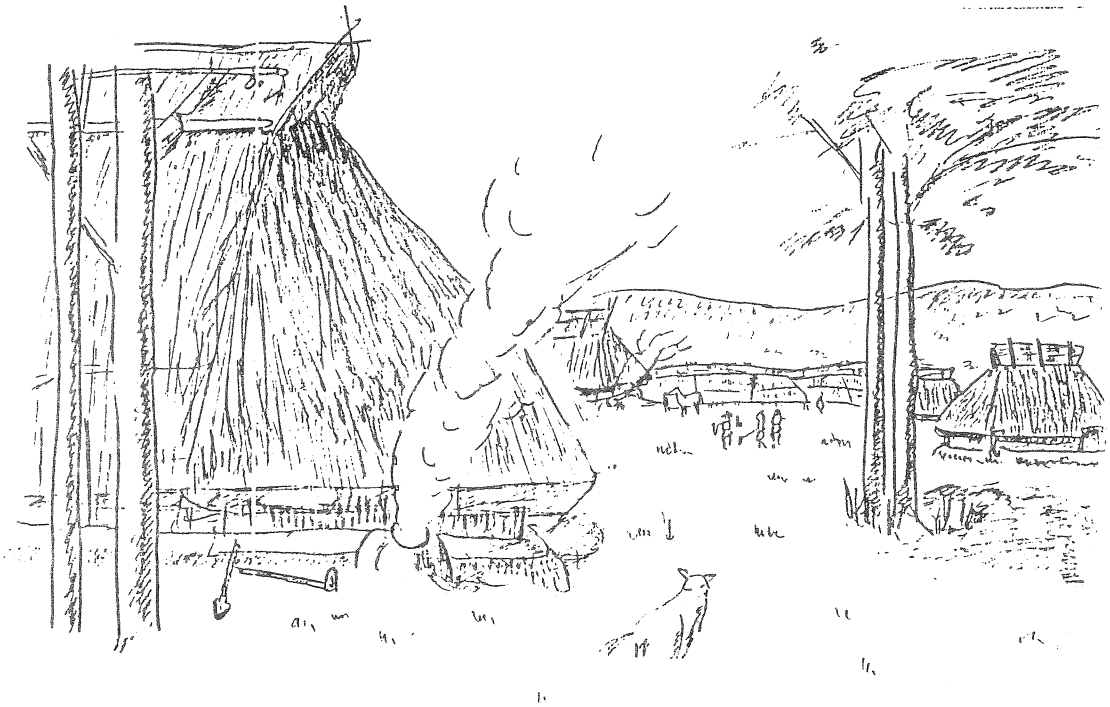
また得られた成果は、今回のように現地説明会をおこない市民の皆さんにみていただけるようにしたり、展覧会などを開いて、文化財の重要性を理解していただけるよう努力しています。

つぼを作る女の人

えいばら　　とようら

宅原遺跡豊浦地区

現地説明会資料



昭和６３年９月１１日

神戸市教育委員会

今回の調査については、神戸市文化財専門委員の宮本長二郎先生に御指導いただきました。
また、神戸市長尾土地改良区、神戸市緑農開発公社、神戸市農政局の協力をえました。

1．はじめに

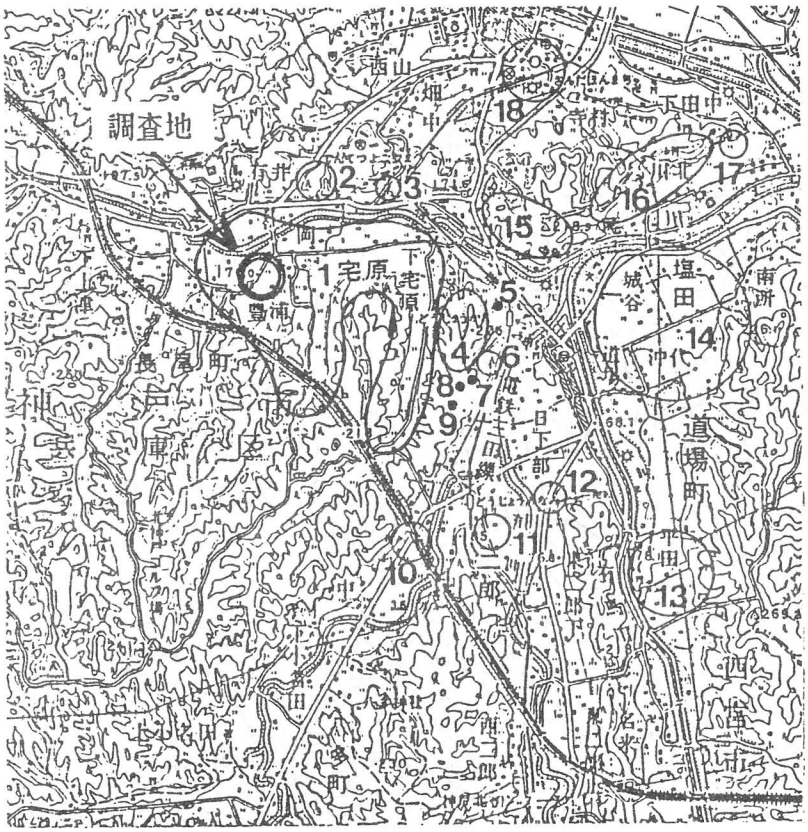
宅原（えいばら）遺跡は、長尾川が有野川に合流する地点の西側の盆地に存在する遺跡です。

昭和55年に、平池、掖谷（ねぶたに）地区で、北神ニュータウン建設工事に伴う発掘調査が行われて以来、58年度から始まった県営ほ場整備事業や道路建設・河川改修等の工事に伴う発掘調査が毎年実施され、縄文時代から近世に至る複合遺跡群であることが分かってきました。

今回見学していただく豊浦地区は、先年度にひきつづき県営ほ場整備事業に伴って、発掘調査が行われ、古墳時代後期（６世紀末）～中世末期（16世紀後半～末）にかけての遺構が確認されました。

2．周辺の遺跡

人々が、狩猟や木の実などの採集で生活をしていた縄文時代の遺跡として、宅原遺跡内垣地区で出土した土器と、石器を作った跡がみつ



周辺の遺跡　　S＝1:50,000

1 宅原遺跡
2 定塚古墳群
3 天皇山古墳群
4 北神N.T.No.4
5 北神N.T.No.2，3
6 北神N.T.No.5
7 北神N.T.No.9
8 北神N.T.No.10
9 北神N.T.No.13
10 八多遺跡
11 日下部遺跡
12 オキダ古墳群
13 平田遺跡
14 塩田遺跡
15 八景中学裏山古墳群
16 川北古墳群
17 自彊遺跡
18 対中遺跡

かった善入川谷の龍ヶ坪遺跡があり、これがこの付近で人々が生活した最初の痕跡です。

稲作が始まった弥生時代になると、前期のものとして、井堰のみつかった対中遺跡があります。塩田遺跡でも前期の土器片、引き続き中期には住居址のほか、石庖丁やその未製品、石鏃など多くの石器が出土しています。また、北神ＮＴ第４地点では中期から丘陵上に集落が営まれ、後期まで続きます。

古墳時代にはいると、当地域でも最古の定塚古墳群が存在します。その後、前期に北神第９地点の古墳がつくられ、後期には横穴式石室をもつ北神第２，３地点など、多くの古墳が築かれました。

奈良時代には、自疆遺跡で建物跡がみつかっており、さらに平安時代から鎌倉時代にかけては、平田・塩田・日下部などの遺跡で、掘立柱建物や木棺墓などがみつかり、人々の生活の跡をたどることができます。

宅原遺跡各地区位置図　S＝1:10,000

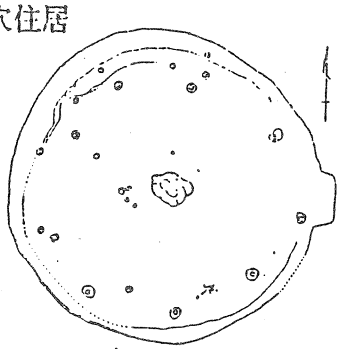
2

3．宅原遺跡の概略

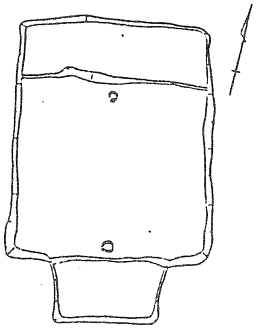
縄文時代　　宅原遺跡は、内垣地区で縄文時代後期（今から約4000年前）の土器が見つかっており、その頃から人が住み始めたようです。

弥生時代　　その後、弥生時代後期（今から約1800年～1900年前）には、同じく内垣地区から直径11.5mの大きな円形の竪穴住居址と、方形の竪穴住居址が2棟見つかっており、長尾川に近い所に集落があったと思われます。

内垣地区竪穴住居

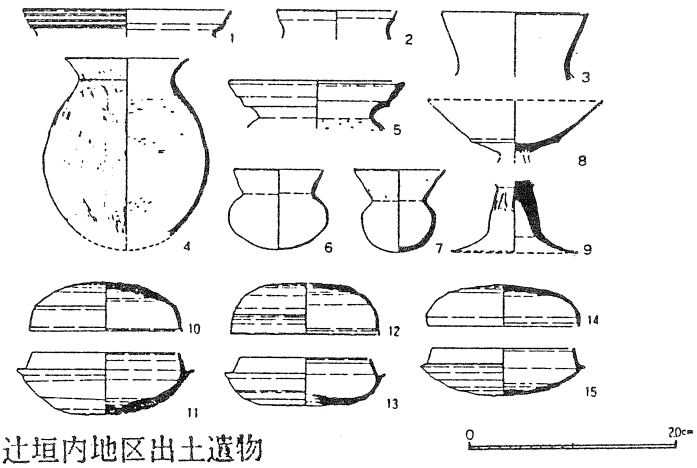


ＳＢ０１　平面図　0　4m



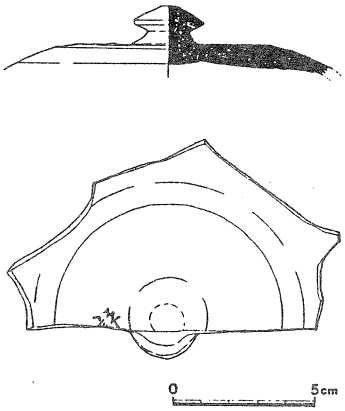
ＳＢ０２　平面図　0　2m

古墳時代　　古墳時代を前期（４世紀頃）・中期（５世紀頃）・後期（６世紀頃）に分けた場合の前期～中期の集落は有井地区で、中期の集落は辻垣内地区で見つかっており、特に辻垣内（つじがいち）地区の竪穴住居は「かまど」を持つ竪穴住居としては早い例として注目されます。後期になると、辻垣内地区・有井地区・宮ノ元地区と今回調査された豊浦地区でそれぞれ集落が営まれますが、辻垣内・有井地区は６世紀前半～後半、宮ノ元・豊浦地区は６世紀末葉～７世紀初頭と時期差があるようです。

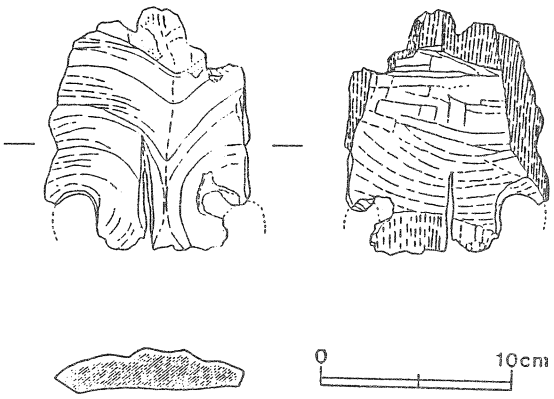


辻垣内地区出土遺物

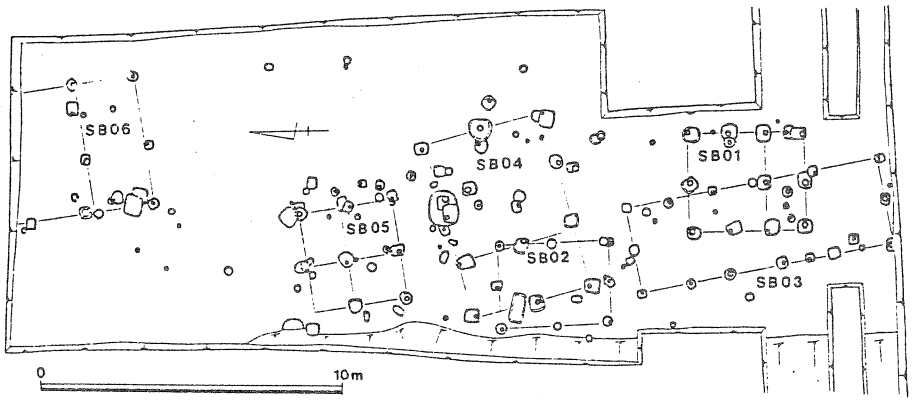
飛鳥時代　飛鳥時代（6世紀末～7世紀代）になると、辻垣内地区や岡下地区から宮ノ元地区にかけて掘立柱建物が建てられます。そして岡下地区からは当時の地方役所を表す「評」の文字が書かれた土器が、宮ノ元地区からは木製面・松明（たいまつ）・人形（ひとがた）・馬の頭骨など儀礼に伴うと思われる遺物が大溝の中から出土しており、この付近に役所が置かれていたことが考えられます。



岡下地区出土「評」墨書土器

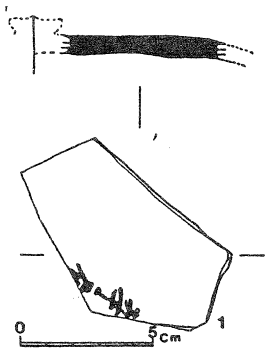


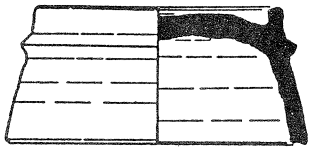
宮ノ元地区出土木製面



岡下地区遺構配置図

奈良・平安時代　その後、奈良時代から平安時代前半（8～9世紀）にも宮ノ元地区から豊浦地区にかけての地域で掘立柱建物が建てられ、豊浦地区からは当時の行政単位の「里」を表す「五十戸□」と書かれた土器が、宮ノ元地区からは須恵器の円面硯（えんめんけん）が出土しています。このことから、前の時代に引き続きこの地域に役所が置かれていたと思われます。



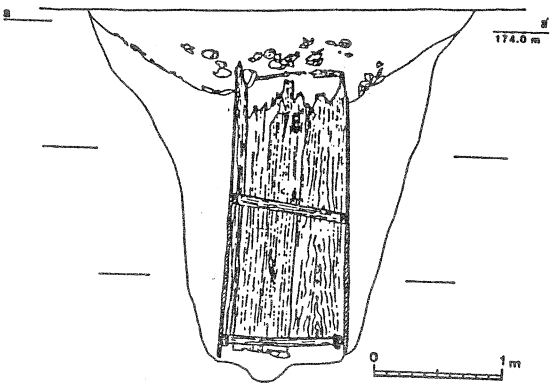


宮ノ元地区出土円面硯

豊浦地区出土墨書土器「五十戸□」

平安・鎌倉時代　中世前期の12世紀～13世紀にかけては、各地区で掘立柱建物・木棺墓・井戸等が見つかっており、中世の「宅原荘」と呼ばれた荘園村落を形成していたと考えられます。特に辻垣内地区では、12棟の掘立柱建物が見つかっています。また、蓮華寺・岡下・掖谷・有井・宮ノ元・豊浦・鹿の子の各地区から木棺墓・土坑墓が見つかっており、副葬品として青磁・白磁等の輸入陶磁器も出土しています。また豊浦地区で見つかった井戸と溝から、まじないに使う呪符木簡（じゅふもっかん）や様々な木製品、墨書土器が出土しており当時の人々の精神生活の一部が知られました。

戦国
安土桃山
江戸時代　中世末から近世にかけての遺構として、宮ノ元地区から石敷の池泉（ちせん）が検出され、大前地区でも石敷遺構がみつかっており、当時の農家の一部であると考えられています。



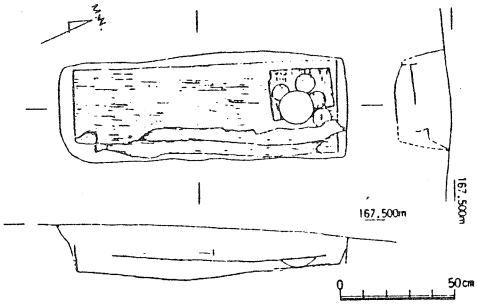
豊浦地区検出井戸断面図

豊浦地区井戸内出土呪符木簡

S＝1／6

これまでの宅原遺跡調査一覧表

地区	年度	調査原因	時代	内容
平池	55	北神ニュータウン関連	10～11C	掘立柱建物2　井戸 緑釉・灰釉陶器
掖谷	55	北神ニュータウン関連	13C	掘立柱建物　割竹型木棺
岡崎	58	県営ほ場整備	12C後	ピット　溝　土坑
辻垣内	58	北神ニュータウン関連	弥生末期 古墳中期　5C 古墳後期　6C中 古墳後期～末 6C末～7C初 10C後半 12～13C	土坑 竪穴住居2 竪穴住居3 掘立柱建物2 掘立柱建物1 掘立柱建物11
	58	県営ほ場整備	古墳後期　6C前 12C後	溝　ピット
	59	県営ほ場整備	11～12C 鎌倉～室町　14C	掘立柱建物？ 土坑　ピット
大前	58 59	北神ニュータウン関連 北神ニュータウン関連	平安末　12C後～末 鎌倉～室町　13C 江戸　17～19C	掘立柱建物2　石敷 溝 石敷　備前・丹波・唐津 伊万里・三田
丁の前	59	県営ほ場整備	鎌倉～室町　13C 古墳後　6C	溝　土坑　ピット 溝　土坑　ピット
蓮華寺	59	県営ほ場整備	室町初　13C後半	掘立柱建物2　溝　土坑 木棺墓1
松毛	59	県営ほ場整備	弥生 古墳～奈良	落ち込み 溝
鹿の子	57	北神ニュータウン関連	9C末～10C	掘立柱建物1　木棺墓



蓮華寺地区検出木棺墓

岡下	60	北神中央線建設関連	7C～8C	大溝　土坑　砥石 「評」墨書土器　陶硯
	60	県営ほ場整備	12後半～13C 6C後 6C末 13C後～末	掘立柱建物2　溝 掘立柱建物3 掘立柱建物3 木棺墓2　青磁　刀子
内垣	61	北神中央線建設関連	縄文後期 弥生後期	土器片 竪穴住居2　溝　河道 手焙形土器　銅鏃　砥石
有井	61	県営ほ場整備	4～5C 6C中～後 13C	竪穴住居10　溝　ガラス 勾玉　スラッグ 竪穴住居7　掘立柱建物2 掘立柱建物1　木棺墓1 土坑　溝
宮ノ元	61	県営ほ場整備	古墳中期5C 6C末～7C初 7～8C 12後半～13C 16C	竪穴住居1 竪穴住居4 掘立柱建物7 大溝　木製面　人形　馬骨 掘立柱建物6 池泉
	62	県営ほ場整備	6C末～7C初 9C前半 12C	竪穴住居2 掘立柱建物1 掘立柱建物1　木棺墓1 鉄斧2
	63	県営ほ場整備	7C 8C 12C	掘立柱建物1 落ち込み　土坑　円面硯 掘立柱建物1
豊浦	62	県営ほ場整備	7，8C（～13C） 9C前半 12～13C 15C 近世	大溝　墨書「五十戸□」 掘立柱建物4　灰釉　緑釉 掘立柱建物3　井戸2 木棺墓　刀子　炉壁 墨書　呪符木簡　下駄 石敷遺構 ピット　溝
西豊浦	62	北神ニュータウン関連	11C前半	河川　洗い場？

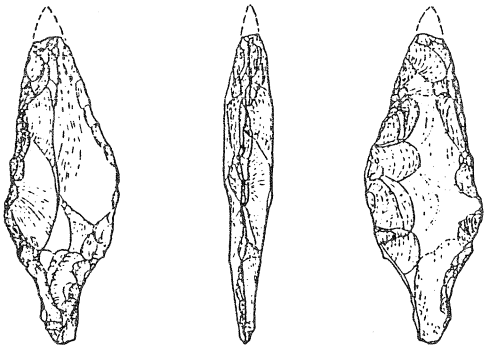
宅原遺跡豊浦地区　調査区位置図

8

4．今年度調査の概略

縄文
弥生時代

第5調査区から石鏃・尖頭器（せんとうき）・楔形石器（くさびがた）各1、第2調査区から石鏃が1本出土しています。これらの石器に伴う土器は出土していませんが、付近にこの時期の集落があったと思われます。



第2調査区出土石鏃

← 第5調査区出土尖頭器　S＝1／2

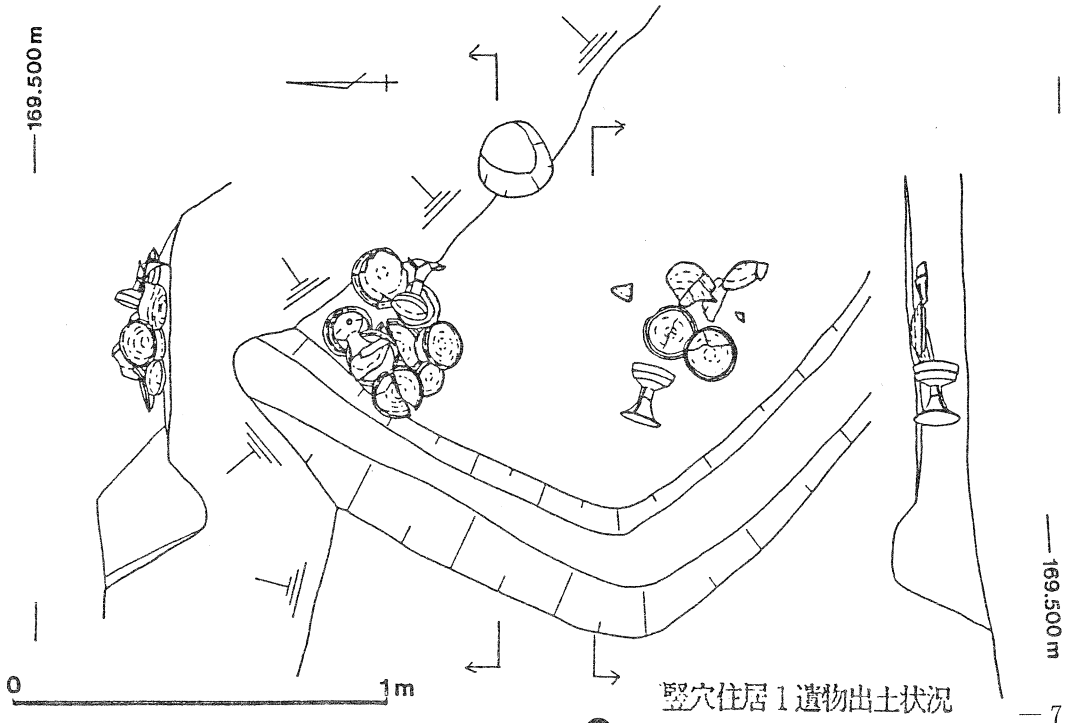
古墳時代後期

古墳時代後期の遺構としては、竪穴住居4棟と掘立柱建物が1棟見つかっています。

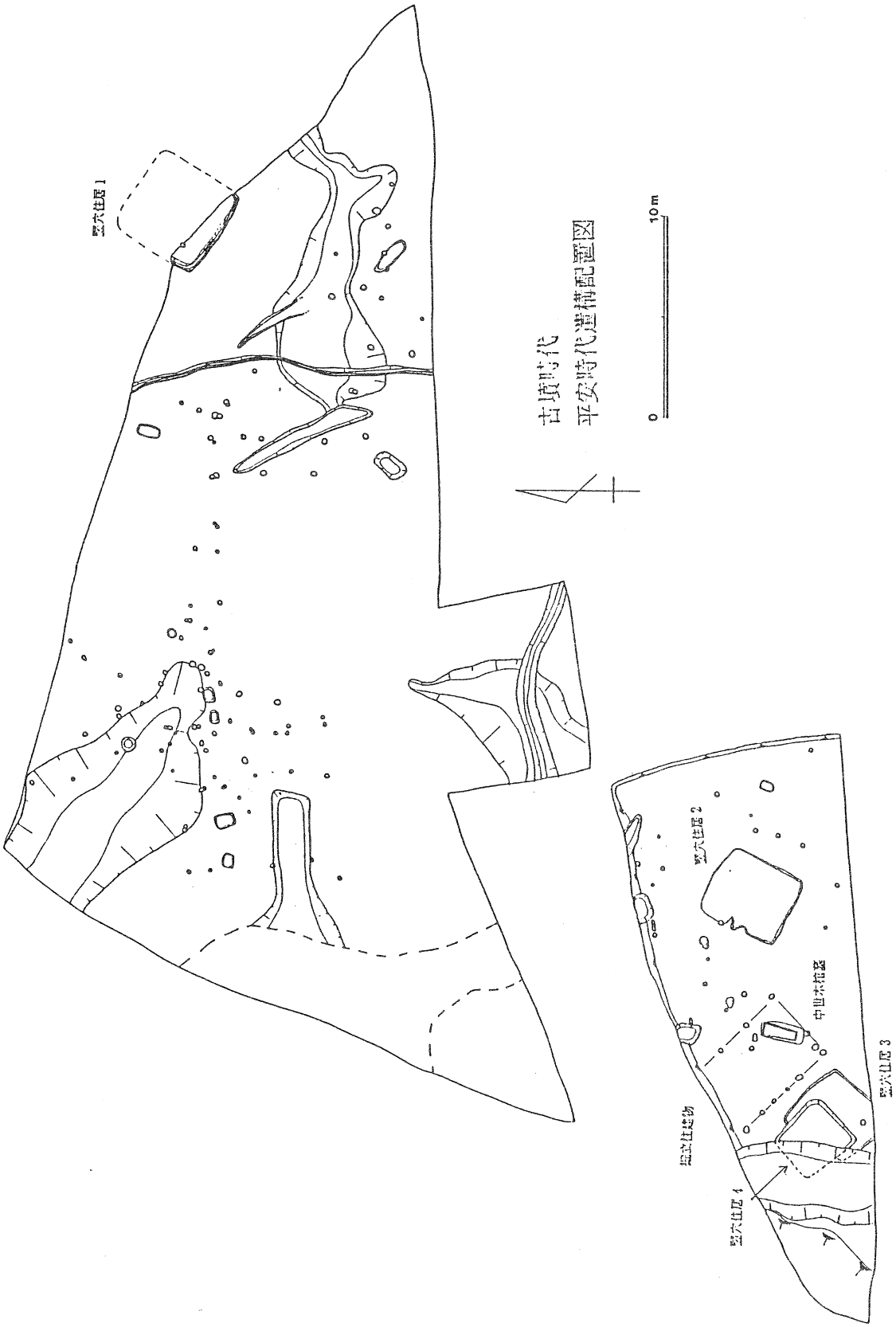
竪穴住居1

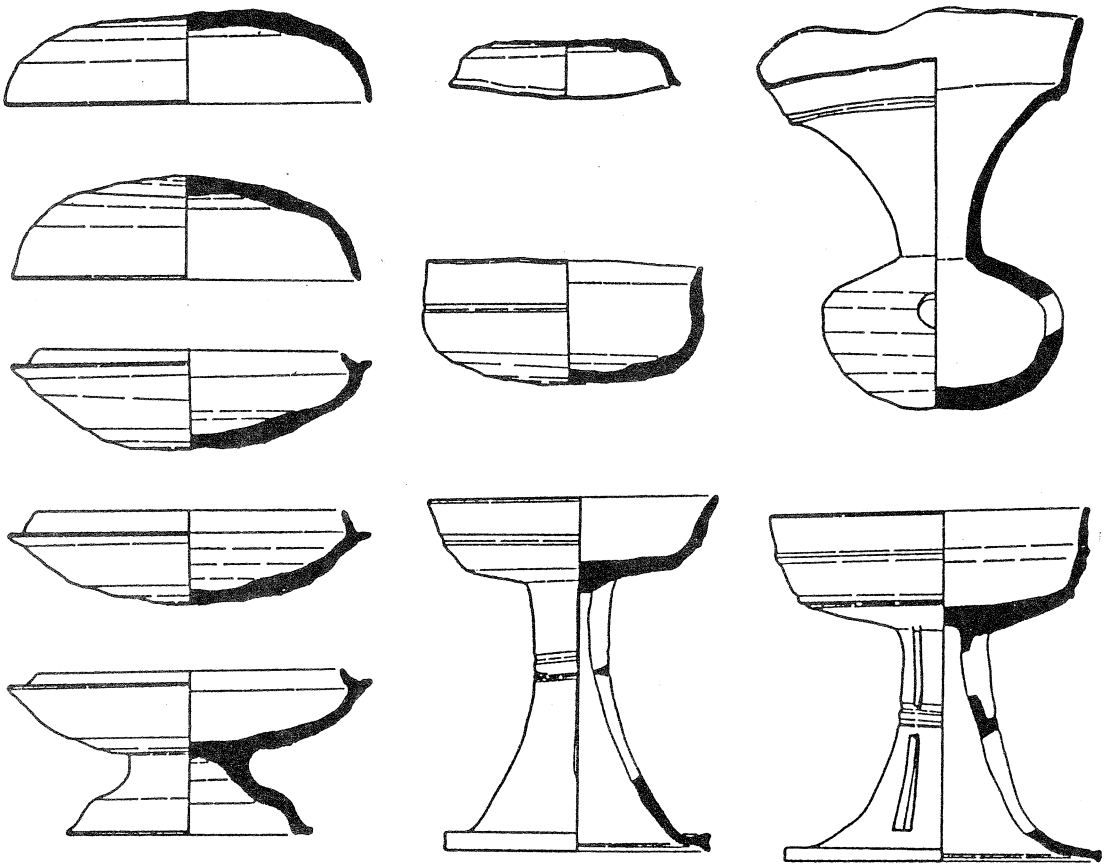
1辺4.5mの方形竪穴住居です。しかし、西辺のうち三辺は後世の水田造成で削られています。

南西のコーナー付近から須恵器の坏身（つきみ）・坏蓋（つきぶた）・無蓋高坏（むがいたかつき）・有蓋高坏（ゆうがいたかつき）・甕（はそう）・坩（かん）等が出土しており、また鉄鏃も2本出土しています。

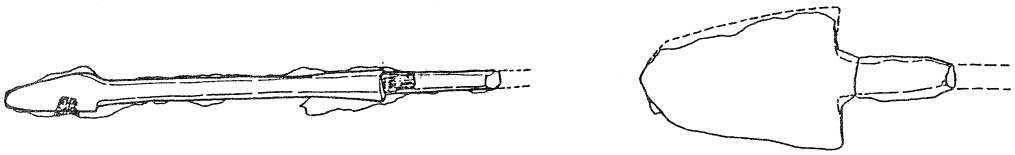


竪穴住居1遺物出土状況


古墳時代
平安時代遺構配置図
0
10m
竪穴住居1
竪穴住居2
竪穴住居3
竪穴住居4
掘立柱建物
中世木柵



竪穴住居１出土須恵器　　S＝1／3

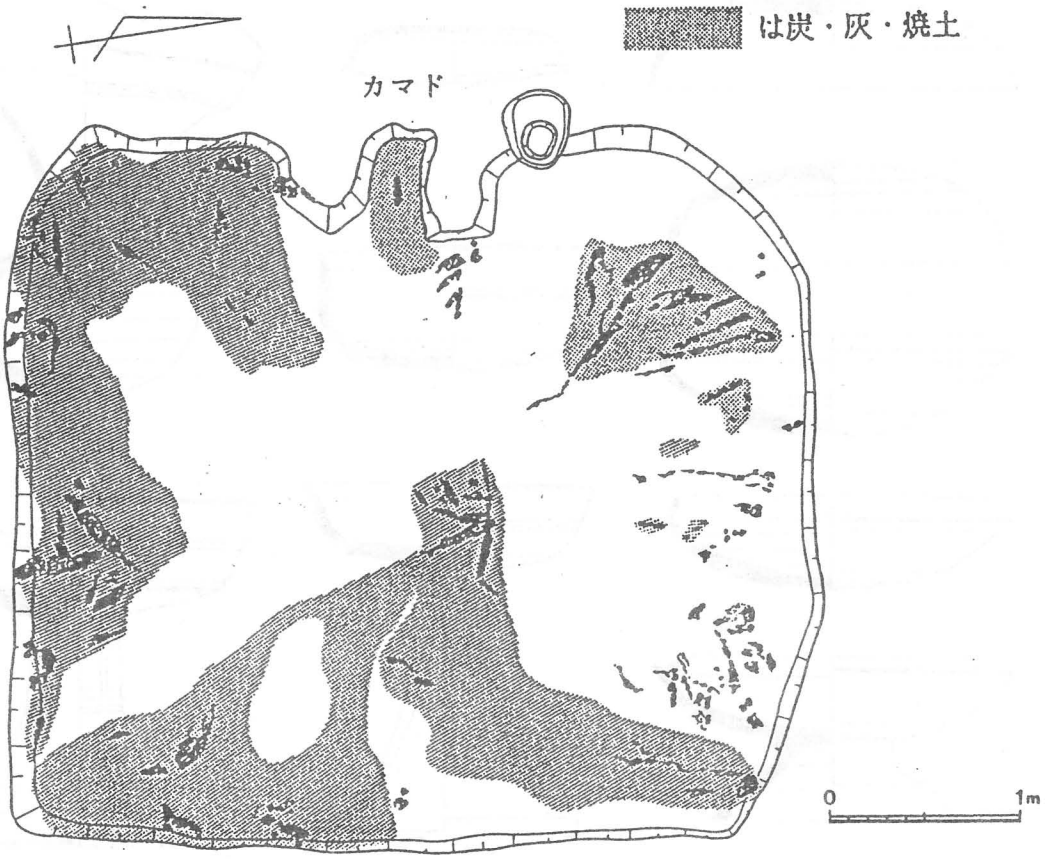


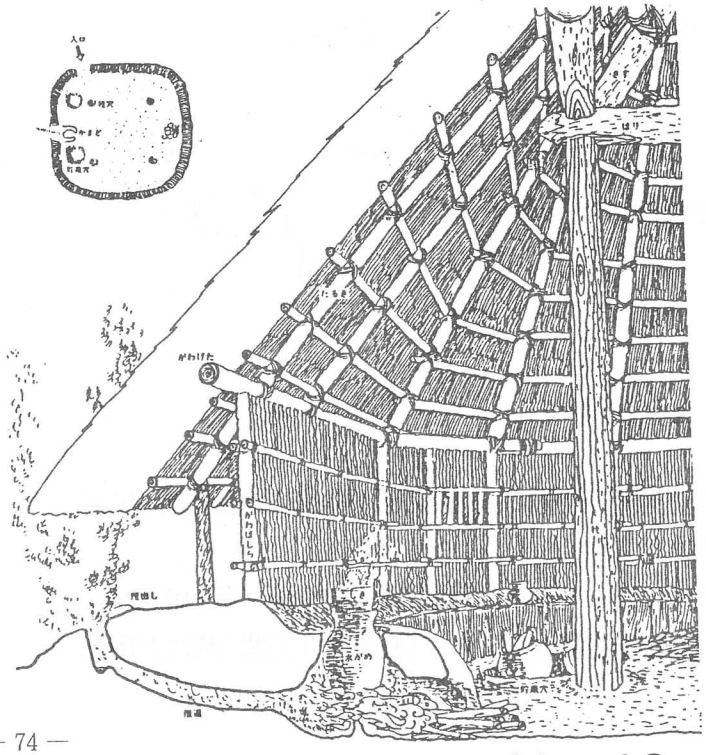
竪穴住居１出土鉄鏃　　S＝1／2

竪穴住居２　3.8m×4.2mの方形竪穴住居で、北西の辺の中央に地山を削って造った「かまど」があります。

この住居は火災に遭っており、床面に炭化材や灰・炭・焼土が広がっていました。出土遺物は少なく、須恵器や土師器の破片が出土した程度です。

竪穴住居２平面図





カマドの構造

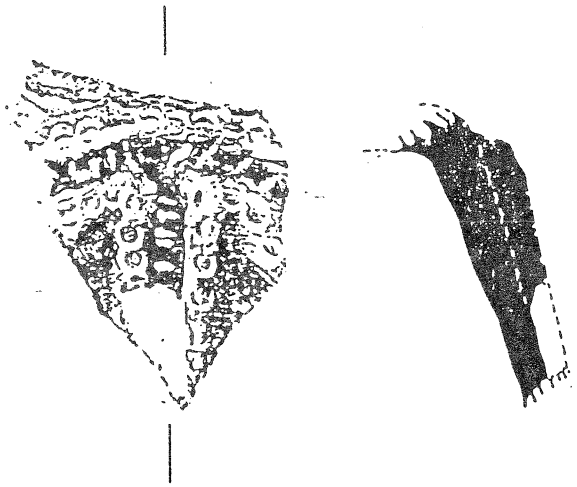
稲葉・中山著
『日本人のすまい』彰国社　より

12

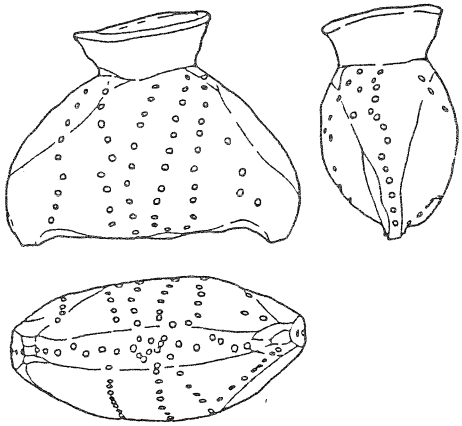
竪穴住居3,4　竪穴住居３は4.0m×3.8m、竪穴住居４は3.0m×3.2mの方形竪穴住居です。竪穴住居４は竪穴住居３が廃棄された後に建てられた住居です。どちらも遺物は少なく須恵器・土師器の破片が出土しています。

掘立柱建物　２間×３間以上の建物です。遺物が少なく時期の確定は難しいですが、竪穴住居３・４との方向と並行していることから同時期の建物と考えられます。

皮袋形提瓶　以上の建物の他、第６調査区の溝から皮袋形提瓶（ていへい）の破片が出土しており、市内では３例目です。



第６調査出土皮袋形提瓶　S＝１／２



北神第９地点出土皮袋形提瓶

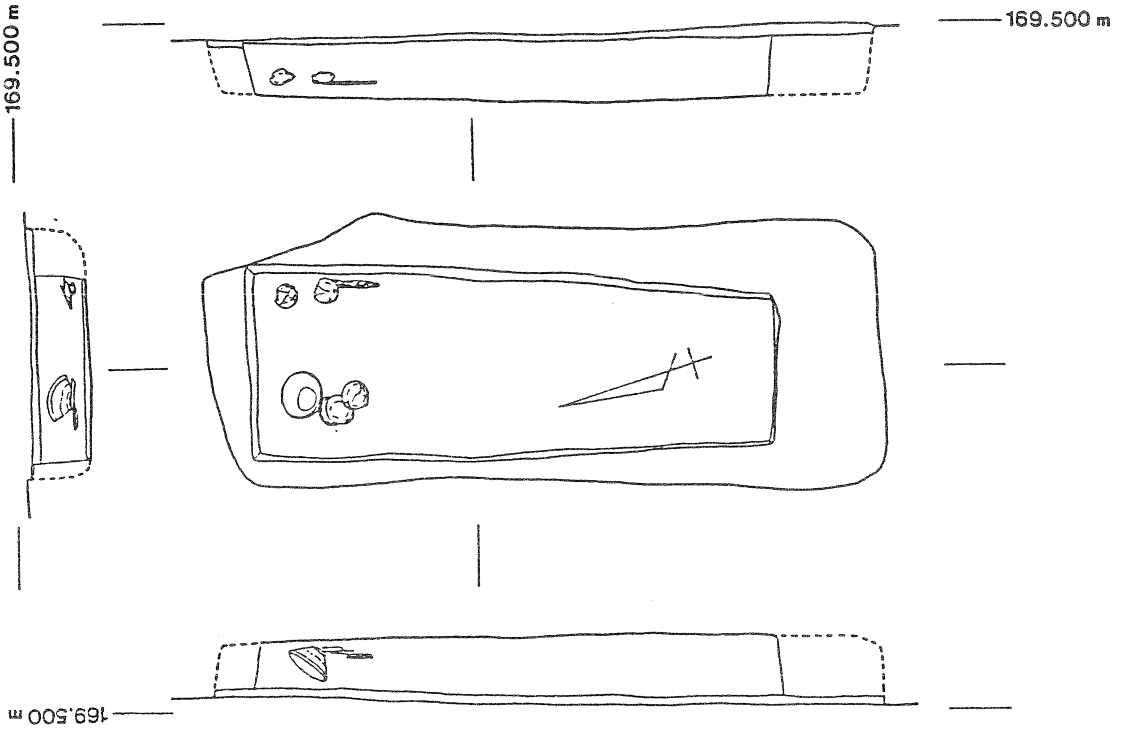
平安時代末（12世紀後半）　この時代の遺構として、木棺墓・土坑墓・ピット・土器溜まりが検出されています。

木棺墓　0.8m×2.2mの掘形を掘った中に、0.6m×1.7mの木棺を納めた土葬墓です。副葬品として、中国製の白磁の碗１・土師器の小皿５・刀子１が出土しています。

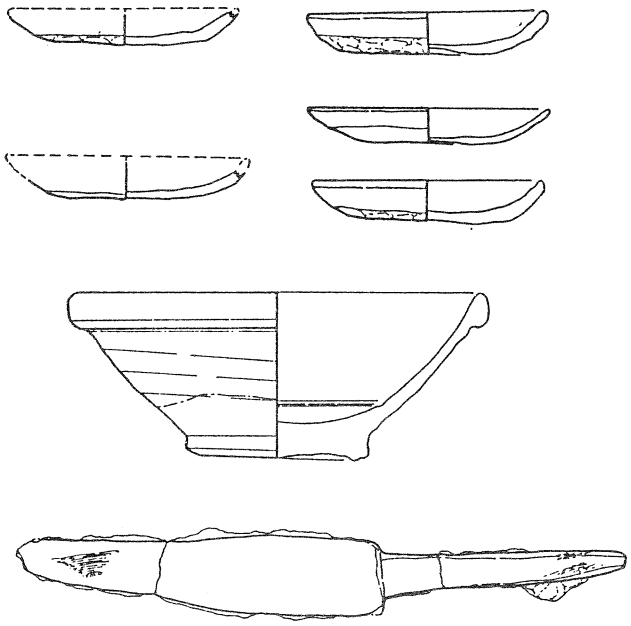
同様の木棺墓は宅原遺跡内からは、岡下・掖谷・鹿の子・有井・宮ノ元・豊浦・の各地区で見つかっています。

土坑墓　第10調査区から検出されました。0.5m×1.8mの土坑墓です。中から中国製白磁碗・土師器小皿が各１出土しています。

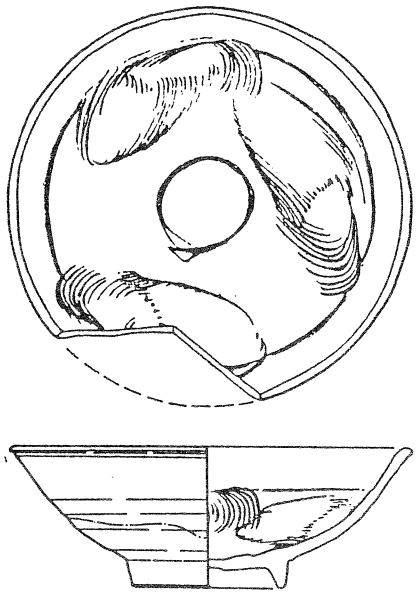
土器溜まり　第９調査区の浅い落ち込みから多数の土師器小皿・須恵器碗・小皿・白磁が出土しました。



第１調査区木棺墓平面・立面図



第１調査区木棺墓出土遺物　　S＝1／3



第９調査区土器溜まり出土遺物

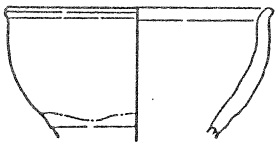
S＝1／3

安土桃山時代　この時期の遺構として農家の家屋が３棟見つかりました。
(16世紀末)　３間×２間の掘立柱建物で、妻入の住居と考えられます。西側に３
建物１　つの部屋があり、東側に土間があったと考えられます。現存するこの時期の民家は北区山田町の「箱木千年家」のように礎石を使った家がほとんどですが、今回見つかった建物のような掘立柱の建物も古い形態として残っていたようです。

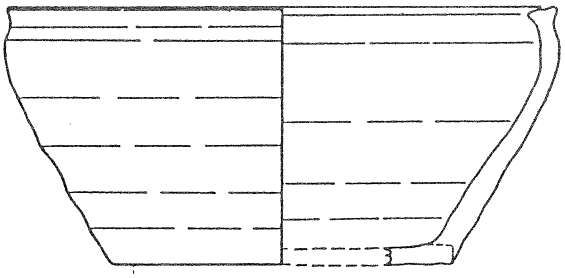
建物２　２間×２間の上屋の東西に半間分の下屋を持つ掘立柱建物です。建物１のような明確に土間と居間が分かれるような構造にはなっていません。

建物３　建物１と建物２の間にある１間×２間の小屋です。農具などを置いておく小屋と考えられます。

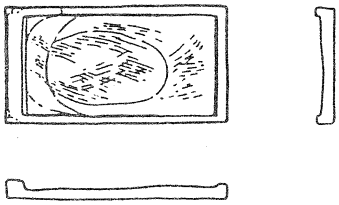
これらの建物の柱穴からはほとんど遺物は出ていませんが、周りにある土坑から美濃焼の天目茶碗や丹波焼のすり鉢・鉢や下駄、硯などが出土しています。



美濃焼　天目茶碗

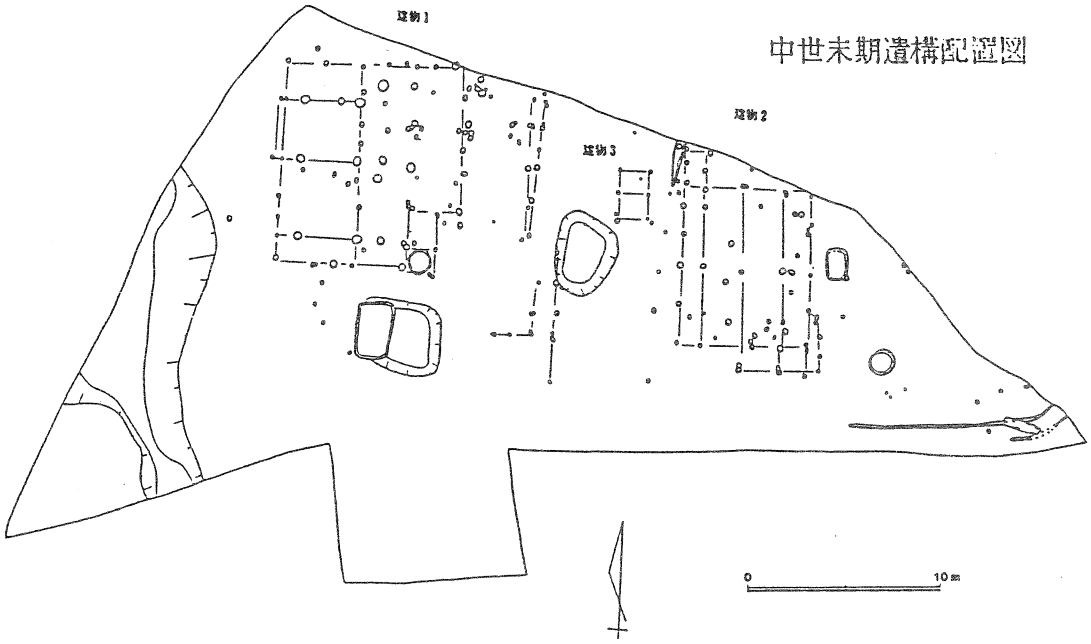


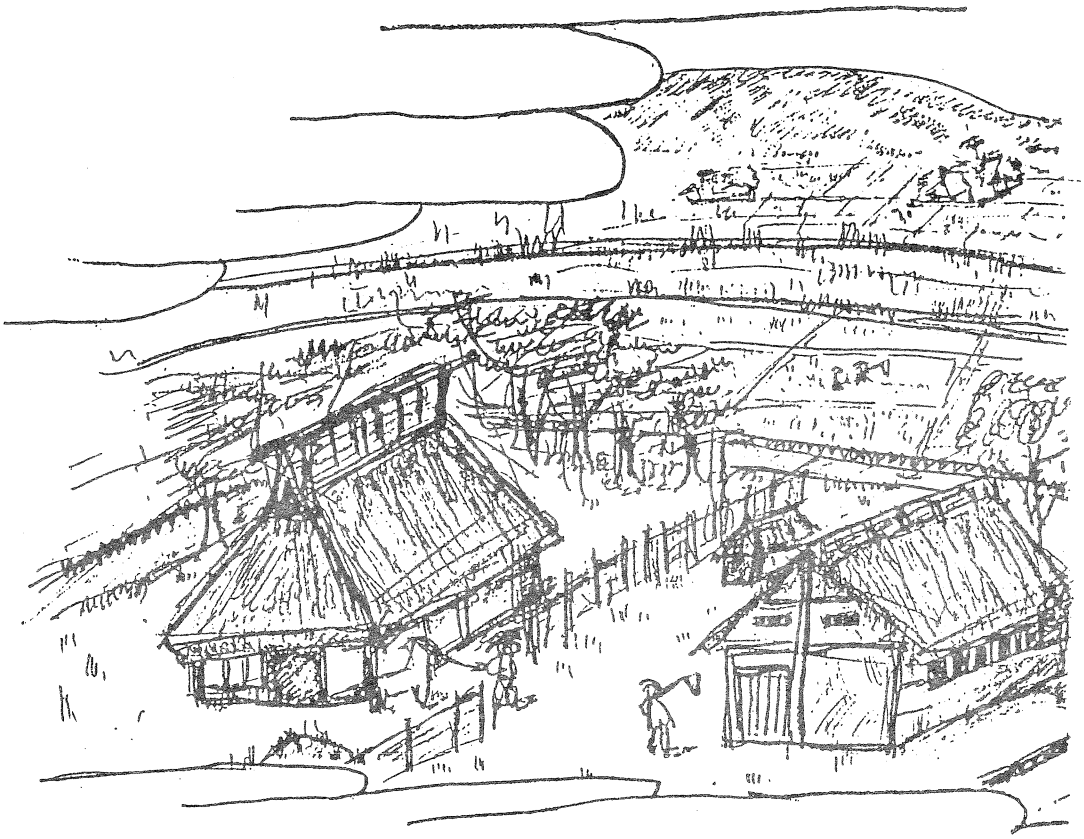
丹波焼　鉢



硯

S＝１／３





16

5. まとめ

以上のように今回の調査では、3時期の遺構が確認されました。

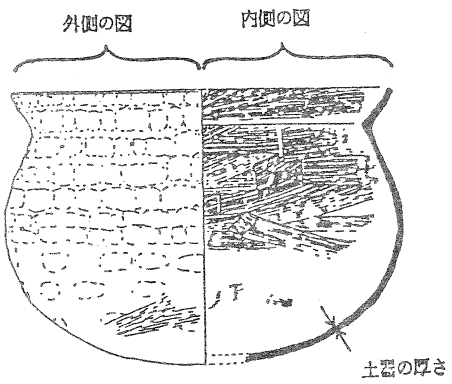
まず、6世紀後半から末にかけての竪穴住居・掘立柱建物が見つかりました。この時期の竪穴住居は宅原遺跡内においては宮ノ元地区と豊浦地区でのみ見つかっており、両地区が、この直後の時代に官衙的な性格を持つ地域になることと考えあわせると、この時期の中心的な集落であったと考えられます。

また中世前期の墓址が2基見つかりましたが宅原遺跡内の今までの調査でも同様の墓址が8ヶ所で見つかっており、いづれも住居の近くにあり、集団で造られた形跡がないことなど、当時の墓制を知る手掛かりになります。

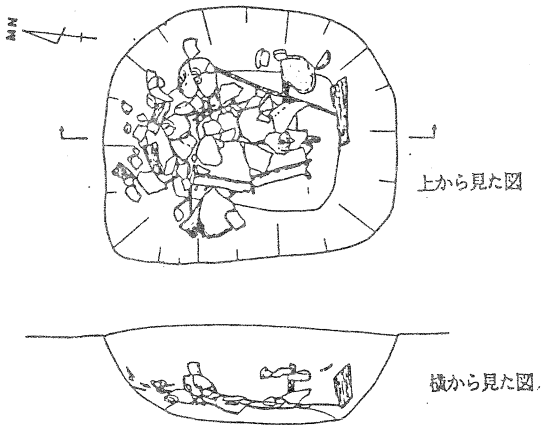
中世末期の家屋が3棟見つかりましたが、当時の農業の経営形態や村落景観、又民家の変遷を知るうえで、貴重な資料と言えます。

今回の調査で以上のような貴重な資料が得られ、今までの発掘調査の成果や今後の調査の結果を考えあわせ、地域の歴史像を知るうえで大変良い材料になると言えるでしょう。

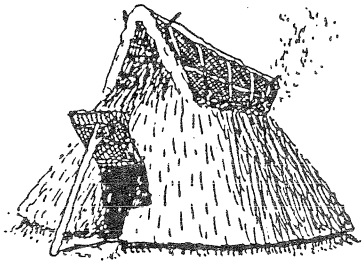
遺物実測図の見方



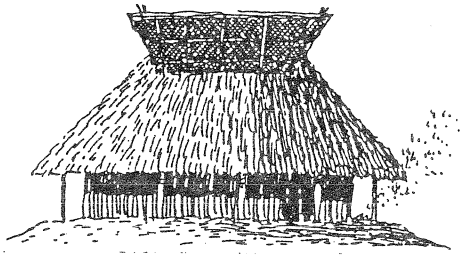
遺構図の見方



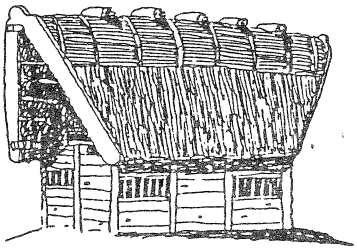
住居の変遷



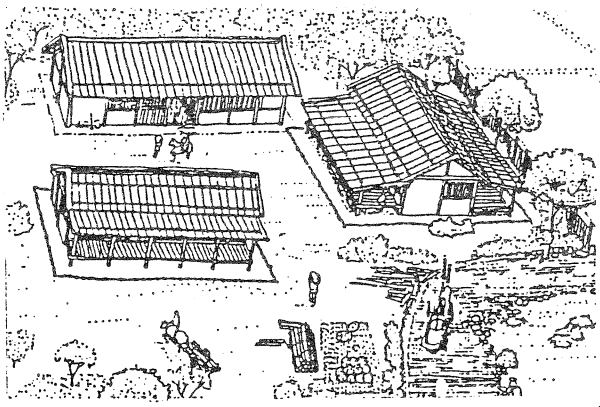
弥生時代の竪穴住居



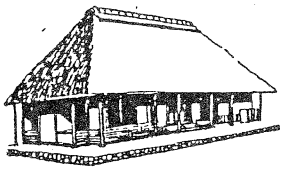
古墳時代の竪穴住居

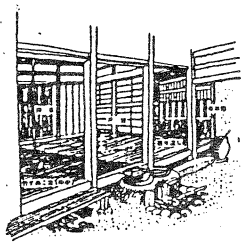


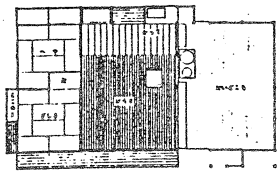
古墳時代の掘立柱建物



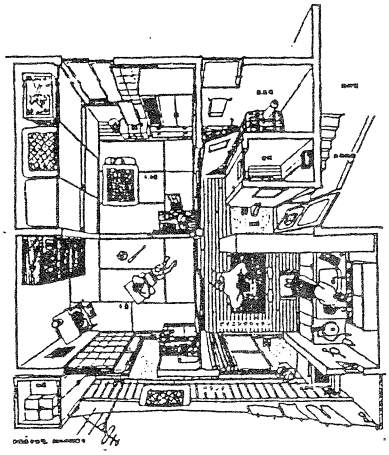
古代・中世の掘立柱建物







近世の民家

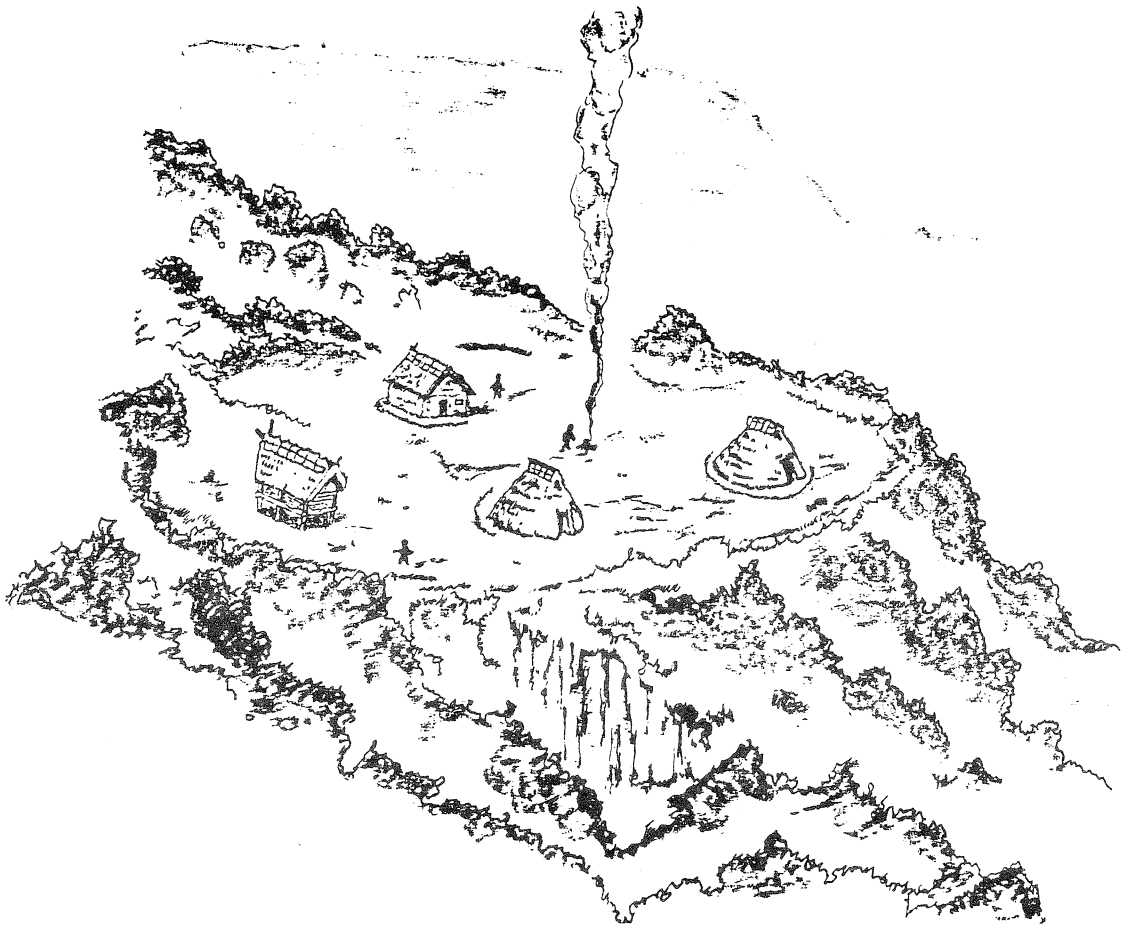


現代の公団住宅

兜頭清明「古代の村」『古代日本を発掘する6』岩波書店
稲葉・中山『日本人のすまい』彰国社　より

舞子・東石ケ谷遺跡

現地説明会資料



神戸市教育委員会

昭和６３年１１月２７日

今回の調査に当たっては、神戸市文化財専門委員の檀上重光、宮本長二郎両先生にご指導いただきました。

また、浅沼興産株式会社、株式会社神戸宅建センターの協力を得ました。

Ⅰ　はじめに

舞子・東石ケ谷遺跡は、現在、舞子墓園になっている丘陵上一帯に位置する遺跡です。

この付近は、舞子古墳群として、古くから古墳時代後期の横穴式石室が数多く分布することで知られています。かつては100 基近くが存在していたようですが、今日ではわずか20基程度が残されるのみです。

この古墳群のある丘陵上に、弥生時代の土器や石器の出土することが知られたのは、昭和40年代のことです。その後に行われた古墳の調査でも、石鏃等が数多く出土しています。

この遺跡で、初めて弥生時代の住居跡が調査されたのは、昭和57年度で、後期の円形の竪穴式住居が２棟発見されました。昭和59年度には、隣接する地区で、やはり後期の方形の竪穴式住居２棟、円形の竪穴式住居１棟が発見されました。

これらの竪穴式住居は、造成工事をすることなく、再び地下に埋め戻され、保存されています。

今回の調査地は、マンション建設が計画されたため、昨年度、試掘調査を行ったところ、２～３棟の竪穴式住居が発見されました。このため、本年８月29日から全面的に発掘調査を行っています。

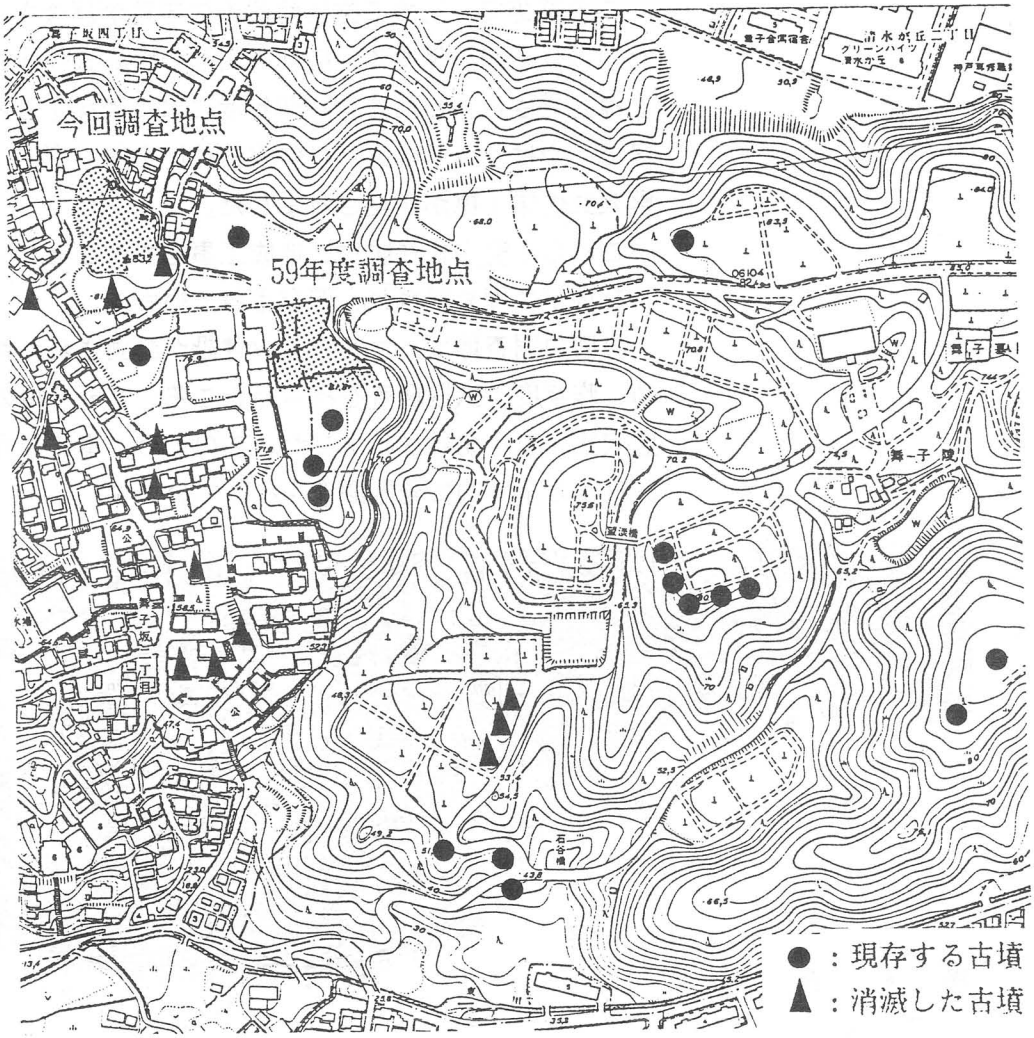
調査地点位置図（S＝１：50000）

Ⅱ 立　地

当遺跡は、舞子丘陵の中でも最も高い地点の一部で、標高83m前後の尾根上に位置しています。付近の水田面との比高差は75m前後で、弥生時代中・後期に現れる特徴的な集落 —— 高地性集落と考えられます。

晴れて空気の澄んだ日には、西は家島群島、南は淡路島・紀淡海峡、東は六甲山南麓から生駒山系を見晴らすことができます。

当遺跡の南西約650 mに存在する大歳山遺跡や、西約450 mから発見された投ケ上銅鐸との関連が深い遺跡と考えられます。



舞子・東石ケ谷遺跡と舞子古墳群　（S＝1：5000）

Ⅲ　調査の概要

今回の調査地は、約2700㎡で、竪穴式住居８棟、平地式建物10棟、高床式建物６棟が出土しました。これらは、いずれも弥生時代のもので、中期に属する建物は竪穴式住居１～４で、竪穴式住居５～８は後期に属します。平地式建物や高床式建物は、中・後期いずれに属するか不明です。

建物の他に、どのような目的で使用されたか不明の溝や穴も数多く出土しています。

竪穴式住居１

やや傾斜する地点に建てられているため、床面の一部は流れ去っています。６×７ｍの楕円形であったと考えられます。

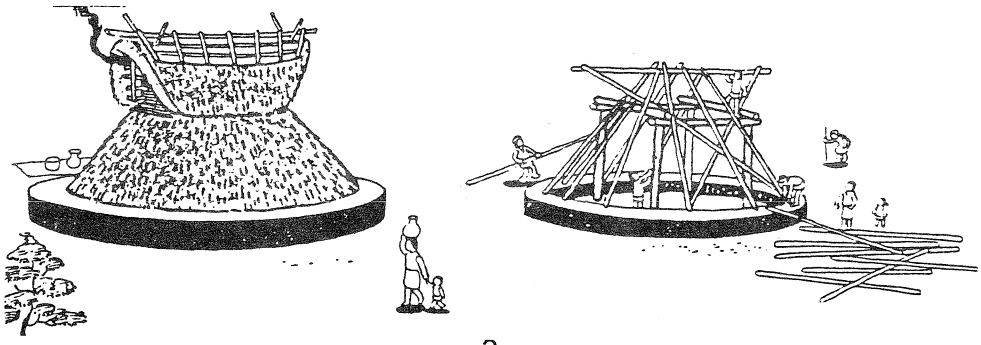
この住居は火災で廃棄されたらしく、床面には屋根に使われていた材木が炭になって倒れていました。炭化材の上には焼けて堅くなった粘土がかぶさっていました。茅葺きの屋根の上に、あるいは茅の間に粘土が張られていたかもしれません。

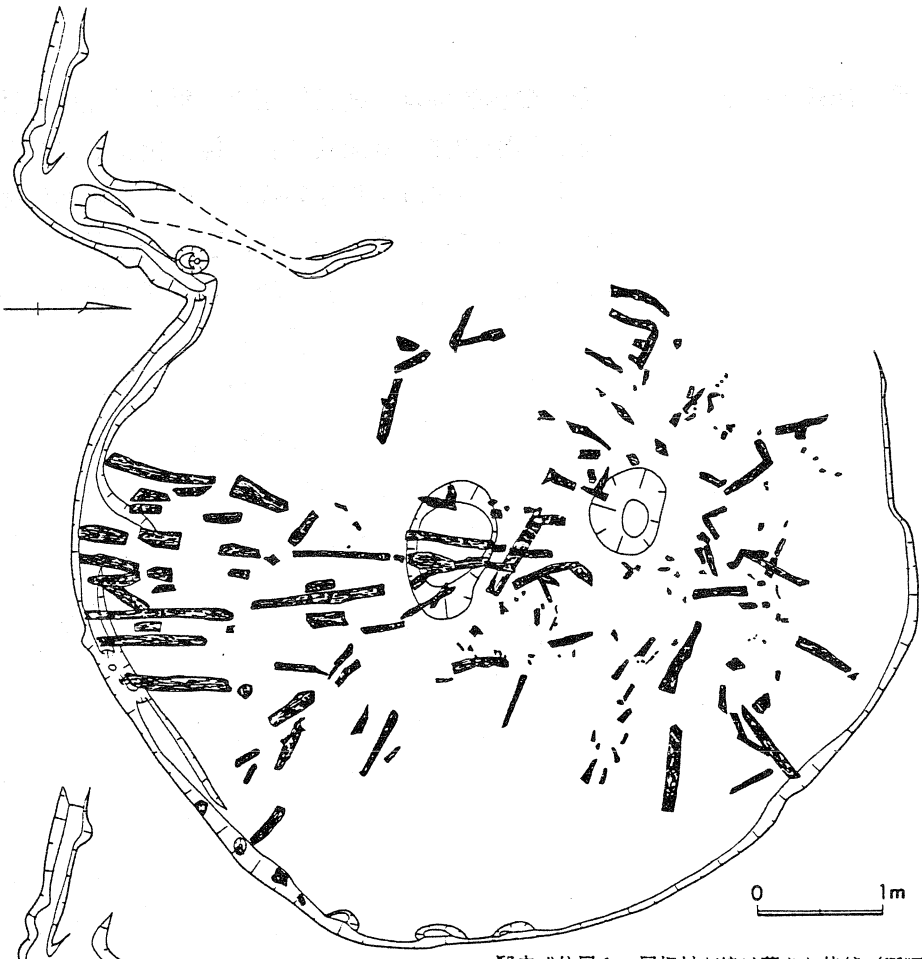
屋根を支える柱は９本で、炉跡は２基存在しました。この炉の中には倒れた屋根材が落ち込んでいたので、二つ同時に使われていたようです。炉の側には砥石や作業台に使った石が置かれています。

また、斜面の高いほうの壁際には溝が掘られ、その溝は住居の外へ出ています。しみこんだ雨水などを排水するために設けたと考えられます。

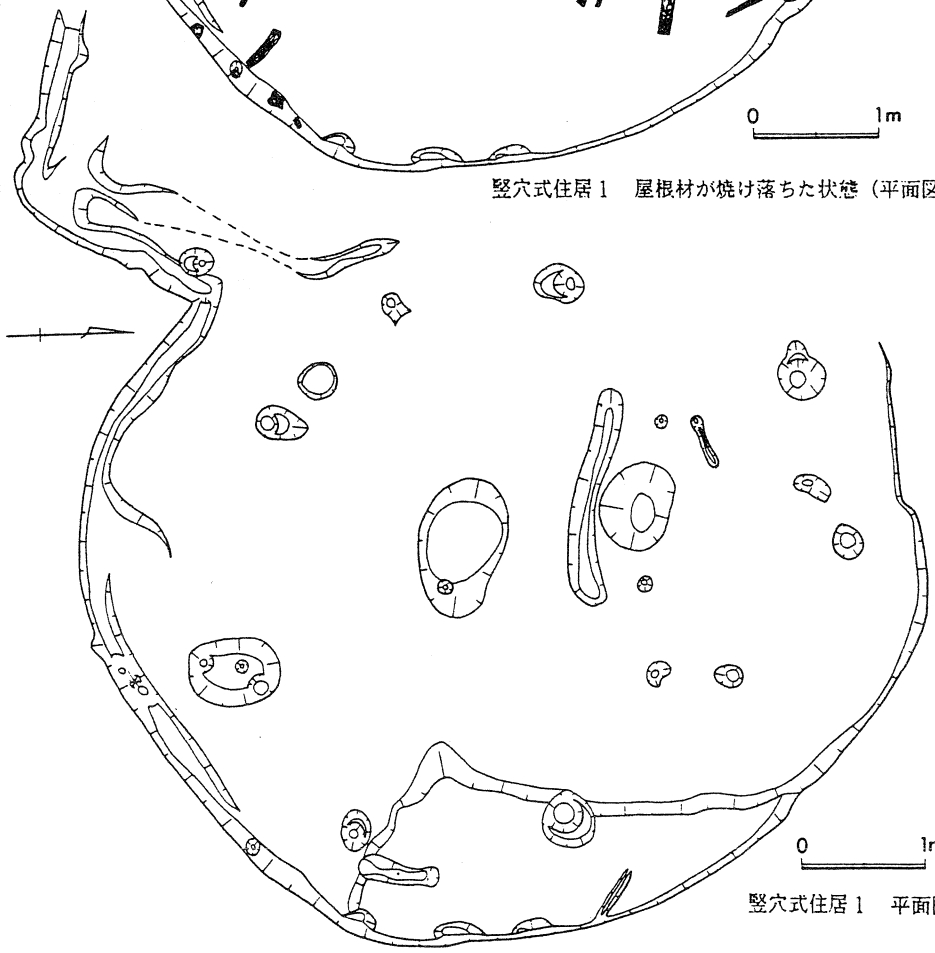
土器はほとんど出土しませんでしたが、石鏃10本、石錐２本が出土し、床面には石器を作る時にでるサヌカイトの石くずがたくさん散らばっていました。

また、弥生時代には珍しいガラス玉（１点）や碧玉製の管玉（５点）も出土しています。





竪穴式住居１　屋根材が焼け落ちた状態（平面図）



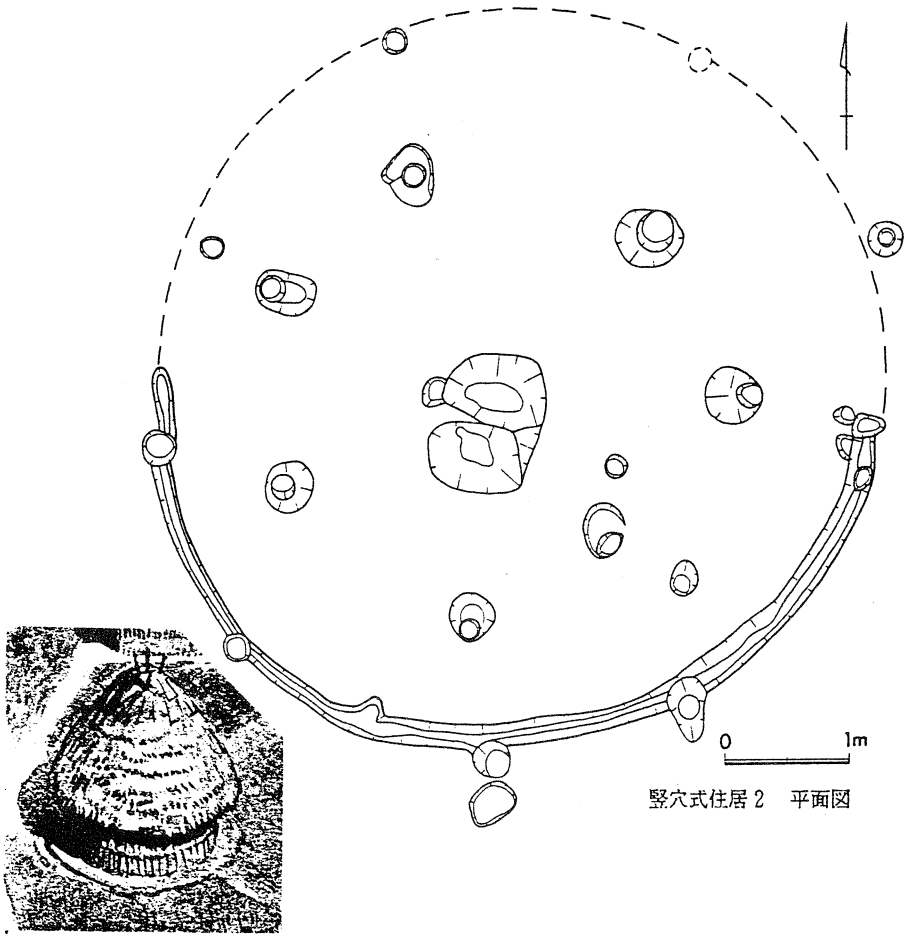
竪穴式住居１　平面図

竪穴式住居２　円形の竪穴式住居ですが、現在では地表面が削られてしまい、壁は残っていません。壁際に掘られた溝（周壁溝）から推定すると、直径６ｍ程度です。

屋根を支える柱は７本ですが、周壁溝上にも柱が有り、他に類を見ない構造の住居だったようです。これを復元すると、サイロのような形が想定されます。

中央に炉が２基ありますが、一緒に二つ使われていたのではなく、一方を埋めてからもう一方を掘っています。

土器は、全くと言ってよいほど出土しませんでしたが、わずかに残された床面にはサヌカイトの石くずがたくさん散らばっていました。



竪穴式住居２　平面図

竪穴式住居３　この竪穴住居も削られて、柱と炉だけしか残っていませんでした。柱は４本しか確認できませんでしたが、その配置からもとは５本あったようです。炉はやはり２基ありますが、竪穴式住居２と同じく、一方を埋めてから一方を掘っています。

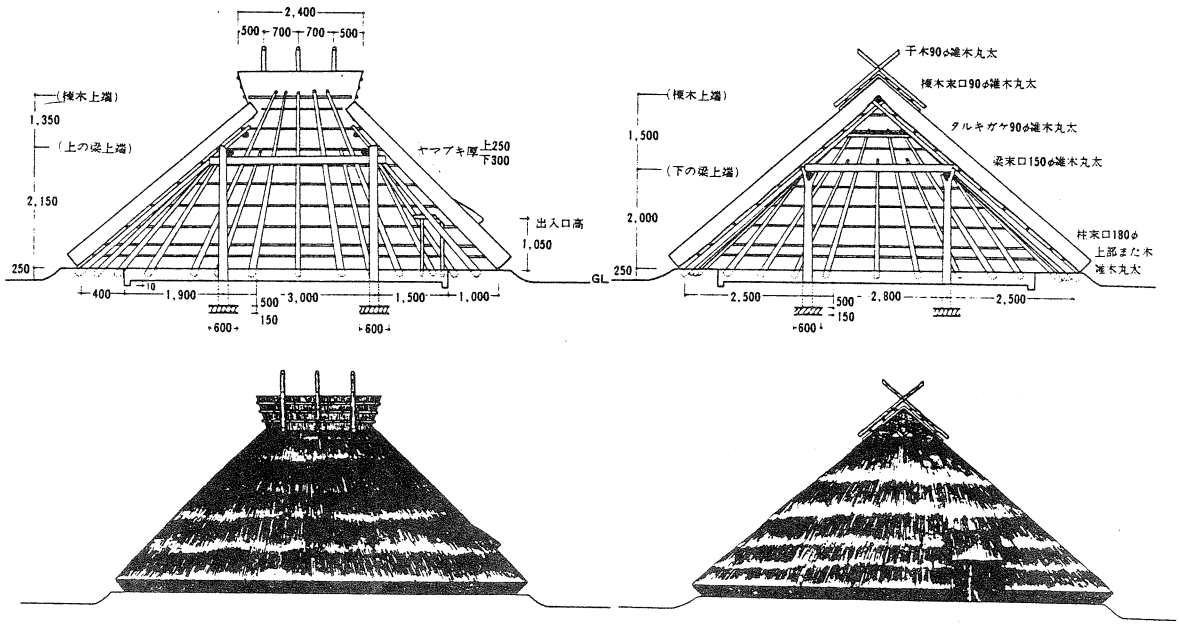
この住居の大きさは、柱の配置から推定すると、直径５～６ｍ程度の円形であったようです。

土器はわずかしか出土しませんでしたが、やはりサヌカイトの石くずが散らばっていました。

竪穴式住居４　この建物は、明確な柱の並びがなく、簡単な構造の小屋のようなものだったようです。

人が住むための建物ではなく、石器を作るための作業場だったと考えられます。それは、この建物から土器がほとんど出土しないことや、床面におびただしい数のサヌカイトの石くずが散らばっていること、中央に作業台と考えられる石が置かれていることから推定されます。

弥生時代の中期までの集落には、必ずと言ってよいほど、このような石器作りの作業場があります。



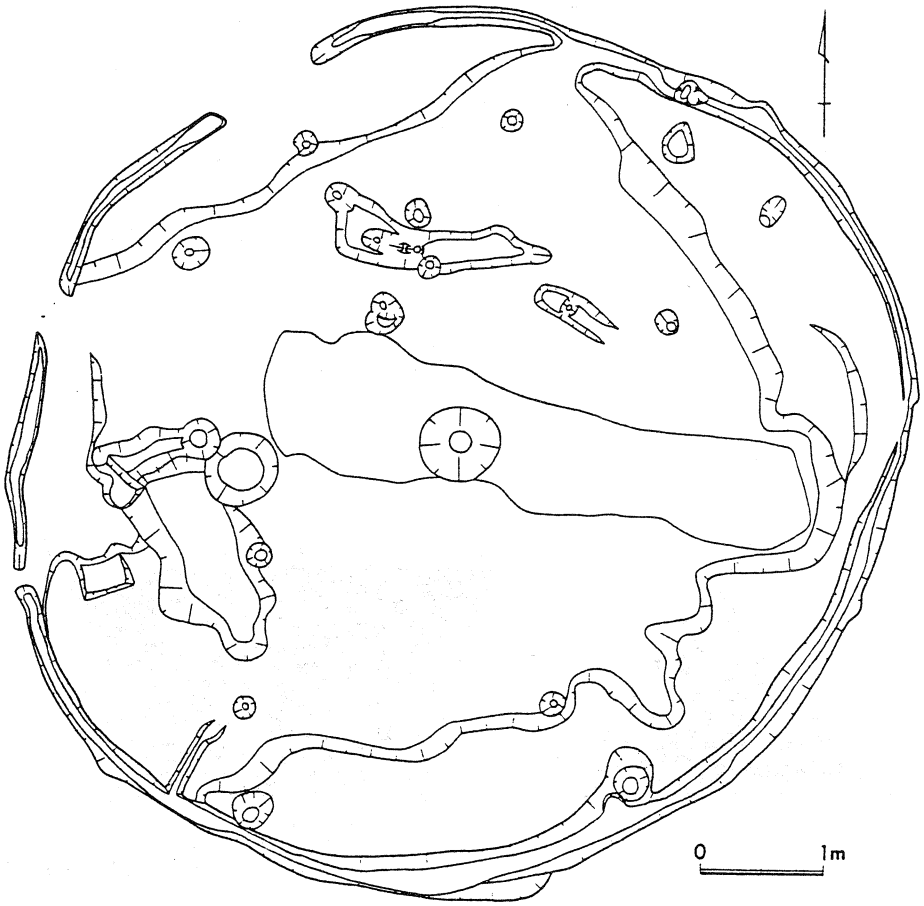
田能遺跡の復元住居
（田能遺跡発掘調査報告書より）

竪穴式住居５　長径８ｍ、短径７ｍの楕円形で、壁際には溝が巡っています。住居の内側には、ベッドのように一段高い部分がつくられています。これを「ベッド状遺構」と呼んでいますが、実際にベッドとして使ったかどうか分かりません。

柱は、大きなものがなく、小さなものが周囲に並んでいます。ただ、一周はせず、どのような構造であったか分かりません。

中央には深い穴があり、一般的には炉と考えますが、この穴は焼けてもいないし、炭も入っていませんでした。

住居が半分ほど埋まった時に、幅１ｍ、長さ4.5ｍの長方形の穴が掘られています。この中には、炭が詰まっていて、底は赤くやけしまっていました。いつ、何のために作られた穴か分かりません。

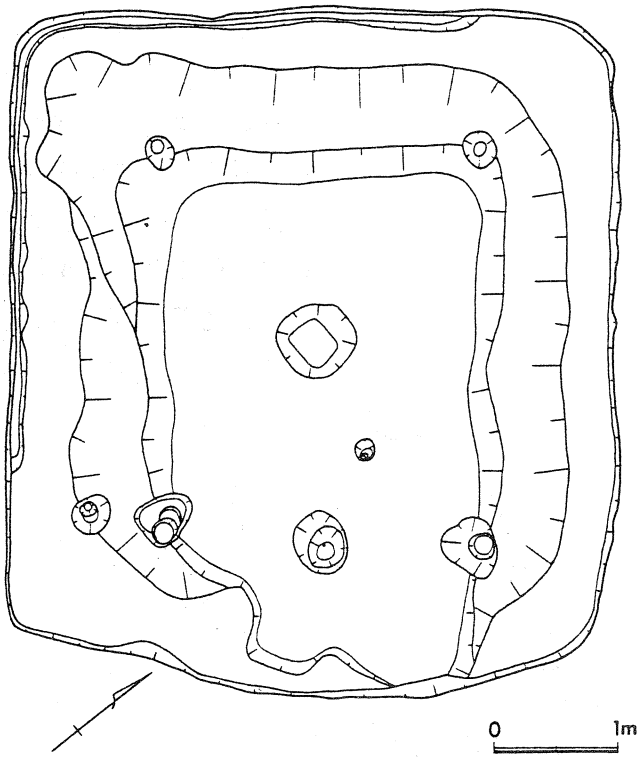


竪穴式住居５　平面図

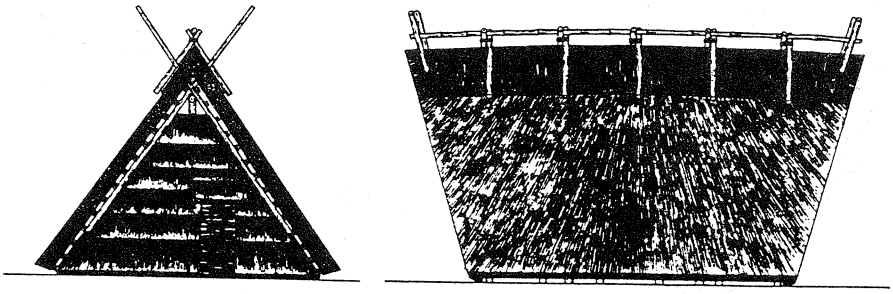
竪穴式住居６　一辺５ｍの方形で、屋根は４本の柱で支えられていました。三辺にはベッド状遺構が設けられて、切れている部分は入口であったと考えられます。

中央には炉がありぐ柱と柱の間には深い穴が有ります。この穴の底には、鉢がうつ伏せにおかれていました。

入口の脇には、土器を作るためにおいていた粘土と石の重り（石錘）が置かれていました。



竪穴式住居６　平面図



田能遺跡の復元住居
（田能遺跡発掘調査報告書より）

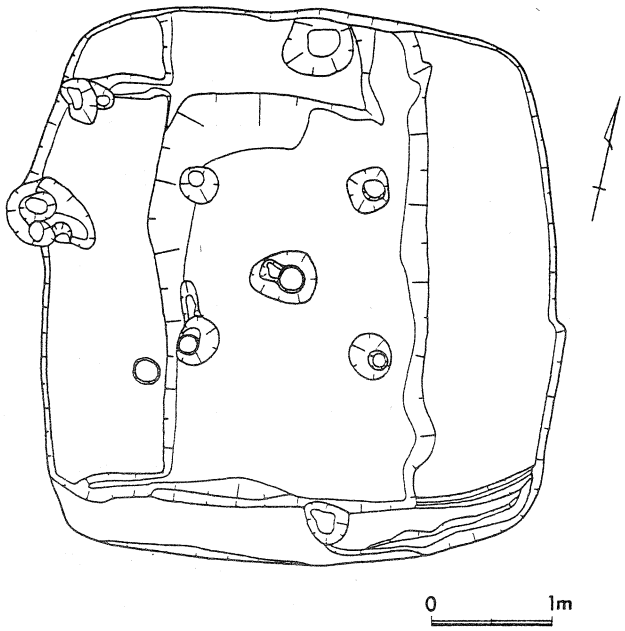
竪穴式住居７　一辺４ｍの方形で、やはり４本の柱が有ります。ベッド状遺構は、三方に設けられています。

中央には炉があり、一方の壁際には、貯蔵穴と言われる穴があります。貯蔵穴の横とベッド状遺構の上には、砥石が残されていました。また、直径５cmほどの丸い石が２個残されていました。この石は、投弾と呼ばれ、獲物を取ったり、敵をやっつける時に用いたと言われています。

ベッド状遺構のない部分は、一度拡張をしたらしく、50cmほど外にふくらんでいます。

竪穴式住居８　大部分が調査地区外にあるため、確かな大きさはわかりませんが、一辺６ｍ前後の方形だったようです。ベッド状遺構が設けられていますが、その上に細い溝があり、一辺４ｍ前後の住居が拡張されて、６ｍ前後のものになったようです。

拡張される前の住居の壁際には貯蔵穴があり、その中から、先ほどの竪穴式住居７とうり二つの投弾が２個出土しました。



竪穴式住居７　平面図

平地式建物
1～10

平地式と呼ばれる建物は、地面を掘り下げること無く、整地して床にしているものです。そのため、この遺跡のように昔の地表面が大きく削られているところでは、遺物が残らず、時期の確定ができません。ただ、柱の跡から出てくる土器や石器は、すべて弥生時代のもので、竪穴式住居と一緒の時期に使われていたことは確かです。

この建物は、住居として使われたのではなく、物置小屋や作業小屋として使われたと言われています。

平地式建物
の規模

建物番号	規　　模（単位m）
1	1間×4間　〔3.6 ×5.7〕
2	2間×3間　〔3.6 ×4.4〕
3	1間×4間　〔3.3 ×5.3〕
4	2間×5間　〔3.4 ×6.7〕
5	2間×3間　〔4.4 ×4.6〕
6	3間×3間　〔2.4 ×3.5〕
7	2間×6間　〔3.5 ×8.0〕
8	2間×5間　〔3.6 ×5.6〕
9	2間×4間　〔4.2 ×5.5〕
10	2間×4間　〔3.4 ×5.5〕

高床式建物
1～6

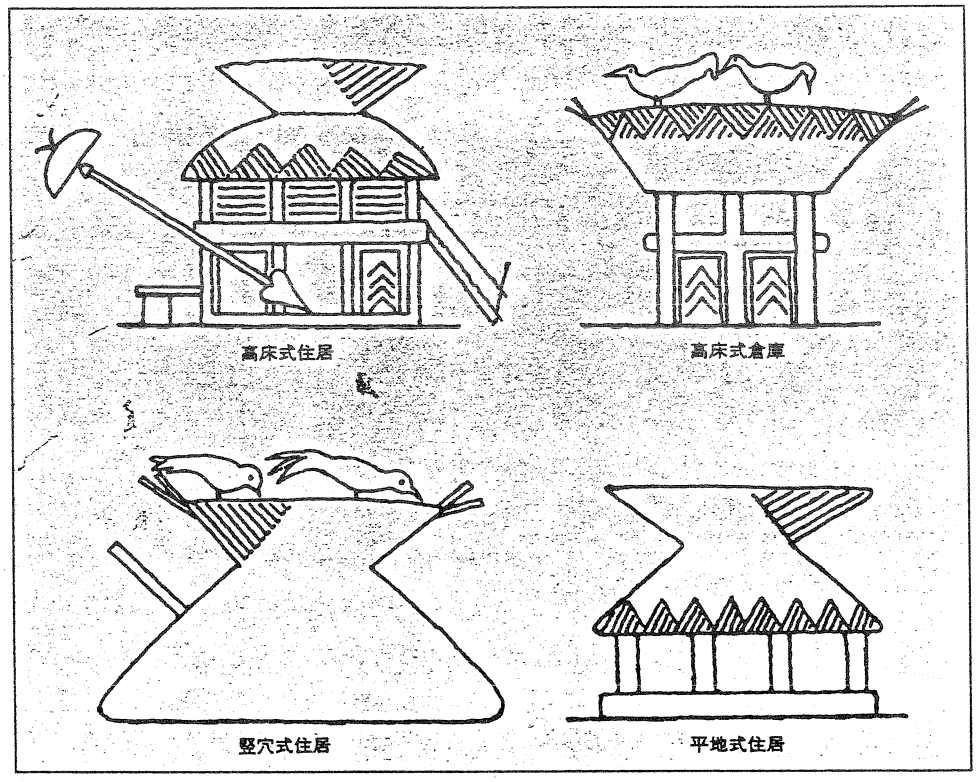
高床式の建物は、一般的に高床式倉庫と呼ばれ、竪穴式住居と共に弥生時代の集落ではよく知られています。地表面から人の背ほども床を上げるため高床式と呼ばれ、主に収穫した米を保存するのに使われたと言われています。内部への出入りは、はしごを使っていました。また、ネズミなどが入らないように、柱には「ネズミ返し」とよばれる板がつけられていました。

床を高くするため、構造上あまり大きくすることができず、1間×1～3間の平面形がほとんどです。2間の辺の中央の柱は、床を支えるためのもので、地表にあまり深く埋められなかったので、この遺跡では残っていないものもあります。

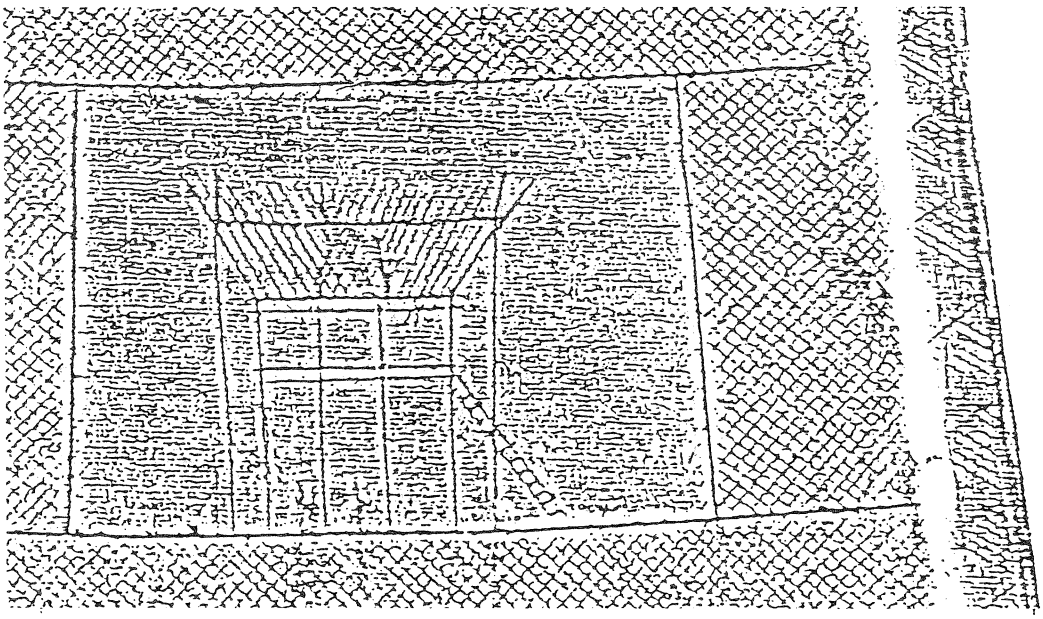
高床式建物
の規模

建物番号	規　　模　（単位m）
1	1間×(3)間　〔1.5 ×4.3 〕
2	1間×2間　〔2.7 ×2.5 〕
3	1間×(2)間　〔1.5 ×2.3 〕
4	1間×1間　〔2.0 ×2.6 〕
5	1間×1間　〔1.8 ×2.2 〕
6	1間×3間　〔1.7 ×3.8 〕

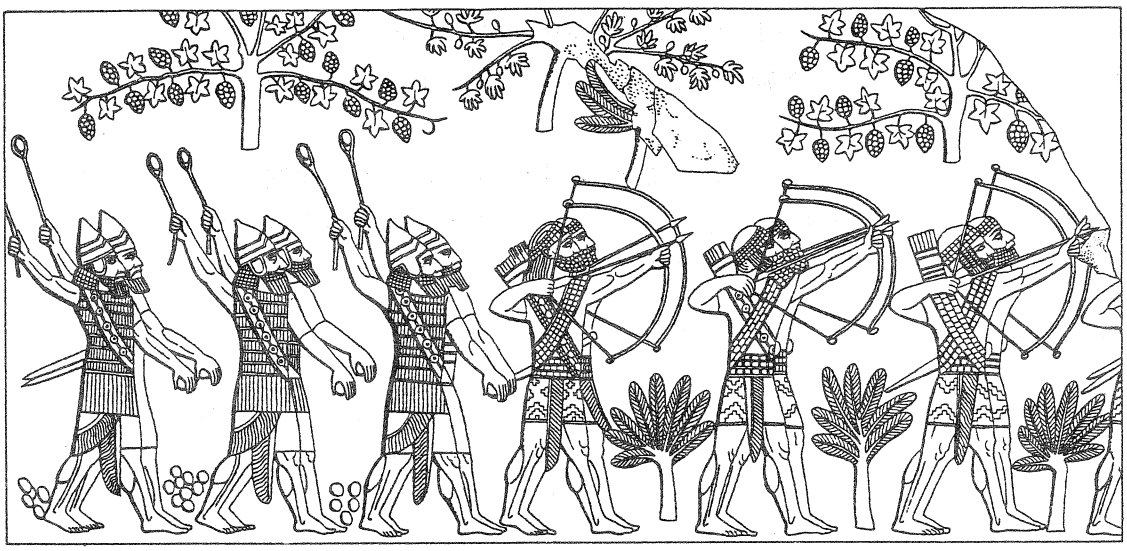
（ ）の数字は推定



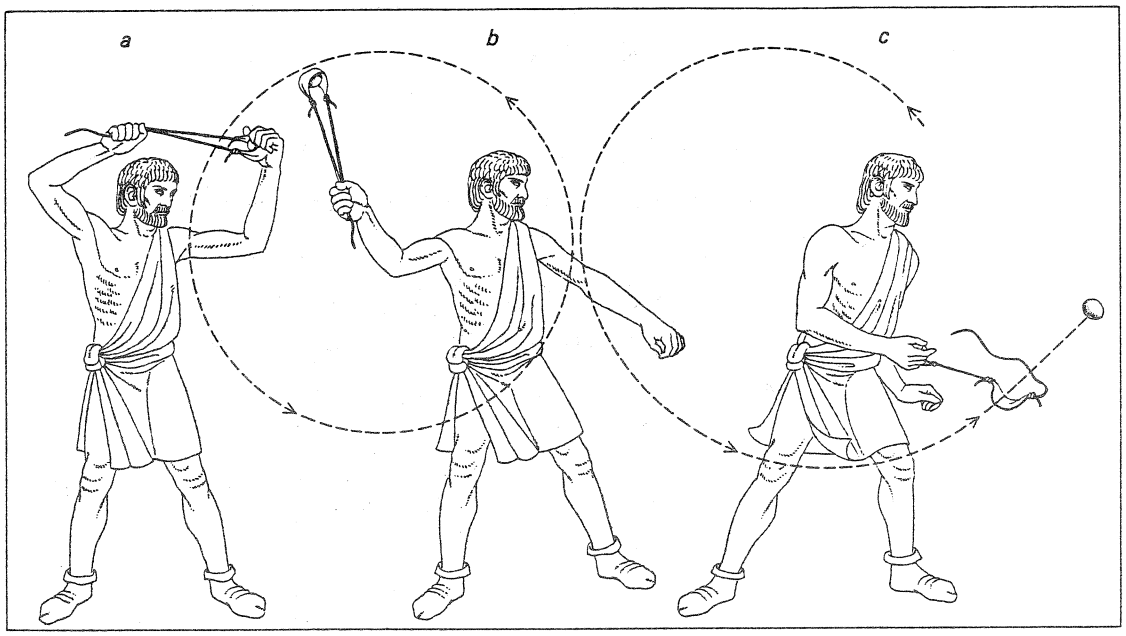
家屋文鏡に鋳出された建物の復元イラスト
（週刊朝日百科日本の歴史41）



銅鐸に描かれた高床式建物
（伝香川県出土鐸）



アッシリアの投石手　セナンケリブ(紀元前704～681年)の戦役の1つを示すニネヴェ出土のレリーフの図である。アッシリアの投石手たちは射手の後列に並び，投石器を自分たちの体に平行に振り上げている。戦列における彼らの位置から見て，投石の着弾距離は矢よりも遠かったと考えられる。



皮ひもの投石器による投てき　(*a*)まず投石器に弾丸をこめ頭上に構える。投石器の皮ひもの一端を輪にして，投げるほうの手の指にはめて固定し，他の一端を親指と人差指の間にはさむ。(*b*)腕というよりは手首の動作で投石器を時計の針と逆方向に3～4回振り回して，弾丸に最大の速度をつける。(*c*)投石手が親指と人差指の間にはさんでいる皮ひもの一端を放すと弾丸が飛び出す。放物線を描いて飛び出す弾丸の初速は時速100キロ程度。

投弾の使用方法の一種
(別冊サイエンス特集考古学　文明の遺産)

ま と め

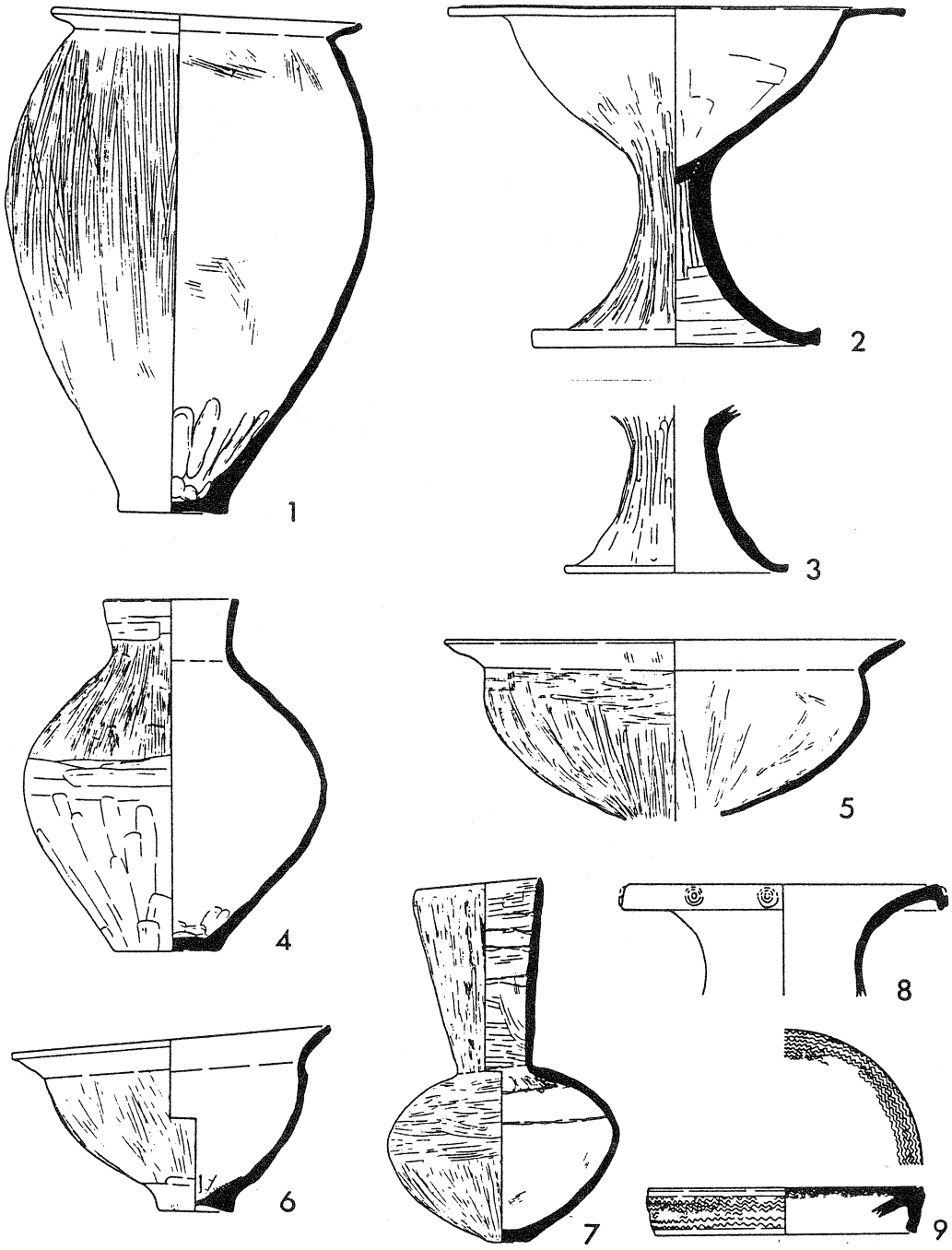
今回の調査は、この付近ではこれまでになく大きな発掘面積で、数多くの成果をあげることができました。

まず、この集落は中期後半に始まり、後期にまで継続することが分かった点です。六甲山南麓でも数多くの高地性集落が知られていますが、この舞子・東石ケ谷遺跡が、畿内で最も西の後期にまで継続する高地性集落であることが分かりました。

これより西でも数多くの高地性集落が知られていますが、いずれも中期末をもって廃絶しています。したがって、この舞子付近までが弥生時代に畿内の力が及んだ範囲と考えられます。また、畿内の最も西の見張り台であったとも考えられます。

次に、この集落では竪穴式住居、平地式建物、高床式建物がセットで存在したことが分かりました。このような集落は兵庫県下では初めてで、高地性集落とはいえ大規模な集落であったと考えられます。

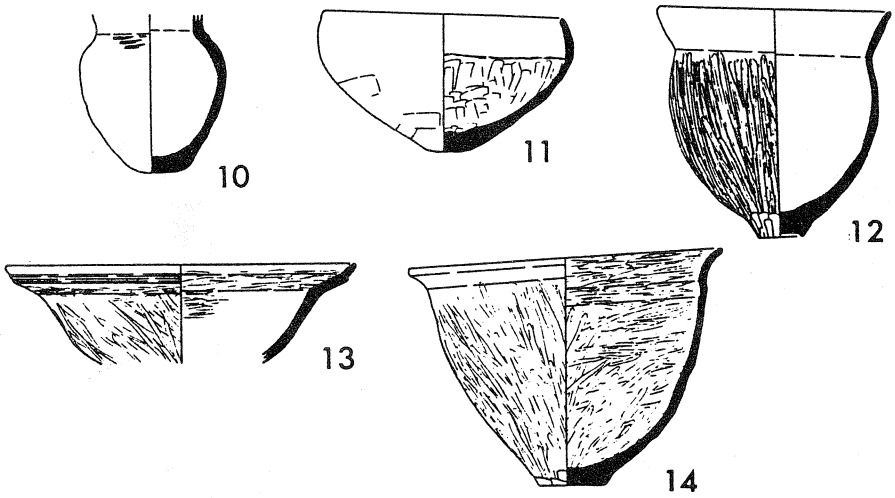
この舞子丘陵上には、弥生時代中期・後期を通しての集落が広範囲に存在し、古墳時代後期の横穴式石室群と共に今日まで保存されてきました。これから後も、久しく保存され続けられますよう願いますと共に、今後とも皆様方のご理解とご協力をお願い致します。



出土土器実測図（S＝1：4）

1・3　溝1　　2　土坑3

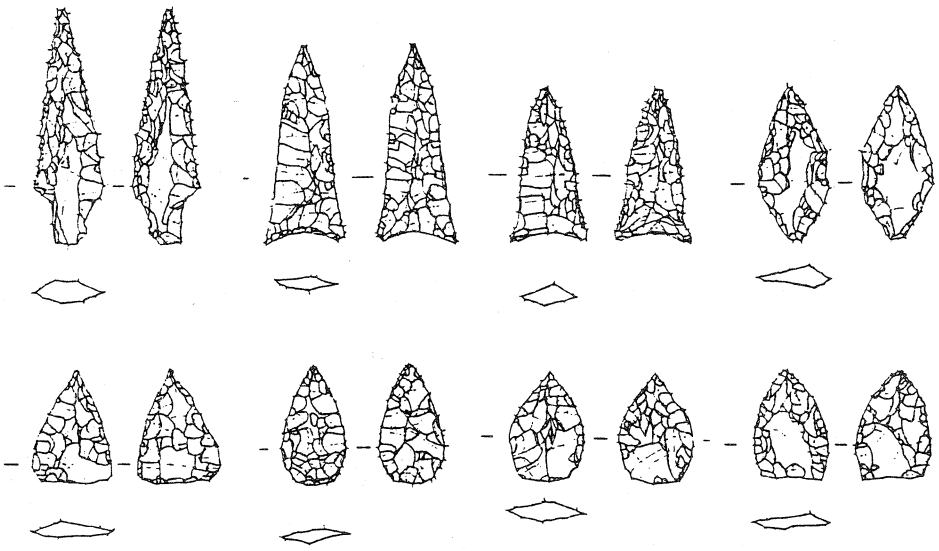
4　平地式建物1　　5～9　竪穴式住居5



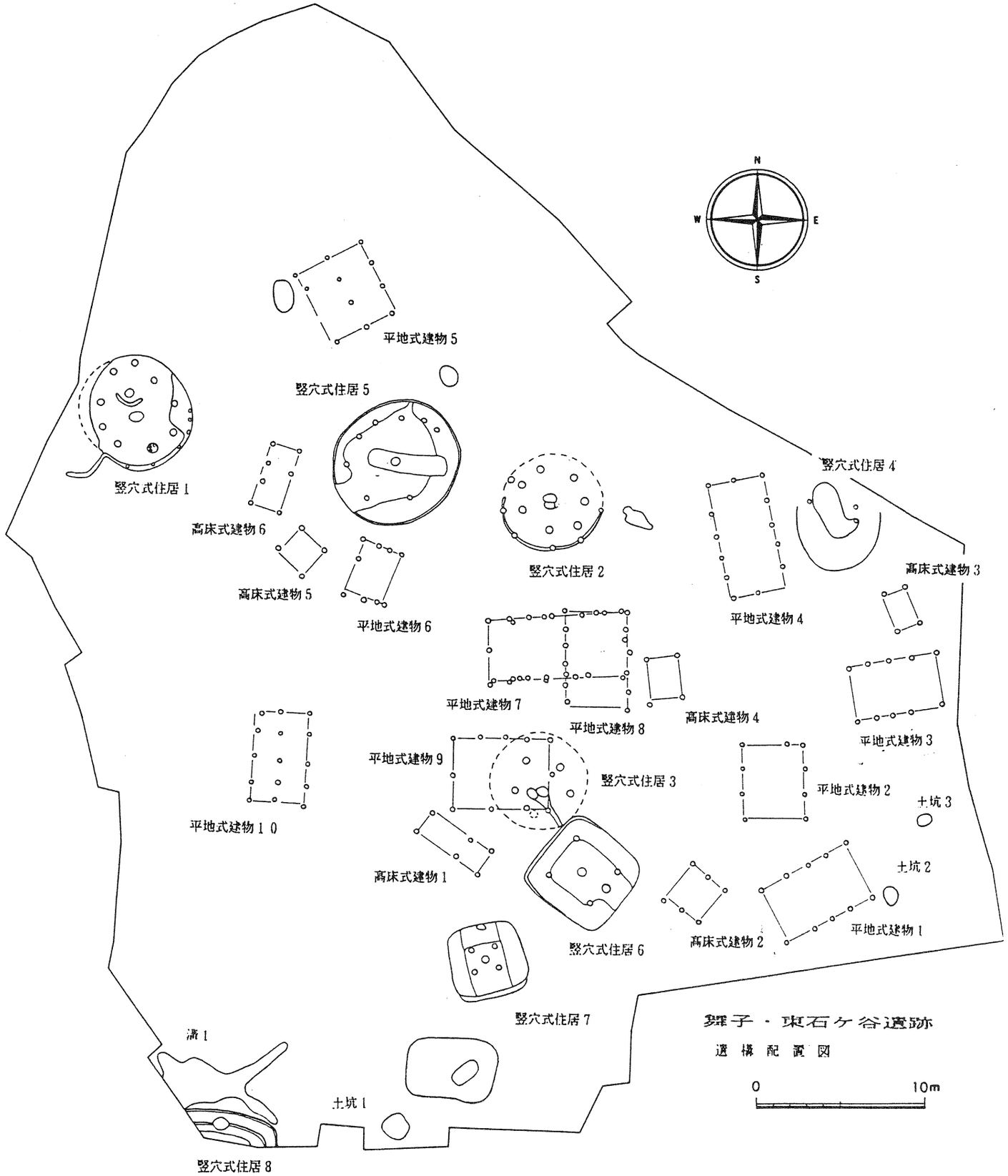
出土土器実測図（S＝1：4）

10・11　竪穴式住居6　　12・13　竪穴式住居7

14　竪穴式住居8

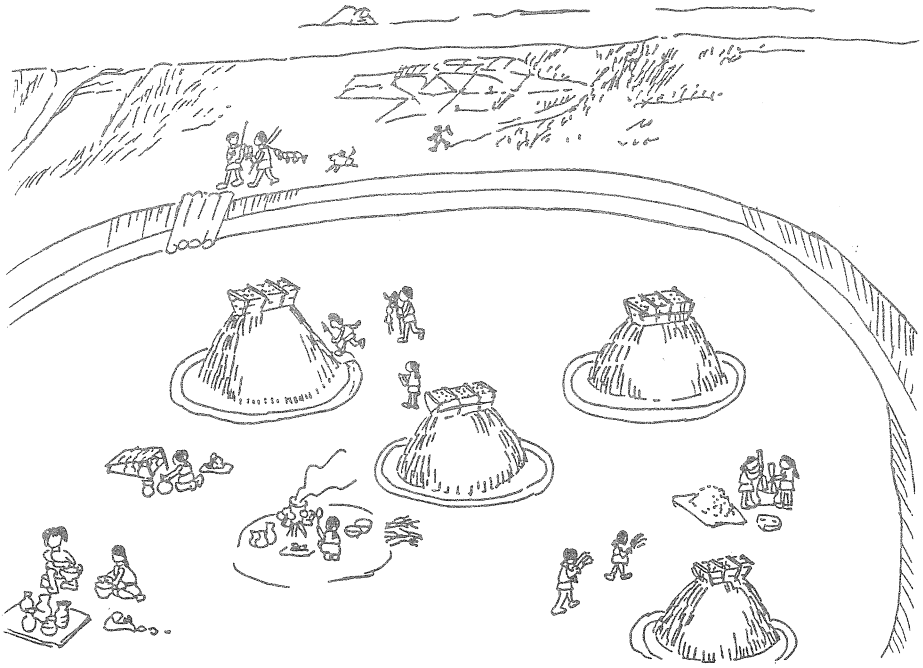


出土石鏃実測図（S＝1：2）


N
W
E
S
平地式建物 5
竪穴式住居 5
竪穴式住居 1
高床式建物 6
竪穴式住居 2
竪穴式住居 4
高床式建物 5
平地式建物 6
平地式建物 4
高床式建物 3
平地式建物 7
平地式建物 8
高床式建物 4
平地式建物 3
平地式建物 9
竪穴式住居 3
平地式建物 2
土坑 3
平地式建物 1 0
高床式建物 1
土坑 2
竪穴式住居 6
高床式建物 2
平地式建物 1
竪穴式住居 7
溝 1
土坑 1
竪穴式住居 8
舞子・東石ケ谷遺跡
遺構配置図
0
10m

大開遺跡

現地説明会資料



昭和６３年１２月１８日

神戸市教育委員会

今回の調査については、神戸市文化財専門委員の檀上　重光、宮本　長二郎の両先生および、奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長工楽　善通先生の御指導をいただきました。また兵庫県教育委員会の御協力をいただきました。

1. はじめに

位置と環境

大開遺跡は、兵庫区大開通４丁目に位置する旧大開小学校の跡地で発見されました。

この付近は、標高約４ｍで、かつて東側を流れていた旧湊川などによってつくられた沖積地の上に立地しています。

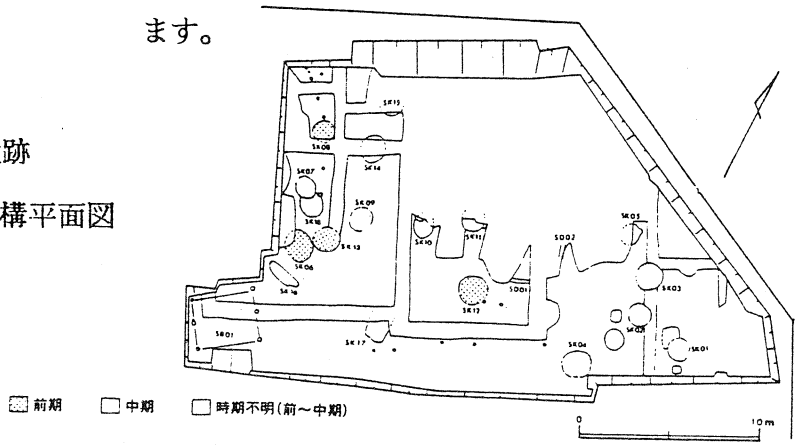
六甲山の南側の、東灘区から長田区にかけては、古くから市街地化が進み、遺跡はその下に埋もれていて、よくわかりませんでした。しかし、最近このような市街地化された地域でも発掘調査が、たくさん行われるようになって、各地で神戸の歴史を考えていく上で重要な成果が得られています。

周辺の遺跡

兵庫区内において、最も古い遺物は旧石器時代の石器で、会下山で採集されています。縄文時代の遺跡は、最近の楠・荒田町遺跡の調査で、縄文時代後期の土器が土坑から出土しています。

弥生時代になると、地下鉄工事の際に発見された楠・荒田町遺跡があります。この遺跡は、弥生時代前期後半から中期の遺跡で、貯蔵穴が多数確認されています。弥生時代中期になると、六甲山のふもと近くで、河原遺跡・熊野遺跡・東山遺跡などが知られています。また、六甲山から派生した丘陵の上にも、弥生時代の遺跡が立地していることが知られています。

楠・荒田町遺跡
第３次調査遺構平面図



大開遺跡位置図　（S＝1/25000）

2

古墳時代になると、古墳とよばれるお墓が築かれますが、4世紀ごろの会下山二本松古墳（前方後円墳）や夢野丸山古墳（円墳）などが、丘陵上にあります。下沢通の湊川遺跡では、後期の集落址が調査されています。

奈良時代以降の遺跡は、港を囲むように大きく広がっている兵庫津遺跡が知られています。平安時代ごろに大輪田（おおわだ）の泊（とまり）として整備され、それ以後港として繁栄していたといわれ、最近この付近でも調査が行われるようになってきました。湊山町付近は、平安時代に平清盛の「雪の御所」が置かれたところとして知られています。

このように、兵庫区内の歴史は古く旧石器時代にまでさかのぼることができます。

調査に至る経過

このたび、大開小学校と兵庫小学校の統合に伴う新校舎が、大開小学校跡地に建設されることになり、工事に先立ちためし掘りを行ったところ、地表下約1mぐらいのところから弥生時代から鎌倉時代の土器が見つかりました。そのため8月1日から発掘調査を実施してきています。

2. 調査の概要

現在発掘調査を実施している面積は、約1,500 ㎡です。これまでの調査から、3時期の生活の跡（遺構面）が見つかっています。そのため、層序（時代）の新しい順番に第1遺構面（江戸時代後半以降・18世紀）・第2遺構面（平安時代後半から室町時代・12～15世紀）・第3遺構面（弥生時代前期前半・紀元前3世紀）と呼んでいます。これまでに第2遺構面までの調査は終了しており、現在第3遺構面の調査を行っています。

第２遺構面遺構配置図

第　1　遺　構　面　　この面では、柱穴が少し確認されました。その柱穴からその時期を示すような土器は、出土しませんでしたが、柱穴の下の層から江戸時代の土器が出土していますので、それよりも新しいということがわかりました。

第　2　遺　構　面　　この面では、非常にたくさんの遺構が確認されました。溝状遺構 250本以上、土坑(どこう)約30基、柱穴・ピット約80基、井戸1基があります。

溝状遺構は、ほぼ方向を同じくしており、幅は50cm前後で深さは10〜50cmぐらいのものです。どういう理由でこのような多くの溝状遺構が掘られたのかはわかっていません。

柱穴も何ヵ所かで確認されていますが、建物跡にまで復元することはできませんでした。これは柱穴が溝状遺構のために、すでに壊されていたためと考えられます。

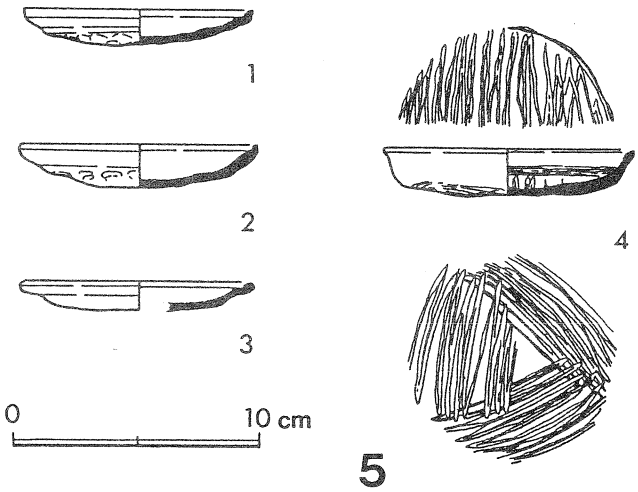
これらのことから、第2遺構面は柱穴や井戸などが存在することから居住域であったものと考えられます。その後溝状遺構が掘られ、居住域は大部分が破壊されたものと思われます。

井戸からは、12世紀ごろの土師器(はじき)や瓦器(がき)の小皿が出土しています。また、土坑や溝状遺構から鉄滓(てっさい)が出土しており、この付近で鍛冶が行われていたことがうかがわれます。

井戸1出土遺物

1・2・3　土師器小皿

4　瓦器小皿

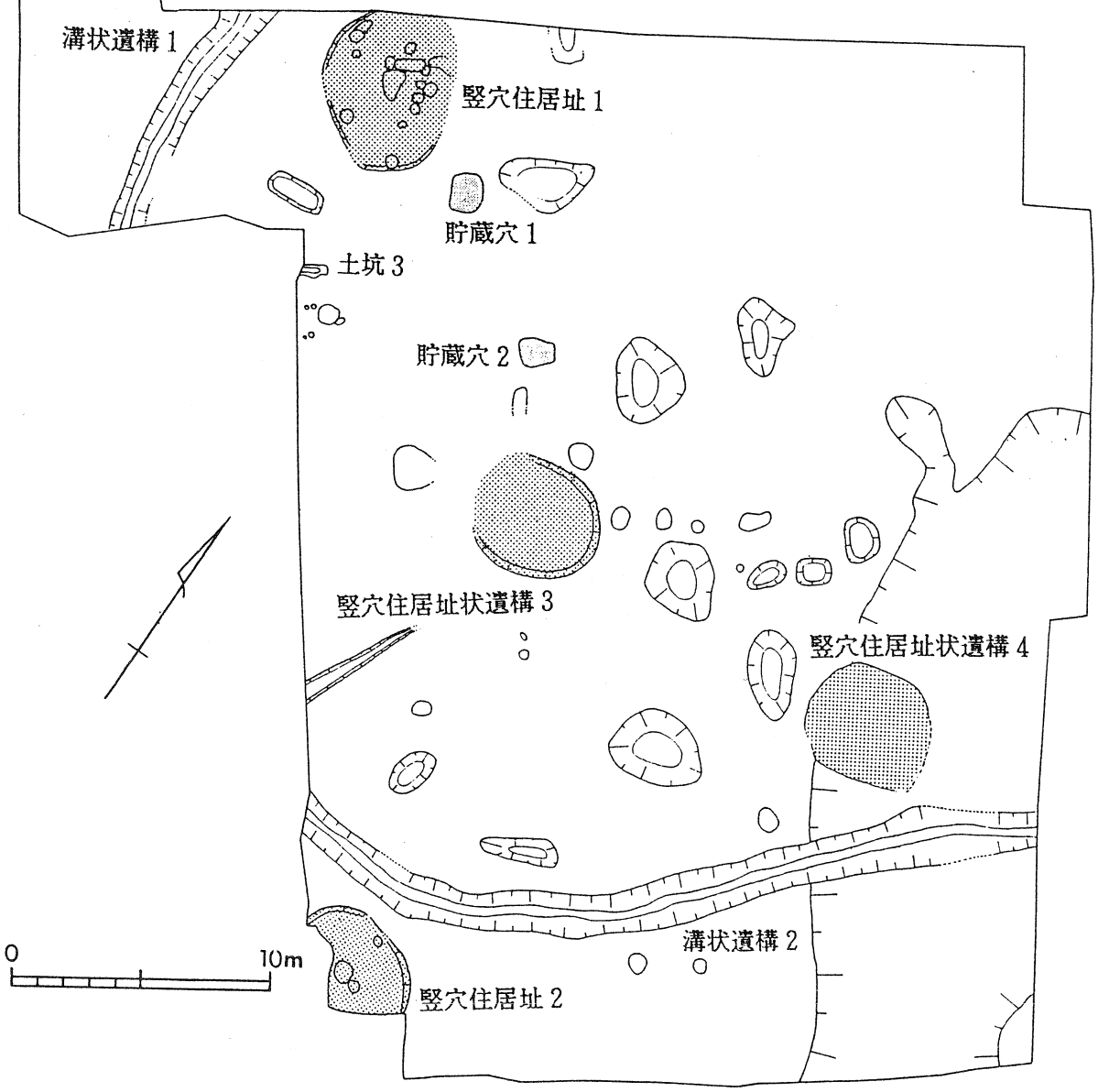


5

第 3 遺 構 面

第2遺構面の時代に掘られた遺構などのために、遺構が傷つけられていましたが、たくさんの遺構が確認されました。確認されたものは、竪穴住居址2棟、竪穴住居址状の遺構2基、貯蔵穴(ちょぞうけつ)2基、溝状遺構3本、土坑や不定形の落ち込み多数があります。これらの遺構からは、すべて弥生時代前期前半の遺物が出土しています。

第3遺構面遺構配置図



6

竪穴住居址１　北側の部分が調査区の外側に出ていることや、住居址の東側が第２遺構面の遺構によって壊されていたため、全体の規模は不明ですが、南北約７ｍ・東西約６ｍのやや南北に長い不正円形になるものと考えられます。周壁溝はなく、壁の立ち上がりも15cmほどしか残っておらず、後世にかなり削平されていることがわかりました。

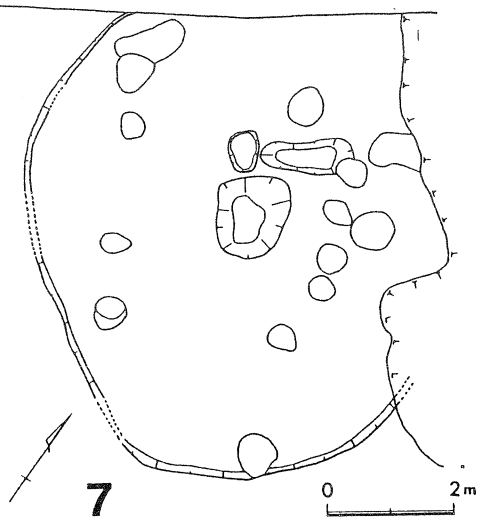
柱穴は、10本以上が確認されていますが、東側にその多くが集中しており、柱の建替えが行われたのかもしれません。

中央には、炉と推定される直径約１ｍの穴が確認され、中からは炭片や土器片が出土しています。

遺物は、中央の炉の付近にまとまって出土しており、弥生時代前期前半の甕や壺の破片が出土しています。また、結晶片岩製の石棒や石器を作った時にできた石くず（サヌカイト）もたくさん出土しています。

竪穴住居址２　この住居址も半分以上が調査地の外に出ているため、その規模は不明ですが、直径約６ｍあまりの円形の住居址と考えられます。中央には、竪穴住居址１と同じように炉が１基あり、炭片や土器片が含まれていました。

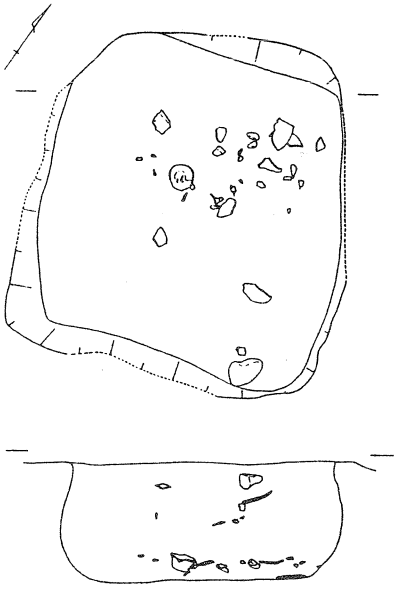
遺物は、弥生時代前期前半の甕や壺が出土しています。



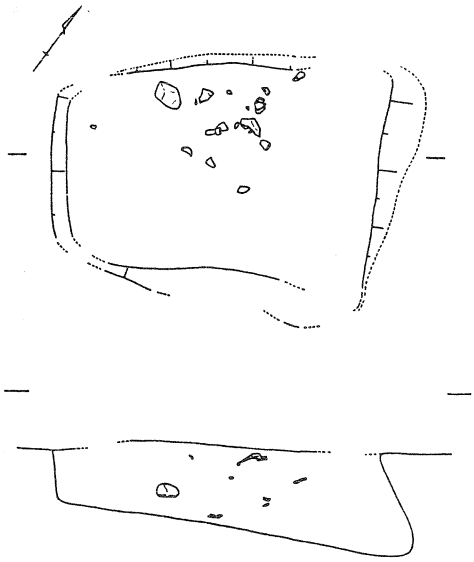
竪穴住居址１　平面図

貯蔵穴１，２　　貯蔵穴は１辺１ｍほどの方形のもので、中から石鏃（せきぞく）・石錐（せきすい）のほか石器のくずや土器が出土しています。

どちらも断面を見ると、袋状（上よりも下の方が広くなっている）のものです。



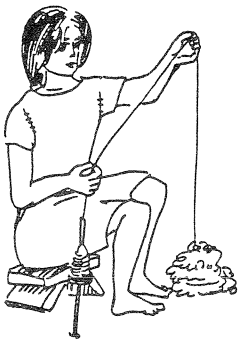
貯蔵穴１
実測図



貯蔵穴２
実測図

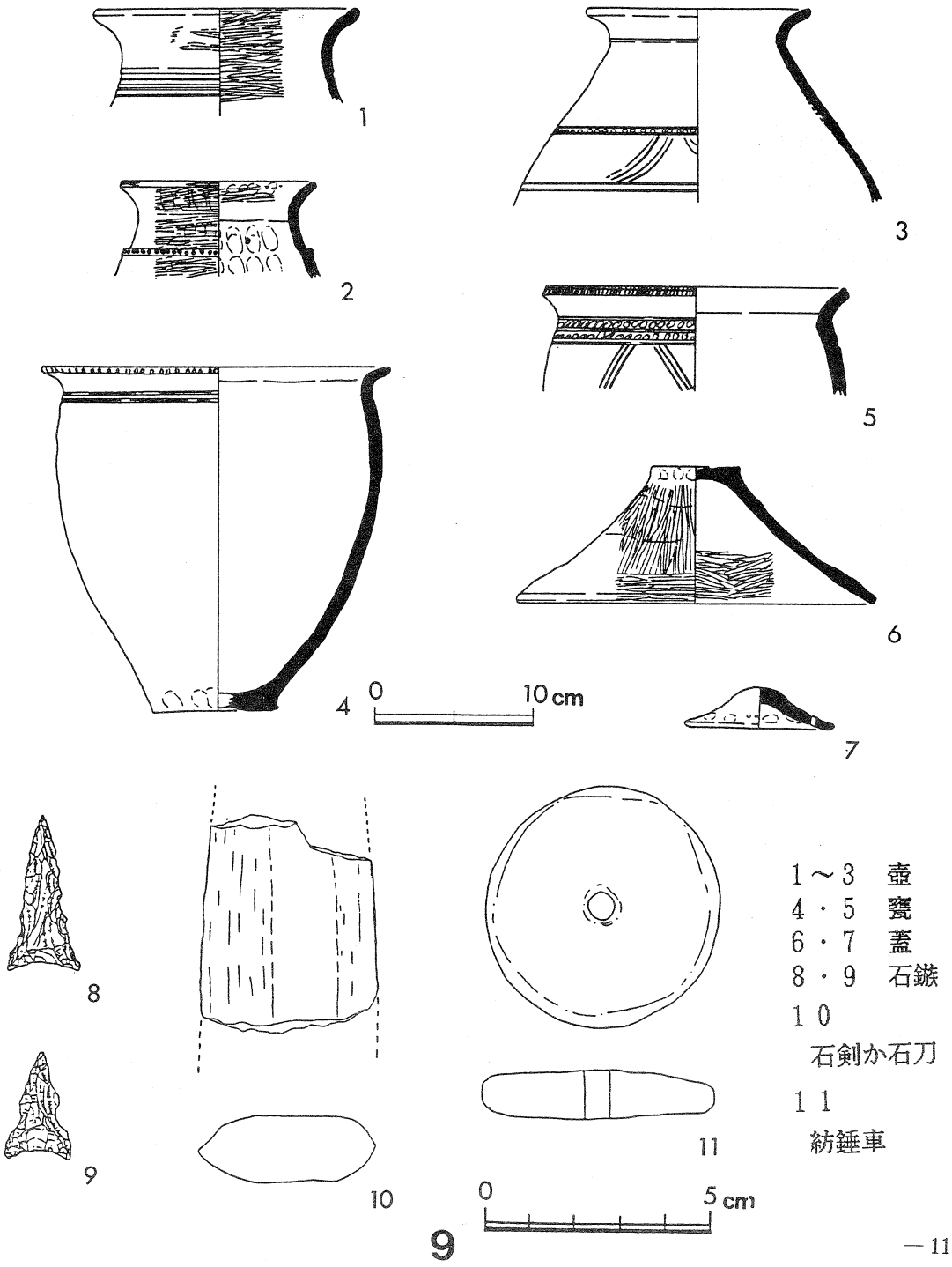
溝状遺構１，２　　断面形が逆台形からＶ字形になる、幅約1.5〜2mで、深さ約１ｍの溝です。溝状遺構１，２は調査地内では２つに分かれていますが、おそらく同一の溝であると推定されます。

この溝は、九州地方に見られる、集落を取り囲むような性格の溝であった可能性があります。



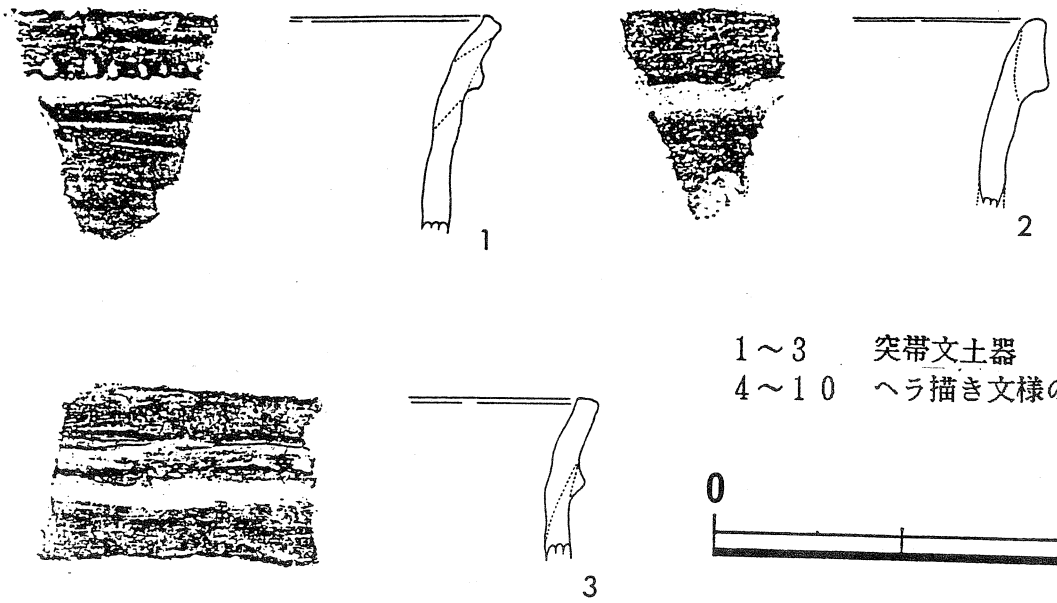
溝からは、弥生時代前期前半の遺物が大量に出土しており、中には木の葉の模様をヘラ描きした土器もあります。また、縄文時代晩期の突帯文（とったいもん）土器の系譜を引く土器も出土しています。そのほか糸を紡（つむ）ぐときに使用した紡錘車（ぼうすいしゃ）といわれる土製品や、石鏃などもあります。

出土した遺物　　弥生時代前期前半の土器として、壺・甕・鉢・蓋があります。石器には、石鏃・石錐・石斧・石棒などがあり、中でも土坑3からは弥生時代としては大変珍しい石剣あるいは石刀と考えられるものが出土しています。



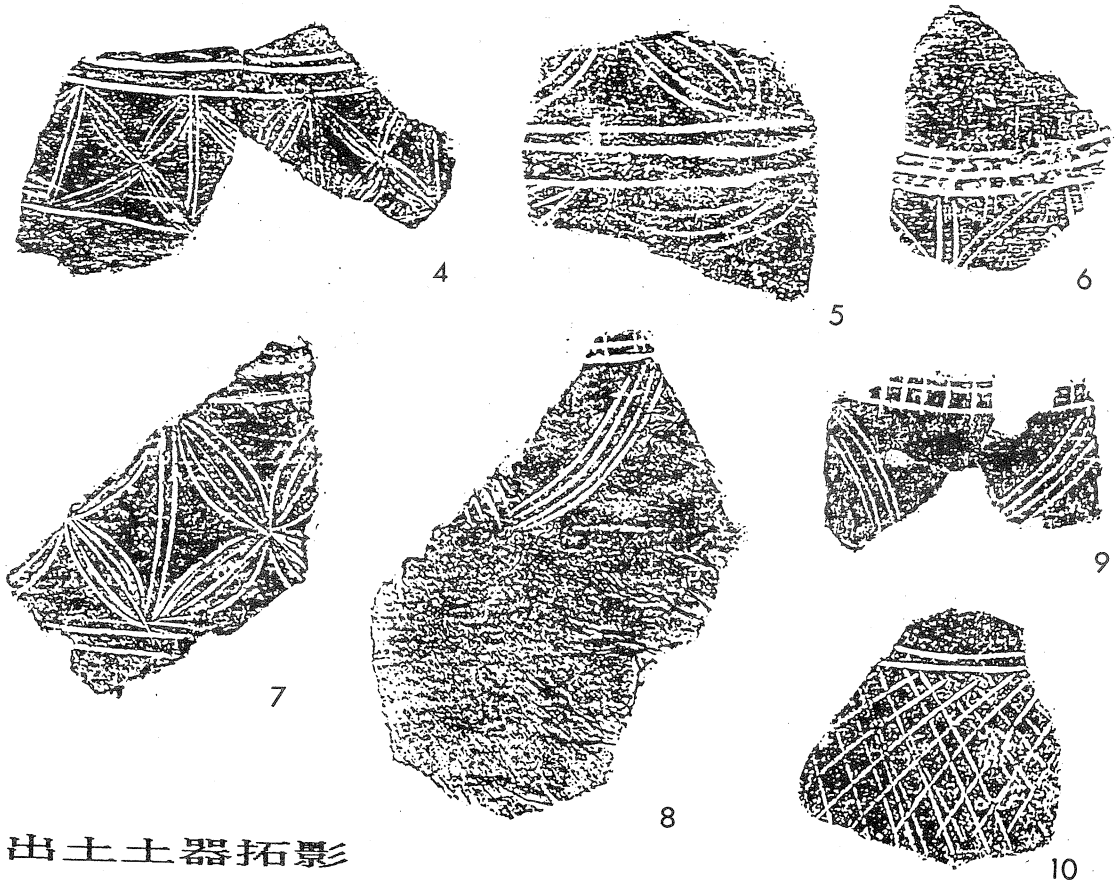
1～3　壺
4・5　甕
6・7　蓋
8・9　石鏃
10　石剣か石刀
11　紡錘車

9



1～3　突帯文土器
4～10　ヘラ描き文様の土器

0　10cm



出土土器拓影

10

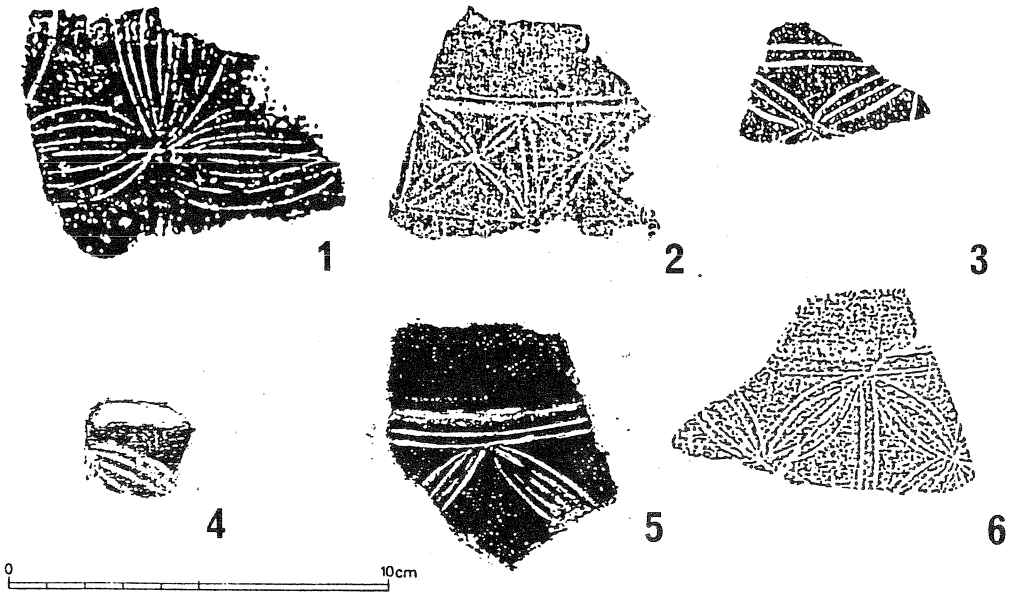
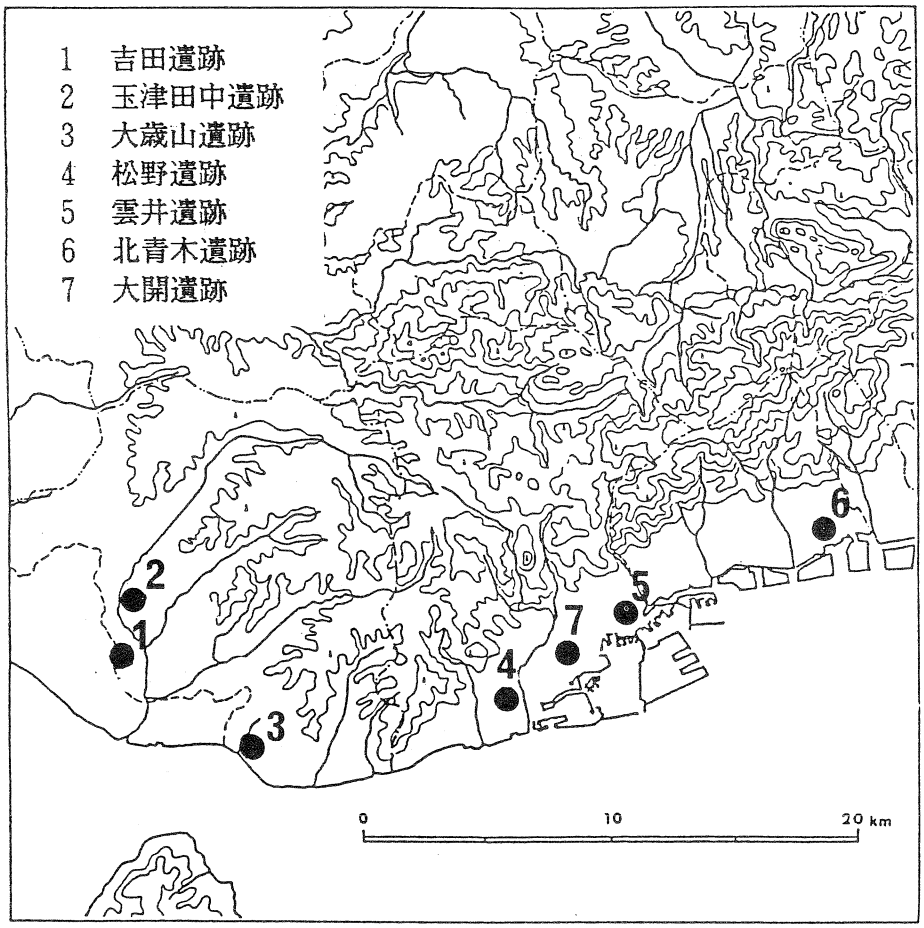
3. まとめ

現在調査を継続中で、最終的な結論を述べることはできませんが、これまでにわかったことをまとめてみます。

① 今回調査された集落址は、神戸市内では弥生時代の最古段階のものになります。

② 弥生時代前期前半の集落の様子が、ほぼ明らかにされたのは兵庫県下では初めての調査例となり、弥生時代前期前半の竪穴住居址は、県下で2例目の発見になります。

③ 弥生時代前期前半の遺構（竪穴住居址1の中央の炉・溝状遺構1，2など）の中から、縄文時代晩期の突帯文土器の系譜を引く土器が出土しています。このことは、縄文時代から弥生時代への移り変わりを考えて行くうえで、大変重要なものといえます。

④ 断面形が、部分的にV字状になる溝状遺構1，2は、集落のまわりを円弧を描くように確認されていることから、今回発見された弥生時代前期前半の集落は、九州地方などでみられるような環濠集落であることが考えられます。

参考資料　神戸市内の木葉文土器出土遺跡